

令和4年度厚生労働省老人保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業

# 若い世代(学生等)による高齢者の 生活支援に関する調査研究事業

## 先駆的事例集



学校法人京都橘学園  
令和5(2023)年3月

## はじめに

この事例集は、令和4年度厚生労働省老人保健事業推進等補助金 老人保健健康増進等事業における、事業テーマ「若い世代(学生等)による高齢者の生活支援に関する調査研究事業」の一環で作成されたものです。この事業は、学生をはじめとする若い世代が、カリキュラムや課外活動等を通じて、高齢者に対する生活支援や社会参加を促進する取り組みが円滑にまた継続的に実施できるために必要な要因を調査・分析するという目的で実施されました。

世代間交流は、我が国では1960年代から行われてきましたが、当初は子どもと高齢者のふれあいといった側面が強いものでした。しかし、その後の高齢化社会の急速な進展により、学生をはじめとする若い世代との交流により高齢者の生活をさらに実質的に支援する試みが数多く模索されるようになってきました。ただし、こうした試みには、継続性を中心に問題や課題があることも認識されており、系統的な検証は不十分な状況です。

そこで、日本各地で展開されている若者と高齢者の世代間交流の先駆的な事例を収集し、継続のコツ、しかけ作りの工夫などを共有するためこの事例集が作成されました。各事例は、それぞれの地域の特性に合わせて展開されているため、どの地域でもそのまま活用できるわけではないかもしれませんが、魅力的な活動やしかけ作りのアイデアがたくさん詰まっています。これらの事例から学び、実践に移していくことが求められています。

生活支援コーディネーターの皆様におかれましては、地域で支え合う仕組みを構築する際に、また高齢者の生活支援や介護予防の基盤整備を検討する際に、これらの事例を参考にしていただき、若者を味方につけることも是非考慮に入れていただけるとよいのではないのでしょうか。地域の活性化に向けて強力な助っ人となることでしょう。

## 事例集のねらい

- ① 自分たちの地域のニーズを掘り出す参考資料にする
- ② 若者と高齢者の世代間交流のしかけ作りと継続性の参考資料にする
- ③ 自分たちにできることはなにか、を見つける参考資料にする

## 各事例について

この事例集では、全国で先駆的な取り組みをされている12事例を挙げています。若者と高齢者の世代間交流の機会は、交流時間の長さを軸にすると、大きく4つのパターンに分類できます。異世代が同じエリアに住まい、日常生活に密着したかたちをとる「密着型」、日常生活の中で異世代が顔を合わせる場を提供する「居場所提供型」、高齢者の困りごとに若者が駆けつけて問題を解決する「駆けつけ型」、祭りや催しを開催することで世代間交流を深める「イベント型」です。多くは型を組み合わせせて活動を展開しています。

「密着型」・・・高齢化が進む団地や地域に若者が住む、といったスタイル。  
 「居場所提供型」・・・高齢者や若者が集える場を設け、常時開放するスタイル。  
 「駆けつけ型」・・・高齢者が困ったとき等に若者が訪問しサポートするスタイル。  
 「イベント型」・・・イベントを開催し、交流機会を設けるスタイル。

また、活動の設置母体も様々です。若者が大学生であることが多いため、大学が母体となることが多いですが、大学の中でも社会連携課などの事務課が連携窓口になる場合もあれば、授業担当の教員や、サークルの監督が中心となっているなど様々です。また、市役所等の行政が直接かかわる場合もあれば、第3セクターの機関が柔軟に活動を展開している例も多く見られます。このように、12事例からも様々な組織が有効にネットワークを活用する地域連携（産官学民連携）の実態が明らかとなっています。

そして、「ボランティア＝無償」という概念を覆す、サービスの担い手となる若者への報酬が提供できる、有償ボランティアのシステムを運営する事例も複数ありました。

表. 事例一覧

	事例	設置母体	報酬
密着型 + イベント型	事例1: 神奈川大学サッカー部 『竹山団地プロジェクト』	大学(サークル)・NPO	有償
	事例2: 神奈川県住宅供給公社 『大学との連携による団地再生』	公共事業所	
	事例3: 北海道札幌市+北星学園大学 『もみじ台団地プロジェクト』	市役所+大学(社会連携課)	
	事例4: 認定NPO法人 街ing本郷 『書生生活』	認定NPO法人	
居場所提供型 + イベント型	事例5: 一般社団法人 えんがお 『高齢者と若者の居場所』	社団法人	
	事例6: 豊中社会福祉協議会 『豊中あぐり』	社会福祉協議会	
駆けつけ型	事例7: 社会福祉法人 ゆうゆう 『学生と高齢者をつなぐ地域活動』	社会福祉法人	有償
	事例8: 株式会社Liberty Gate 『アシスタ～高齢者と若者のマッチング～』	株式会社	有償
	事例9: 千葉商科大学 『高齢者を対象とした生活支援サービスのマネジメントシステム構築』	大学(有志学生)	有償
	事例10: 岡山県立大学 『学生サークルTAMAGO;手作り弁当プロジェクト』	大学(サークル)	
イベント型	事例11: Community Nurse Company 株式会社 『地域おせっかい会議』	株式会社	
	事例12: 名寄市立大学 『おばあちゃんが伝えたい手作りレシピ』	大学(授業)	

## 12 事例の所在地

12 事例は全国各地の地域で活動展開されています。

各事例の情報収集は、現地取材(インタビュー)と活動内容の原稿提供の2種類で行いました。現地取材(インタビュー)は7事例[図内緑の枠]、原稿提供は5事例[図内オレンジの枠]です。

また、高齢者と若者の関係性が、個人と個人の場合(個×個)、個人と集団(個×集団)、集団と集団の場合(集団×集団)のパターンがありますので、以下の図に事例の所在と共に明記して紹介しています。

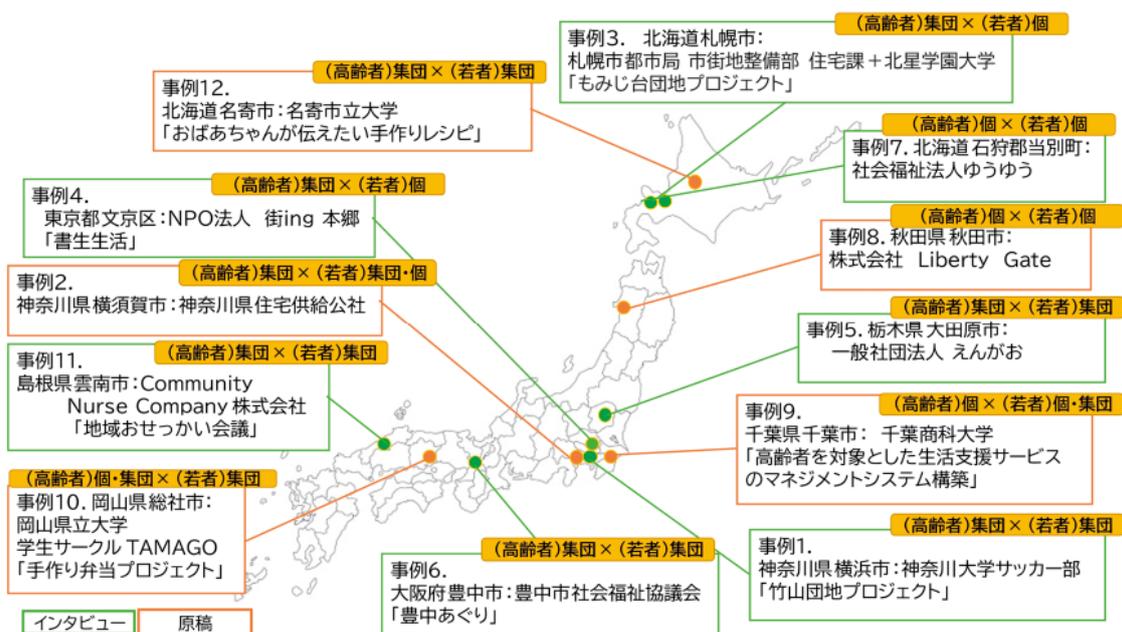


図.12 事例の所在

## 目次

### はじめに

#### I. 密着型 + イベント型 ～win-win な共同生活～

1. 神奈川県大学サッカー部 ……5  
『竹山団地プロジェクト』
2. 神奈川県住宅供給公社 ……14  
『様々な大学との連携による団地再生』
3. 北海道札幌市+北星学園大学 ……24  
『もみじ台団地プロジェクト』
4. 認定 NPO 法人 街 ing 本郷 ……33  
『書生生活』

#### II. 居場所提供型 + イベント型 ～集える場所が生きがいに～

5. 一般社団法人 えんがお ……43  
『高齢者と若者の居場所』
6. 豊中社会福祉協議会 ……52  
『豊中めぐり』

#### III. 駆けつけ型 + イベント型 ～動ける若者の活躍とマネジメント～

7. 社会福祉法人 ゆうゆう ……61  
『学生と高齢者をつなぐ地域活動』
8. 株式会社 Liberty Gate ……69  
『アシスタ～高齢者と若者のマッチング～』
9. 千葉商科大学 人間社会学部 ……74  
『高齢者を対象とした生活支援サービスのマネジメントシステム構築』
10. 岡山県立大学 学生サークル TAMAGO ……82  
『手作り弁当プロジェクト』

#### IV. イベント型 ～楽しく有意義な時間を共に～

11. Community Nurse Company 株式会社 ……89  
『地域おせっかい会議』
12. 名寄市立大学 ……98  
『おばあちゃんが伝えたい手作りレシピ』

### まとめ

## I. 密着型 + イベント型 ～win-win な共同生活～

若い世代による高齢者の生活支援の典型例のひとつが、高齢者と若い世代が1つ屋根の下で暮らす、あるいは団地など1つの同じコミュニティでともに暮らすことです。横浜市の緑区の竹山地区は JR 横浜線沿いの都市近郊の丘陵地帯にあり、大規模公社住宅である竹山団地がその中心となっています。この団地は、神奈川県住宅供給公社により開発され、昭和 42 年から入居がはじまった団地で、それからすでに半世紀が経過しています。従ってその入居者は 65 歳以上が 4 割以上を占めて、この地区全体が高齢化率の高い地域となっています。

この団地に、若い世代として、神奈川大学のサッカー部の学生が入居して、高齢者との世代間交流を進め、団地の活性化をめざす取り組みが行われています。このプロジェクトでは、そのために神奈川大学(要確認)と神奈川県住宅供給公社とが、連携・協定を締結し(2020 年 4 月)、サッカー部の学生が神奈川県住宅供給公社の所有する竹山団地にサッカー部寮として入居しています。同時に学生が共同生活をしながら、アイデアを出してイベントを企画運営し、地域の活動を担っています。高齢化が進む団地に学生が住むことで、同じ団地に住むという密着型の共生により世代間交流の機会が生まれるとともに win-win な共同生活により団地の活性化が期待されるプロジェクトといえます。

このプロジェクトの仕掛け人でもあり、サッカー部の活動を牽引されている大森西三郎監督にインタビューしました。

### 1. 神奈川大学サッカー部

#### 『竹山団地プロジェクト』



所在地:神奈川県横浜市緑区竹山4丁目3-1

プロジェクト開始:2020年

築50年ですでに高齢化率が45%以上に達している竹山団地を活性化したい神奈川県住宅供給公社と、社会貢献活動を通じて学生の成長を促したい本学の願いが一致して、公社と神奈川大学の二者で「連携・協力に関する協定書」を締結。

部員の学生が築50年の団地の空室に住んで、防災訓練や花火大会などの地域活動に参加したり、農業の活性化を目指して休耕地で野菜を栽培したり、商店街の清掃活動に参加するなど、地域貢献を意識したさまざまな取り組みを行う。

現在は17住戸を借り、2Kや3Kの住戸に2人もしくは3人が入居。社会人であるサッカー部のコーチも、寮監として入居している。残りは学生で、全員サッカー部員。

インタビュアー:松本 賢哉(京都橘大学)、マルティネス 真喜子(京都橘大学)

インタビュイー:大森 西三郎氏(神奈川大学サッカー部監督)

### ▼サッカー部員が、なぜ団地で寮生活を送るのか

【松本】

神奈川大学サッカー部は、部員の学生が築50年の団地の空室に住んで、防災訓練や花火大会などの地域活動に参加したり、農業の活性化を目指して休耕地で野菜を栽培したり、商店街の清掃活動に参加するなど、地域貢献を意識したさまざまな取り組みをしています。

なぜ、サッカー部員にサッカー以外の経験をさせようと考えたのですか。

【大森】

本学サッカー部は「中正堅実な人材の育成」という目的・目標と、「F+1」という理念を持っています。

中正堅実な人材の育成というのは、伝統と進取のバランスのとれた学生を育てようというような意味です。

理念のほうは、「F」はフットボールを指し、「+1」はフットボール以外の何かです。サッカーだけでなく、別の新たな何かに全力でチャレンジすることにより、選手としてはもちろん、人として大きく成長しようという理念です。サッカー部員たちが、団地内で共同生活を行い、地域のひとと交流し、地域課題の解決に少しでも貢献することは、こうした目標や理念の実現につながると考えました。

### ▼共同生活と地域活動が学生の成長に与える影響

【松本】

高経年団地の空き住戸をサッカー部の寮として活用する「竹山団地プロジェクト」は、どのようなきっかけで始まったのですか。

【大森】

築50年の竹山団地を活性化したい神奈川県住宅供給公社と、社会貢献活動を通じて学生の成長を促したい本学の願いが一致して、2020年に公社と神奈川大学の二者で「連携・協力

に関する協定書」を締結しました。2065年の全国の高齢化率は38.4%に達すると予想されていますので、すでに高齢化率が45%以上に達している竹山団地で地域の課題解決に取り組むことは、公社にとっても、また数十年後の未来を担う大学生にとってもSDGsな取り組みであり、人材育成の一番の機会になると考えたのです。

連携・協力の内容として具体的に想定していたのは、高齢者の居住に不向きな上層階の空き住戸をサッカー部員の寮に活用することや、団地の諸活動に学生が参加することなどです。

【松本】

学生を高齢者の多い団地に受け入れるにあたって、居住者の側の不安や心配はなかったのでしょうか。

【大森】

公社と団地自治会は、「大学生が入居してトラブルが起きないだろうか」と心配しつつも、高齢化に伴う課題が山積していますので、とりあえず受け入れてみようということになったようです。また、協定締結のずっと前から、公社と自治会の間では、学生の入居について何度も議論していたと聞いています。

【松本】

どれくらいの学生が団地に入居しているのですか。

【大森】

現在は17住戸を借り、2Kや3Kの住戸に2人もしくは3人が入居しています。社会人であるサッカー部のコーチも、寮監として入居しています。残りは学生で、全員サッカー部員です。空室をサッカー部の寮として利用するにあたっては、大学が公社から借りる形で法人契約を結びました。

【松本】

共同生活に対して、学生の反発や抵抗感はありませんか。

【大森】

共同生活に疑問を持つ学生には、「サッカーをやめた20年後、30年後に、職場でも家庭でも大事になるのはコミュニティ活動で培った力だぞ」と言って、説得しました。

私はライフスキルと専門的スキルを育てることが学生の資質向上につながると考えていて、ライフスキルについてはWHOが「日常のさまざまな問題や要求に対して、より建設的かつ効果的に対処するために必要不可欠な能力」と定義しています。つまり、高いセルフイメージ、コミュニケーション能力、問題解決力や批判的思考力、創造力などですね。

専門的スキルは、われわれで言えばサッカー選手としての能力ですが、スポーツ選手でなくても、各人の専攻分野や仕事によって求められる専門的な能力があると思います。

サッカー選手は、ピッチ上でいくら良いパフォーマンスをしようとしても、チームメイトとコミュニケーションできなければ、選手として高いレベルに到達できません。逆に、自分の置かれた場によって行動を変えることができる選手はチャンスを得ていきますから、団地で仲間と共同生活を送り、地域活動に参加することは、そのままサッカー選手としての、あるいは人としての

資質向上にダイレクトにつながっていくと思っています。

それに、最近の若者の風潮として、仲間と一緒に何かに取り組むのを楽しみたいという気持ちもあるようです。

【松本】

同学年の学生がルームメイトになるのですか。

【大森】

いいえ、上級生と下級生の組み合わせで同室者になります。学生は同じ学年の者同士で住みたがりですが、「先に1年住んだ経験者が部屋にいないと、申し継ぐことができない。文化の継承を考えると、それはどうなのだろうか？」と問題提起をすると、学生たち自身が先輩と後輩の組み合わせにすることを選びました。すると、下級生も上級生のそういう思いを受けとめてくれます。

#### ▼他学部・部署を刺激し、巻き込み、連携する

【松本】

そうしたサッカー部の活動は、他の学生にも影響を与えていますか。

【大森】

2021年、合同ゼミ等を通じてサッカー部と交流した人間科学部の小倉ゼミの学生たちが、スポーツ政策学生会議でプレゼンテーションを行い、最優秀賞を獲得しました。スポーツ政策学生会議というのは、スポーツ政策やスポーツ産業の振興を学ぶ学生がその研究成果を発表するもので、小倉ゼミの学生たちは「児童養護施設におけるスポーツ等を通じた支援活動」を提案しました。



神奈川大学サッカー部監督 大森西三郎氏

児童養護施設で暮らす子どもたちは、十分なケアを受けられないため、社会性の低さ、学力不足、孤独感等の困難を抱えているという研究結果があります。そこで、本学の施設や教員、サッカー部員の学生など、大学の資源やサッカー部が立ち上げた NPO 法人を利用して、そうした子どもたち向けのスポーツ教室や勉強会、ダイバーシティサッカー大会等を事業化してはどうかと提案したのです。私はそのプレゼンテーションの様子を見て、サッカー部の地域に根差した様々なステークホルダーとの共創活動は小倉ゼミの学生にも刺激を与えているのでは

ないかと思いました。

また、小倉教授はSDGsについて研究していますので、学生が団地で活動することの意義をアカデミックな視点で、サッカー部員たちに話してもらったことがあります。その講座を受けた後は、学生たちの理解が深まり、前向きな言動が多くなりました。

他の学部・部署との連携という点では、国交省の補助事業で地域の交流拠点をつくる際に、建物のコンセプトづくりと設計は建築学部、健康データの採取や社会調査は人間科学部、地域連携は学内の社会連携センターに参加してもらいました。

## ▼多彩な地域貢献活動に取り組む学生たち

【松本】

小倉ゼミの学生が提案した取り組みは、実際に動いているのですか。

【大森】

サッカー部員たちは、この提案を受けて、子どもを取り巻く社会問題への理解が深まり、最寄りの小学校での学習支援活動に参加しています。また、あるパン屋さんが「学生さんが団地で合宿しているなら」と言って、売れ残ったパンを寄付してくださったのをきっかけに、学生たちはそのパンを売り始めました。パンをいただくのはうれしいけれども、パン屋さんの持続可能性を考えたら、それでいいのか。それなら人が多く住む本拠地の団地でマルシェを開いて、自分たちが農園で栽培した野菜と一緒にパンを売ろう、というわけです。また、団地内にあるサッカー部の食堂の空き時間を利用したコミュニティ・カフェを企画運営した学生はこのパン屋さんをビジネスパートナーとしながらイタリアのエスプレッソメーカーの日本代理店の支援を受け、1日3時間程度で全5回のコミュニティ・カフェを企画して実施しました。この企画・運営を学士の卒業論文にまとめており、どんな論文に仕上がったのか楽しみで仕方ありません。蛇足ですが、合計で5万円程度の売り上げを残したことも伝えさせていただきます。

【松本】

その農園というのは、休耕地を利用した取り組みですね。

【大森】

そうです。横浜市内でも、農家の方々の高齢化により休耕地が増えていますので、2022年からその一部を借りて、サッカーJ3所属の「Y.S.C.C.横浜」と連携し、「Y.S.K.U.ファーム」を始めました。選手やコーチが耕作する農園です。

この農園で特別栽培農産物よりも厳しい栽培基準で育てた野菜は、横浜市内のレストランに卸しています。このレストランは地産地消にこだわり、できるだけ神奈川県産の食材を使った料理を提供しているので、フードマイレージの観点から考えても、まさにSDGsに合致した取り組みだと考えています。

【松本】

学生による地域貢献活動は、ほかにどんなものがありますか。

## 【大森】

横浜市の「ICT を活用した郊外住宅団地の新しいつながりの創出事業」という補助事業で、病院、通信会社、システム開発企業、スポーツセンター等と連携して運営しているスマホセンター主催のスマホ教室の先生役をサッカー部員が担っています。高齢者の方がスマホの操作を聞きたいときに参加してサッカー部員にスマホを教えてもらいつつ、コミュニティナースによる健康指導も受けられる取り組みです。

また、団地内の空き空間を学生食堂兼クラブハウスに活用しようということで、学生たちも工務店の方たちに教えられながらリノベーション作業に参加しました。

2022 年からは国交省の「住まい環境整備モデル事業」に取り組んでいます。この事業のテーマは「多様な世帯の互助を促進する地域交流拠点の整備」ということで、いままで少しずつ取り組んできた高齢者向けのスマホ教室、子どもたちの学習支援、防災訓練などの活動を 2023 年に新たに整備する予定の拠点を中心に行うもので神奈川県住宅供給公社が代表提案者となり、学校法人神奈川大学とサッカー部の外郭的な NPO 法人である KUSC が共同提案して採択されたものです。

交流拠点では、介護予防や生活支援、健康づくりにも取り組みます。人間科学部の教員が調査したところ、WHO が定めた精神的な健康状態や厚労省の健康運動実施率で見ると、団地居住者の 65 歳未満の約 40%が基準を達成していないという結果が出ました。

そこで、拠点の一つの「7 号店舗」には低酸素トレーニングジムを設ける予定です。低酸素トレーニングは、15 分行うだけで 1 時間トレーニングしたのと同程度の運動効果があると言われています。そもそも運動嫌いの人に 1 時間走れと言っても無理ですから、低酸素トレーニングジムで、短時間で効率的な運動の機会を提供したいと思っています。

## ▼継続のカギは、地域内でお金が循環する仕組みづくり

### 【松本】

先ほど、事業化のお話があり、さまざまなプロジェクトが動いているということでしたが、その運営資金はどのように調達しているのですか。

### 【大森】

サッカー部が独自に NPO 法人 KUSC を設立して、この NPO がそれぞれの事業の取りまとめをしており、利益が出ている事業もあります。拠点等の建物の所有者は住宅公社なので、NPO は公社に家賃を支払いますが、公社は一連のプロジェクトで利益をあげることを重視しているわけではなく、住み続けられるまちづくりの構想を念頭に置いています。また、この施設の主な会員となる住民の皆様からの使用料収入も見込めますし、国交省の補助事業ですから助成金も出ます。

新しく始める介護予防と生活支援は、横浜市の事業ですから、介護予防事業を行えば最大で年間 300 万円(家賃補助が月額 20 万円、活動に対して月額 5 万円)の助成を受けられる可能性があります。

このように、産官学民の連携によってそれぞれの強みを生かしながら施設の設置や今後の運営を行う計画ですので、居住者の方の利用料も安くできて、多世代交流や健康づくりなどに継続的に取り組める経済的裏付けができるのではないかと考えています。

【松本】

学生は、無償ボランティアとしてそれらの活動に参加するのですか。

【大森】

いいえ、アルバイト料を払います。スマホ教室の講師も、学習支援も、食堂の運営も、時給1,071円(神奈川県現在の最低賃金)です。食堂というのは、昨年5月に「14号店舗」に設けた厨房と30名程度の飲食スペースのことですが、それを運営するために食品衛生責任者を置く必要があって、現在5名の学生がこの資格を取りました。すると、時給が1,200円にアップする仕組みにしたので、学生にとっては励みになります。

そういう仕組みをつくと、学生たちも自分で時間をつくって参加するようになりますし、アルバイト料は学生生活を続けるための経済的な支えにもなります。報酬をきちんと支払うことは、活動を継続するうえで大事な仕掛けの一つだと思います。

#### ▼地域活動に無関心な学生との接し方

【松本】

これほど多彩なプロジェクトを、誰が統括しているのですか。

【大森】

いまは私が全体をマネジメントする形でコーチたちが各事業の担当としてハードワークしてくれています。他の学部を巻き込むときは私が所属するスポーツ戦略室の上司のお力を借りて各学部のキーパーソンに話をします。また、この竹山での一連の活動のパートナーである竹山連合自治会と神奈川県住宅供給公社の皆様とは頻りに打ち合わせを行っています。横浜市役所や横浜市の緑区役所の皆様にも様々なご相談に伺っており、具体の活動の調整につきましては、地区社協、地域ケアプラザといった外部団体の方々とも協議をします。

ただ、今後はより専門的になる事業を統括する人が必要ですから、しかるべき人を雇用してほしいと大学に要望しました。それも、教員ではなくスポーツクラブの支配人など、実務能力のある人がふさわしいと思っています。アンケート調査などは専門性のある教員に担当してもらえればうまく運びますが、その結果を踏まえてプロジェクトとして統括するには実務能力が必要ですから。

【松本】

うまくいかなくて困ったことや苦勞したことは？

【大森】

サッカー部員の中には、コミュニケーションが苦手な学生や、地域活動に関心のない学生もいて、入寮の時点である程度は納得していたけれども、住んでいるうちに「やっぱり感覚が違う」と言いだすことがあります。

そういう学生は、関係の近いスタッフや部屋の先輩部員、また同学年のリーダー役にそれとなく伝えてもらうなどあの手この手で試行錯誤しています。また、様々な活動の中でも汗を流すことを意識しています。その中での何気ない会話やフラットなやり取りを楽しむことがお互いの理解を深めますし、その活動のやりがいや楽しさを感じてもらうきっかけになるので、そういう接し方を意識しています。

当然ですが、こちらの言いたいことだけを言うのは避けています。

地域活動について、最初から理解して取り組んでいる学生もいれば、やりながら理解していく学生もいますが、地域で取り組んでいることがサッカーや自分の将来につながっていくのではないかと感じ始めている学生も多いので、時間はかかるけれども、丁寧に向き合っていくしかないと思っています。

### ▼学生の主体性や積極性を引き出すには

【松本】

サッカー部の学生は、部活や先輩との関わりを通して、地域活動がサッカー選手としてのパフォーマンスの向上や将来設計という形で自分のところへ返ってくることを学びますが、サッカーをしていない学生に対しては、どのような動機付けが有効だと思いますか。

【大森】

先日ミーティングに10分ぐらい遅刻する学生がいたので、10分遅れたことによって生じた関係者数×10分の合計時間を伝え、「たかだか10分だけど、ちゃんと来てくれたら、これだけのストレスが全部消えるんだよ」とか「逆に、遅刻しなければ何十人もものストレスを減らせる。だから開始時間を守ってくれる人にはお礼を言いたいぐらいだ」というような話をしました。

つまり、時間を守ることの意義と、それを実践している学生への感謝の気持ちを、きちんと伝えることが大事だと思うのです。

自分が分担している仕事をきちんと果たすことの意味についても同じです。たとえば食堂で食材の発注を担当した場合、たった1通の発注メールを打ち忘れたために、誰かが何時間もかけて食材の買い出しに行かなければならない事態になる。逆に、発注メールをきちんと打つことは周りに対する大事な貢献になる。そういう話を事あるごとにしていますね。

平たく言えば、「あなたの言動は集団の未来を変えるパワーを持っている」ことを伝えます(笑)。

【松本】

学生の主体性や積極性を引き出すうえで、コツのようなものはありますか。

【大森】

先ほどお話ししたように、感謝の気持ちをきちんと伝えることですが、ただ、学生がやることは往々にして詰めが甘い。たとえば自治会倉庫の片付けを依頼されると、数十人の学生がワーッと押しかけて、30分ぐらいで片付けてしまいますが、何かが抜けていたりする。そういう詰めの甘さを責めず、とやかく言わず、われわれ指導者がカバーして、学生に「やってる感」を

持たせる。詰め甘さはタイミングを見て注意しながら、じっくりと育てていくしかないと思っています。

もう一つは、居住者の方に喜ばれたことなど、ポジティブな情報は、担当した部員だけでなく、全体で共有できるようにしています。学生に限らず、人は誰かに喜ばれるとやる気が出ますから。

それと、学生が気分良く活動できるような気配りや場づくりも大事かなと思います。休耕地でファームを中心となってやっている学生たちには、まだアルバイト料を出せていないのですが、野菜の納入先のレストランのオーナーがおいしいディナーにその学生を招待してくれます。そういう場をつくり、生活を共にしながら、毎日ワイワイと暮らしています。



学生食堂兼クラブハウス

団地内のかつて魚屋だったスペースをリノベーションして活用している。

## 2. 神奈川県住宅供給公社

### 『大学との連携による団地再生』



相武台団地(相模原市南区)

#### 【経緯】

神奈川県住宅供給公社(以下、「当公社」)は 1950 年に神奈川県の住宅不足を解消するために神奈川県が設立した団体である。戦災からの復興、神奈川県の人口急増に対応するため、住まいづくりを行い、これまでに神奈川県内で賃貸住宅、分譲住宅、企業の社宅など、約 8 万戸の住宅を提供してきた。現在は約 13,200 戸の賃貸住宅の管理を中心とした事業を行っている。1960 年代～1970 年代前半の高度経済成長期に団地を大量供給したこともあり、現在所有する公社賃貸住宅の4割が築 50 年以上となっており、建物・設備の老朽化が進むとともに、公社賃貸住宅の契約者の平均年齢は 62.90 歳と、少子高齢化・人口減少が進行、エレベーターがないことや設備水準などから空室率が上昇し、コミュニティの弱体化も課題となっている。

当公社はこれらの課題解決に対応するための団地再生事業を 2013 年から本格的に取り組むこととした。団地再生事業においては、建替えやリノベーションなどハードの更新に加え、一部の団地では、暮らしの価値を高めるソフト的な取組みとして、居住者や地域を巻き込み、団地を中心とした地域の活性化を図っている。

団地再生事業には、イベントなど企画・運営するコミュニティ形成活動のプレイヤーが必要である。団地に長く住まい、地域課題や目的意識を共有しやすい自治会を窓口として、役員を中心にプレイヤーとして活動を開始していたが、自治会役員も高齢化が進んでいたことから、多世代交流の発生などを狙い、若い世代のプレイヤーの登場が期待されていた。しかし、若い世代

の住民は働き盛りや子育て中など活動のための時間の確保も難しく、そもそも居住人口が少ない。そこで注目したのが団地近傍の大学に通う学生である。当公社と近傍の大学が連携活動を行うことで、大学生が学ぶ専門分野の実践の場となり、豊かな学生生活を送りながら、団地ならびに地域の活性化につながるという相互の利点を見いだすことが出来ると考え、様々な大学との連携を始めることとなった。

### 【様々な大学との連携】

#### ●浦賀団地(横須賀市)(※1)

・神奈川県立保健福祉大学

2016(平成 28)年 4 月、当公社は「生涯自立プログラム(※2)」の推進にあたり連携協定を締結した。当公社が大学と連携するのは初めてであり、連携の取組み内容は次のとおりである。

(1) 公社経営の高齢者向け住宅・団地において、健康寿命延伸に資する栄養調査研究の実施、健康的な食事メニューの共同企画・提供、「食」を通じた介護予防・食育セミナーの実施

(2) 同大学の学生が「団地活性サポーター」(※3、以下、「サポーター」として浦賀団地に入居することで、新たなコミュニティの形成や強化に有益となる諸活動の展開

2022(令和 4)年 10 月末時点で、13 名の学生が入居している。(2016 年の連携から延べ 29 名が入居している。)

同大学とは、健康寿命延伸の取組みのほか、当公社主催の「団地ミニコンサート」での運営補助や自治会主催の夏祭りへの参加のほか、団地内の集会所において月 1 回高齢者の孤食を防ぐための食事会「どんぶりの会」を開催(コロナにて休止中)。サポーターが一品物の夕食を調理し、住民と一緒に食べる会で、定期的な開催により住民に定着し、サポーター主催でありながら、住民も準備に参加するなど、助け合う関係が構築できた。年に数回、団地の集会所などを使い学生が主催・開催するセミナーでは、大学で学んだ健康増進や未病など高齢化の進む団地に即した内容を、サポーター自身が講師となり住民にフィードバックしている。セミナー後は茶話会を開催することで、一方的な発信に終わらせず、住民から感想・要望・改善など生の声を聞き、次の企画～運営に活かしたことで住民からは非常に好評である。また、見守り活動として、ポストの郵便物、部屋の明かりなど、違和感があった場合は当公社へ通報するなどし、普段から住民⇄サポーター⇄公社の関係性が構築できているがゆえの成果となっている。コロナ禍においては活動制限がかけられる中、サポーターの知見を活かし、栄養バランスや誤嚥防止など健康増進に関するチラシを制作(隔月)。企画・校正・配布までサポーターが一貫して行い、サポーターの認知度向上・健康増進への寄与を目指している。

自治会や住民からは「高齢者ばかりだったところに学生が参加してくれるだけで新鮮でありがたい。」「話ができる機会を作ってくれて楽しく過ごせる。」などの声がある。また、サポーターやその卒業生からは「自分たちで団地を盛り上げるぞ!という意気込みだったが、逆にこちらが助けられる場面ばかりです。」「就職先で活かされる経験が多く、貴重な 4 年間だった。」など、双方から評価を得られた事業となっている。卒業後はサポーターとしての経験を活かし、

児童相談所や市役所等公的な職に就く学生もいる。

同大学との連携による取組みは、専門性を生かした高齢者事業での取組みだけでなく、空家の利活用と地域の活性化という課題に対応するものであり、以降、他団地でも順次導入している。



学生主催の食事会[どんぶりの会]

●緑ヶ丘団地(厚木市)(※  
・東京工芸大学

4)

2018(平成 30)年 1 月に団地活性化の連携に関する協定を締結した。同大学厚木キャンパスから約 2km の距離にある緑ヶ丘団地を拠点に、厚木市緑ヶ丘エリアの活性化を目指すことを目的とした「ミドラボ」と名付けた教育・研究プロジェクトを立ち上げ、大学が有するテクノロジーとアートの専門知識を活用し、学生によるリノベーションプランの設計や室内環境測定による住環境の向上検討、現代アートを用いた広告宣伝素材の製作などを行っている。空住戸・集会所の利活用検討や新たな住まい方の提案、各研究成果の共有、ミドラボオープンハウスと題した地域イベントなどを行い、双方にとって付加価値のある取組みとなっている。

2018(平成 30)年 11 月と 2019(令和元)年 11 月にミドラボオープンハウス(現地での作品展示やマルシェ、講演会などを行うイベント)を開催、2019(平成 31)年 1 月にはこうした取組みの成果を展示する「団地のリデザイン作品展」を、2020(令和 2)年 1 月には「学生デザイン住戸プラン中間発表会」を当公社ビル 1 階の Kosha33 スタジオで行い、引き続き取組みを進めている。

緑ヶ丘団地の「団地活性サポーター」として、2022(令和 4)年 10 月末時点で、8 名の同大学生が入居している。(2020(令和 2)年から延べ 9 名が入居している。)入居している部屋で研究を行っていたサポーターは「研究を行う部屋に住み、得られた成果を住空間改善に繋げていただけるのは研究をする上で嬉しいですし、やり甲斐を感じます。」と言葉を寄せ、担当して

いる先生は「地域の方たちと触れ合うなかで、机上では得られない視点が養える部分があるのではないかと評価している。

団地での活動は、毎月1回の定期ミーティング行っており、このミーティングに併せて、団地内のゴミ拾いを実施するほか、自治会が主催する団地内清掃活動や防災訓練に参加。また、サポーター自ら、熱中症の注意喚起のお知らせなどのチラシの制作、令和4年度からは団地集会所を使った交流企画「ミドリバ」を実施している。2022(令和4)年、サポーターの1人が自治会の役員に就任した。



学生デザイン住戸プラン中間発表会(撮影：高橋菜生写真事務所)

●相武台団地(相模原市南区)(※5)

・東京農業大学

2018(平成30)年7月以降、団地内商店街前の広場にあるコミュニティガーデンでの花の苗植えイベントや令和元年(2019年)に団地商店街に開設した多世代交流拠点「ユソーレ相武台」(※7)にて、多世代交流のワークショップなどを実施している。



ワークショップ豆のタオルハンガーづくり

・相模女子大学・相模女子大学短期大学部

2019(令和元)年12月に団地活性化の連携・協力に関する協定を締結した。相武台団地は団地内の高齢化率が48%と住民の高齢化が進行しており、地域活力・コミュニティ低下等の課題があった。同大学が有する人間社会学等の専門知識を活用し、団地内の商店街等との地域連携への参加や、「団地活性サポーター」の導入により地域コミュニティの活性化を目指した。サポーターとして入居した学生は、住民有志が運営する「ひよこども食堂」での調理・販売補助や、多世代交流拠点「ユソーレ相武台」や商店街での各種イベントの地域行事で活躍。自治会活動への参加(月1)としては、自治会主催の防犯パトロールに参加。住民と行動を共にすることで、サポーターの認知度向上や自治会の役割や意義について理解する場となっている。最近では、SNSでの発信(週1)も行っており、当公社運営のフェイスブックやインスタグラムの記事をサポーター持ち回りで作成。団地に住む学生目線での魅力発信に貢献している。自治会や住民からは「高齢者のみだったので学生が来てくれてすごく助かる。今後も自治会イベントにもどんどん参加してほしい」と期待を寄せられている。サポーターからは「大学での勉強と、実際にその仕事をしている人の経験からくる話が違うことが多く、すごく勉強になる。」との声が寄せられている。こちらの「団地活性サポーター」には、2022(令和4)年10月末時点で、6名の同大学生が入居している。(2020年から延べ7名が入居している。)





フレイルとサルコペニアチェック大人の体力測定会の様子

●伊勢原団地(伊勢原市)(※6)

・東海大学

2020(令和2)年1月に連携プロジェクトの協定を締結した。人口が減少し、国内需要も縮小していく中で、持続可能な社会が求められており、県西部などでは人口減少が進んでいる現状から、人口減少、超少子高齢社会に対応した団地施設の利活用を計画し実行することが求められる。神奈川県西部にキャンパスを保有し総合大学である東海大学と連携し、同大学が持つ「知的資産」と公社が持つ「不動産資産」を利活用することにより、県央・県西・湘南地域の団地の活性化および地域創生を目的にプロジェクトの推進を図るものである。入居率低迷により実施を予定していた伊勢原団地集約事業に関し、集約終了後の空き住棟(12号棟)を学生入居用に改修するため、建築学科の学生からリノベーション案(「専有部及び共用部」)を募集し、学内の講評会にて最優秀賞案決定。それをもとに他の学生案も取り込みつつ、設計事務所との打ち合わせや工事監理などにも学生に参加してもらいながら、当公社と共同で設計業務(各種法令等の確認・調整等)を行った。2022年4月より25名が入居、今後、団地活性化を図っていく予定である。

●竹山団地(横浜市)(※7)

・神奈川大学

2020(令和2)年3月に竹山団地を対象とした団地活性化の連携・協力に関する協定を締結した。これまで他団地においてサポーター制度に基づく学生入居を展開してきたが、他の郊外

型団地と同様に地域活動の担い手不足等に直面している竹山団地においても、当公社として、保有資産やこれまでのノウハウを生かした団地活性化に着手したいと考えていた。そのような状況の中、学生を「寮的」な環境で住ませ、共同生活や地域貢献を通じて総合的な教育を実践したい大学とのニーズが一致し、それぞれの強みを生かして団地活性化に貢献すべく同大学と当公社が協定を締結した。具体的な取組みとしては、公社賃貸住宅上層階の空家を法人契約で同大学に賃貸し、1 住戸あたり 3～4 名のサッカー一部所属学生が入居。学生生活・部活動と並行して地域活動に参画・協力するというものである。初年度は 5 戸、2 年目は 7 戸を賃貸し、2022(令和 4)年 10 月末時点では 44 名の学生が入居。今後も拡大していく予定である。また、団地内商店街の空店舗を 1 区画賃貸し、学生向け食堂として運営開始。今後は地域開放スペースとしても利活用していく予定である。

竹山団地では、連合自治会や各丁目自治会、商店街等により、1 年を通じてさまざまなイベントや活動が企画・実施されている。入居当初から学生が自主的に行っている清掃活動や挨拶、声掛けのほか、学生が企画・運営するスマホ教室の開催等により、既に住民との交流が生まれてきているところであるが、今後もイベント等に参加・協力する機会が増えることにより、これまで見られなかった多様な多世代交流が日常化していくことが期待される。

#### 【まとめ】

当公社では、2022 年 10 月末現在、7 大学と連携して地域活動に取り組んでいる。その中で見えてきたのは、地域ごとで抱えている課題や求められるものが異なっており、また大学や学生ごとでも持ち合わせる専門分野や得意分野が異なるため、どのような大学のどのような活動が地域に適しているかはまだ模索中である。まだまだ試行錯誤であり、何がマッチするかはチャレンジしてみないとわからない。そのため、住民、大学、公社がそれぞれ歩み寄って、コミュニケーションを取ることで、活動のヒントを得ている。

そうした中で課題となってくるのが活動の継続性である。入居した学年にもよるが、ほとんどの学生は 4 年以内に卒業により活動を終了してしまう。また、学生が入れ替わる中で、それぞれ活動へのモチベーションも異なるため、そのときのメンバーによって活動内容や量にばらつきが出てしまう場合もある。そうした状況下で活動を継続していくには、やはり地域とのつながり形成や活動の定着化が重要となってくる。地域とつながりが持て、関係性がしっかりと築くことができ、学生と住民同士でのコミュニティの形成が構築できるのであれば、学生自身の達成感にもつながり、住民とも友好的関係が生まれる。逆に、関係性が希薄だと、自分たちの活動が貢献できているか実感が湧かず、次のアクションに繋がらなくなる。よって、活動の継続性を維持していく上でも、先輩の学生や当公社が間に入り、後輩学生と地域住民をつなげる機会を設けていく仕組みをつくることが望ましい。

当公社も試行的に大学との連携を始めて 6 年ほどが経過したが、この連携事業やサポーター制度が地域コミュニティに寄与する効果として見えてきたのは「団地の住民や地域に活気を与

える」ことである。各大学との取組みが地域コミュニティの活性化に寄与し、団地・地域の困りごとに学生が取組むことで成果を得られることもあるが、団地に住んで活動するサポーターという存在に対し、どこの団地でも聞こえてくるのは、「若い人が団地に住んでくれたことで、地域に活気が生まれた」という住民の声である。活動によって何かしらの課題解決を目指すことも一つの地域コミュニティへの貢献ではあるが、ただ単に学生が同じ団地内で生活し、団地を訪れる機会があるというだけでも、住民にとって、特に高齢者にとっては活力を得るキッカケとなっているようだ。こうした小さなアクションの積み重ね、継続が、地域コミュニティにおける活動の重要なポイントであると考えている。

今後もこの取組みを継続していく中で、今後は住民と学生の交流が、イベント時だけでなく日常風景として団地内でみられるような形を目指していきたい。住民の高齢化に伴い、団地と地域、社会とが離れてしまいそうになるとき、学生がそのつながりを改めて形成するキッカケとなり得るのではないかと感じている。引き続き、学生が地域の役に立ちたいとチャレンジできる環境やフォロー体制を築くことで、これから社会へ出ていき、今後の日本を担うであろう学生自身の成長や活動につなげていきたい。

※1「浦賀団地」昭和45年(1970年)竣工:横須賀市浦上台2丁目27他、総戸数356戸、契約者の平均年齢60.04歳

※2「生涯自立プログラム」:公社が経営するケア付高齢者住宅ヴィンテージ・ヴィラの入居者が、入居後も健康であり続ける「生涯自立(食事・入浴・排泄の自立)」を目指した「食」「運動」「生きがい」の取組み

※3「団地活性サポーター」:大学での専門分野を活かしながら、公社の団地に居住し、地域コミュニティの活性化を団地活性サポーター(学生)、公社、地域住民とともに目指す団地サポーター制度。(入居条件等:学業に支障の無い範囲で地域活動や自治会活動への協力、自治会への加入、当公社へ活動状況の報告他)

※4「緑ヶ丘団地」昭和39年(1964年)竣工:厚木市緑ヶ丘4丁目2番他、総戸数400戸、契約者の平均年齢65.00歳

※5「相武台団地」昭和42年(1967年)竣工:相模原市南区相武台団地1丁目1番他、総戸数446戸契約者の平均年齢64.79歳(賃貸棟のみ)

※6 一般財団法人シニアライフ振興財団:公社の入居時自立型・介護専用型介護付有料老人ホーム、サービス付き高齢者向け住宅等の運営他

※7「ユソーレ相武台」相武台団地商店街で銀行が退去した区画をリノベーションし、令和元年(2019年)に開設した多世代交流施設。キッズスペース、デイサービススペースやカフェスペースなどいつでも立ち寄れる場所としている。

※8「伊勢原団地」昭和40年(1965年)竣工:神奈川県伊勢原市八幡台1丁目6-1ほか、総戸数339戸+「東海大学シェアレジデンス」12号棟令和4年(2022年)改修済、契約者

の平均年齢 67.76 歳

※9「竹山団地」昭和 46 年(1971 年)竣工:横浜市緑区竹山 1-1-1 ほか、総戸数 290 戸、  
契約者の平均年齢 66.45 歳(賃貸棟のみ)

北海道札幌市厚別区にある、もみじ台団地は建設されてから 52 年～37 年が経過し、近年高齢化が進み、空き室が目立つようになった団地です。高齢者の見守りと空室の利用促進という課題をクリアすべく、札幌市と近隣大学が連携し、大学生が居住できる環境が整えられました。2018 年から始まったこのプロジェクトの経緯、連携のあり方や課題などについて、札幌市都市局市街地整備部の石丸氏と、北星学園大学社会連携課の鹿熊氏、そして現在もみじ台団地に住む学生の松本さんにお話を聞きました。

### 3. 北海道札幌市 + 北星学園大学

#### 『もみじ台団地プロジェクト』



もみじ台団地に住む学生たち

#### 1) 北海道札幌市都市局市街地整備部

インタビュアー：松本 賢哉(京都橘大学)、マルティネス 真喜子(京都橘大学)

インタビューー：石丸 卓哉氏(札幌市都市局市街地整備部 住宅課管理係)

#### ▼自治体が提起した、団地活性化と世代間交流の取り組み

【マルティネス】

札幌市は、市営もみじ台団地の空き部屋を学生に提供しています。なぜ、この事業を始めた

のですか。

【石丸】

もみじ台団地は、総戸数が約 5,500 戸と、道内はもとより、全国的に見てもかなり大規模な団地です。建設時期は 1971(昭和 46)年から 1986(昭和 61)年で、この時期に建てられた公営住宅の多くにみられるように、5 階建てで、エレベーターがありません。

入居者の高齢化も進み、もみじ台団地の高齢化率は 50%以上となっています。なおかつ 4 階や 5 階といった上層階は高齢の入居者から人気がなく、空室が目立つようになり、高齢者の見守りと空室の利用促進は行政の長年の懸案事項でした。

何か良い方策はないものかと考えていたところ、「京都市営醍醐中山団地は、京都橘大学と連携して、学生を受け入れている」という話を聞き、市としてその事業の調査を行い、検討を重ねた結果、もみじ台団地でも取り組んでみようということになり、2018(平成 30)年に実施に至りました。学生に住んでもらえたら、空き部屋対策と、担い手不足に悩む自治会への支援を、同時に進められるのではないかと考えたのです。

提携先の大学については、もみじ台団地が立地する厚別区内唯一の大学で、以前から学生のボランティア活動等でご縁があった北星学園大学に相談したところ、快く引き受けていただき、大学としても取り組んでくださることになりました。

ですから、まず市役所から大学と団地自治会に提案をして、話を進めていったという経緯です。

## ▼自治体によるきめ細やかな調整作業が、交流を支える

【マルティネス】

団地の活性化や空室対策は、全国各地で課題となり、さまざまな取り組みも行われていますが、札幌市のように、地方自治体を中心になって動いているのは稀有なケースで、ほとんどは NPO を立ち上げるなど、民間が動かざるを得ない状況です。自治体ならではの制約や難しさがあったのではないのでしょうか。

【石丸】

兵庫県神戸市も同様の取り組みをされるなど、先行事例はあるものの、札幌市営住宅は本来、若い学生が 1 人で入居することができない決まりになっていました。

しかし、事前に国土交通省から「地域の課題解決のためなら、公営住宅本来の目的外であっても、本来の使い方や用途を阻害しない範囲で使用してもよい」というような趣旨の通達が出されていて、もみじ台団地はそれに合致することから、北海道開発局とも相談して、問題はないと判断したわけです。

当市の場合は、団地自治会と大学の調整に苦労しました。

たとえば事業がスタートした頃は、前例のない新規事業ですから、どういう効果があるのかを予測したり評価するのは困難でしたし、生活スタイルの違う高齢者と学生がうまくいくのか、学生は団地生活になじめるのか、学業がおろそかにならないか等々、調整事項がたくさんありました。それらについては、市から丁寧に説明して、双方とも「大丈夫ではないか」と納得して

いただきました。

大学側は、学生の住宅として使用するにあたって設備に問題はないのか、住戸の賃貸借関係はどうするのか、といった点について心配されていまして、照明器具・シャワー・ガスコンロ等の設置は市のほうで行いました。

賃貸借については、まず大学が入居者を募集して、下見や入居希望学生の面接は大学と市が共同で行いますが、入居学生との賃貸契約は札幌市が結びます。大学に貸して、大学が学生に貸すという形を考えていましたが、現在の形にしています。

ちなみに、家賃は市営住宅で最も低収入の方の額を適用して、月額 12,000 円です。駐車料金は月額 3,800 円で、現在入居中の学生で自動車に乗っている学生もいます。

【マルティネス】

かなり安い家賃と駐車料ですが、賃貸物件を扱う不動産業界の反発はなかったのですか。

【石丸】

「低家賃で提供するのでは民業の圧迫ではないか」という批判がありましたが、事業の目的を説明して、納得してもらいました。それと、北星学園大学の場合は、新さっぽろ駅から地下鉄で 2 駅目が最寄り、もみじ台団地から離れているので、民業にはそれほど影響していないと思います。

【マルティネス】

自治会との調整について、どのような工夫をされましたか。

【石丸】

もみじ台団地は広いので、自治会も複数あります。それらの団地をまとめている自治連合会の会長さんから比較的協力的な自治会を教えていただくなど、できるだけ下調べをしてから、最も適していると思われる自治会にお願いに行きました。

## ▼広い部屋に安く住めて、社会勉強もできる—学生の声

【マルティネス】

その後、提携大学は増えましたか。

【石丸】

札幌学院大学も、厚別区内に新キャンパスができたので、今年 4 月から参加してくださっています。

【マルティネス】

現在、入居学生は何人ですか。

【石丸】

これまでの入居の実績ですが、昨年度までは 8 名でしたが、今年度は札幌学院大学の学生も加わって、合計 11 名です。居室は 2DK ですから、2 人でシェアすることも可能ですが、現段階でそのケースはなく、1 人につき 1 住戸となっています。

【マルティネス】

入居学生の男女比は？

【石丸】

学生の入居枠は2つの大学に7戸ずつ用意しています。現在、両大学3名ずつ、計6戸に入居中で、男女の内訳は男子3名、女子3名です。それを見る限り、男女どちらにとっても住みにくくはないのかなと思っています。

【マルティネス】

入居条件はありますか。

【石丸】

いちおう「自治会活動に積極的に参加すること」としてはいますが、あくまでも学業優先ですので、強制はしていませんが、わりあい地域活動に関心のある学生が入居されることが多いですね。もちろん、なかには安い家賃で住めることが動機だという学生もいますが、結果的にいろいろな地域活動に参加していきます。学生の住戸については、大学とも相談して、通学の利便性に配慮するという観点から、新さっぽろ駅に近い棟を選んでいきます。団地から新さっぽろ駅まで、バスで約10分、徒歩で30分ほどですので、学生の札幌市内での移動手段はバスや地下鉄等の公共交通機関か自転車です。

【マルティネス】

途中で退居する学生はいますか。

【石丸】

ほとんどの学生は卒業まで住み続けます。コロナ禍で感染拡大が激しかった時期は、「収束したら戻ります」と言って、いったん退居した学生もいます。

【マルティネス】

入居学生の反応はどうか。

【石丸】

とても喜ばれています。先に入った学生から「ここはいいよ」と紹介されて、入ってくる学生さんもいますね。先月は入居学生が一気に増えたので、両大学と入居学生の顔合わせのようなことを行いました。

### ▼若い人がいてくれるだけで元気が出る—住民の声

【マルティネス】

団地の高齢者の方の反応はどうか。

【石丸】

「自治会活動の人手が必要な時に手伝ってくれるので、すごく助かる」という声だけでなく、「若い人がいてくれるだけで元気をもらえる」という声もあって、とても好評です。

自治会活動の担い手不足や地域コミュニティの弱体化という問題に対して、どれくらいの影響があるのか、正確なところはわかりませんが、プラスに働いているのかなという感触ですね。

学生にとっても、安い家賃で入居できて、地域の自治会活動を通じて社会勉強ができるとい

う利点があるようです。

【マルティネス】

この事業を進めるうえで、何か問題は発生しませんでしたか。

【石丸】

事業を開始した頃、自治会の皆さんの期待が膨らみすぎて、学生と顔合わせをした席上で、どれほど学生が来るのを待ち望んでいたか、どれほど期待しているか、ということ熱く語られたんですね。学生は、その勢いに圧倒され、期待に応えられるのだろうか不安に感じて、萎縮してしまいました。

それで、市として自治会の方々に「学生は積極的に自治会活動に参加してもらっても、あくまでも学業が優先なので、その辺は配慮をお願いしたい」という話をしました。そうすると、自治会の皆さんも理解してくださって、積極的な活動参加を求めるのではなくて、どちらかといえば学生を見守るような姿勢にシフトしていきました。



団地自治会の清掃作業に参加

その後は、特に問題なく進んでいて、こうした取り組みにありがちな騒音問題も、もみじ台では起きていません。

#### ▼学生・大学・自治会の三者が定期的に情報共有と意見交換

【マルティネス】

大学との連携はスムーズですか。

【石丸】

大学が団地自治会と共同でイベントを開催するような段階には至っていませんが、両大学とも、とても協力的なので、市としては助かっています。

【マルティネス】

学生は基本的に4年で入れ替わるので、継続性という点で困難があると思います。それについて、どのような工夫をしていますか。

【石丸】

学生と大学と団地自治会の方が、定期的に一堂に会し、何か問題が起きていないか、それぞれの状況はどうか、どんな取り組みをしているのか等の情報を共有し、意見交換もしています。

## 2)北星学園大学 社会連携課

インタビュアー:マルティネス 真喜子(京都橘大学)

インタビュイー:鹿熊 裕志氏(北星学園大学 社会連携課)

松本 紗奈さん(北星学園大学 3 年生)

### ▼大学として地域に貢献できることを探る

【マルティネス】

北星学園大学は、札幌市と連携して、市営もみじ台団地の空き部屋に学生が住み、団地コミュニティの活性化に協力する事業に取り組んでいます。これは、どのような経緯で始まったのですか。

【鹿熊】

本学には、札幌市と連携して地域活性化に取り組んでいる教員がいて、その教員から「もみじ台団地は高齢化の進行が著しい。大学として何かできることがないだろうか」との問題提起を受けていたところ、札幌市住宅課さんからプロジェクトのお話をいただきました。主に大学は入居学生の募集を担っています。本学には社会福祉学部があり、ボランティア活動も盛んですので、興味のある学生に声かけをしながら進めています。

最初は留学生の居住先に活用できればとも考えていましたが、本学の場合、滞在期間が半年から 1 年程度の交換留学生が多いため、おそらく彼らは地域活動をする時間が捻出できないだろうと判断し、本来の在学学生を募集する方向に転換しました。

【マルティネス】

現在の入居学生は何人ですか。

【鹿熊】

最も多いときは 5 名で、現在は 3 名です。例年、3 名から 5 名で推移しています。大学は入居者の募集はしますが、賃貸契約は札幌市と学生の間で結んでもらいます。

### ▼学生にとって地域活動はよい刺激

【マルティネス】

松本さんは実際に入居中ですが、なぜ団地に住もうと思ったのですか。

【松本】

大学入学時のオリエンテーションで、「もみじ台団地に住みませんか」というチラシをもらったんですね。それを読んだら、家賃がすごく安いし、一人暮らしに興味もあったので、住んでみようかと思いました。それで 1 年生の 8 月から住み始め、もう 2 年以上住んでいますね。

【マルティネス】

住み心地はどうですか。

【松本】

コロナ禍の最中に引っ越してきたので、地域の方々と関わるのは清掃や除雪、ラジオ体操の

ときくらいしかありませんが、もしコロナ禍でなければ関わる機会はずっと多いのかなと思います。

私が住んでいる棟のまとめ役の方は、SNSで「お友だち」になって、応援メッセージや季節の動画などを送ってくださるし、たまたま同じバスに乗り合わせたときに私が「きょうは面接の練習なんです」と言うと、「自分に自信を持っていいよ。大丈夫だよ」と励ましてくださいます。入居したばかりの頃はホームシック気味だったので、温かく接してもらえるのがうれしくて、気持ちも落ち着き、元気が出てきました。

それと、私は高校時代から行事の運営を手伝う裏方のような仕事が好きなのですが、2022年は団地の夏祭りのお手伝いができて、うれしかったです。

【マルティネス】

どんなお祭りですか。

【松本】

団地自治会のみなさんは、ふだんから集会所に集まって提灯を作っていて、夏祭りのときはそれを公園の砂場に立てて、中にロウソクを入れて灯りをともしたり、飲み物や焼き鳥の屋台を出したりします。

にぎやかなイベントが好きではない居住者もおられるので、時にはという苦情もあるそうですが、みんなでけっこう楽しくやっていますね。

私は、ふだん団地内ではSNSで「お友だち」になった人くらいしか関わりがありませんが、夏祭りのときはハーモニカの演奏を趣味にしている方が「演奏会をしてみたい」とおっしゃったので、先輩と一緒にバックでマラカスとタンバリンを担当して、その方と合奏しました。そうすると、いろいろな方が椅子を持ってきて、聴いてくださったんです。そういう形で多くの方と交流できて、私自身もいい刺激を受けているなと思います。

## ▼学生と住民のマッチング

【マルティネス】

学生と団地のマッチングで、うまくいかなかった事例はありますか。

【鹿熊】

松本さんのように、自治会に面倒見のよい方がおられる場合はスムーズですが、この事業がスタートした頃に、入居希望学生と集会所で対面したとき、学生に向かって「声が小さいぞ」というような言葉をかけられたことがありました。

もちろん、その方は学生を励ますつもりでおっしゃったのですが、学生が萎縮してしまって、結局、入居を辞退してしまったんです。

松本さんが団地生活になじめているのは、もちろん彼女自身の明るさや努力もありますが、その現場に居合わせた自治会の方が、学生の心情を汲み取って、「団地に若者を迎え入れるときは、こんなことに気を遣ってあげたほうがいい」と、居住者の方々に呼びかけてくださったことが活きているのだらうと思います。

うまくいった例としては、先に兄が入居して、兄から「ここは住み心地がいいよ」という話を聞いた弟が、その後に団地に入居して、いまも住んでいます。お兄さんの口コミ情報の成果ですが、彼自身も地域住民の方の面倒をよくみて、うまく共生しています。

もみじ台団地は、高齢化もさることながら、空室率も高く、居住者のみなさんも「なんとかして改善したい」と思っておられて、その気持ちが空回りではなく、ちゃんと回り始めているような気がします。

#### ▼ウイークポイントは建物や設備の古さ。でも、大きなメリットもある。

【マルティネス】

この事業を継続させるために、何が課題だと思いますか。

【松本】

以前、2人の女子が見学に来てくれたのですが、結局、2人とも入居してくれませんでした。その理由を聞くと、建物の古さが気になったようです。築後40年とか50年ですから、たとえば水道の蛇口は2つあって、それぞれ水かお湯しか出ません。しかも、お湯のほうは熱湯が出るんです。昔はそれが当たり前だったのかもしれませんが、いまは水とお湯の混合水栓がほとんどですし、特に女性はお湯の蛇口からいきなり熱湯が出てくるのは不便に感じると思います。お風呂も、浴槽は月極のリース契約で、床はコンクリート打ちです。いまの学生は、新築の戸建住宅で育って、大学に入ったら快適で便利なワンルームマンションで一人暮らしをしたいという人が多いので、もみじ台の部屋はちょっと厳しいかなと思います。私は全然気にしませんが、たしかにお湯の温度が調節できないのはちょっと不便で、私の妹も、「ここには絶対に住めない」と言いますね(笑)。

【鹿熊】

当初拝見したお部屋は、お湯を沸かす風呂釜はあるけれども浴槽はリース、シャワーはない、という状態でしたので、シャワーの設置をお願いしました。

学生がDIYで内装を自分の好みに変えたりできれば、この事業の魅力のアピールできて、入居学生も増えるのではないかと思います。

学生の中には、自分で工夫をするのが好きな人がいるので、ちょっとした改変が可能になれば、この事業の魅力をもっとアピールできるのではないかと思いますね。

とはいえ、これだけ広い(2DK)の部屋を低価格で借りれることは大きなメリットです。

一般的な事業では学生と事業主体のマッチングが、なかなか噛み合わないというのが現場の実感です。たとえば松本さんのような積極的な学生と、面倒見のいい自治会の方がいて、初めてうまくいくのですが、そのピースがそろえるのは難しいので、そこを行政の方がどう先導していただけるかですね。その意味で、今回、札幌市の担当の方が学生にも自治会にも気を配り、柔軟に対応してくださいました。これはとても大事な動きだったと思います。

【松本】

学生の立場から言えば、「就職活動の履歴書にボランティア活動のことを書くために、ボラン

ティアサークルに入る」と言う人もけっこういますが、団地に住んで地域活動に参加すれば、他の学生とは全然違うことを履歴書に書くことができ、自分も経験をつめます。そういうメリットを強調すれば、入居希望者も増えるような気がします。

#### ▼行政が地域活動のハブに

【マルティネス】

事業の今後について、どのような展望を持っていますか。

【鹿熊】

本学としては細くても良いので長く続けていきたいと思っています。

むやみに入居学生の数を増やすよりも、すでに入居している松本さんたちが団地のコミュニティ活動にほとんど参加できていない現状を踏まえて、コロナ禍でも地域活動に参加できる形を追究するほうがよいのではないかと考えています。

この事業は区内の他大学も参加するなど拡がりを見せていますが、活動のハブになっている札幌市住宅課さんが柔軟な対応をしているからではないでしょうか。

【マルティネス】

松本さんは、卒業まで1年余りですが、この団地でどんな経験を積みたいですか。

【松本】

今年の夏までは清掃と除雪とラジオ体操に参加するだけでしたが、やっと夏祭りに参加できて、もしかしたら今度の冬のお祭りも開催できるのではないかと期待しています。そのときには、夏祭りよりもっと深いところまで関わりたいですね。

こんな貴重な体験ができる場は、ふつうの大学生活ではなかなか得られないので、卒業するまで大切に過ごしたいと思います。



夏祭りを手伝う

東京大学のお膝元、本郷で活躍する認定 NPO 法人街 ing 本郷。地域を活性化すべく様々な専門職や人々をマッチングして、多彩な活動を展開されています。その中で、学生が本郷に住み地域住民と交流を深めるマッチング事業「書生生活」があります。「書生生活」の運営や工夫、地域の活性化にむけた取り組みのあり方について、代表理事 長谷川氏に話をききました。

#### 4. 認定 NPO 法人 街 ing 本郷

### 『書生生活』



地域住民と談笑—書生の訪問

#### 認定 NPO 法人 街 ing 本郷

所在地： 東京都文京区本郷 4-36-5

沿革： 2010 年 12 月設立

<http://m-hongo.com/>

#### 事業内容：

街 ing 本郷は文京区本郷地区を拠点として活動するまちづくり NPO。

本郷地区における諸地域活動の支援及び各種イベント等を企画立案、実行し、地域住民の生活基盤である商店街の活性化を支援するとともに、当該地域の街づくり及び地域経済の発展に寄与する事を目的としている。

#### 『書生生活』

地域の活動に関わりながら、大学の近くにある安い空き家に住むことができる。(敷金・礼金なし ¥38,000~月)

インタビュアー:松本 賢哉(京都橘大学)、マルティネス 真喜子(京都橘大学)

インタビュイー:長谷川 大氏(認定 NPO 法人 街 ing 本郷 代表理事)

## ▼「ひとつ屋根の下」と「書生生活」

### 【マルティネス】

NPO 法人街 ing 本郷は、新住民として本郷にやって来た若い世代と、古くから住む商店主や高齢者をつなぐことで地域を活性化しようとしています。具体的に、どのような活動をしているのですか。

### 【長谷川】

若者と高齢者を結びつけるという点では、「書生生活プロジェクト」(以下、「書生生活」)があります。これは、街 ing 本郷が大家さんから借り上げた空室を、大学生・大学院生に安い家賃で貸す事業です。

もうひとつ、学生・院生がシニアが暮らす家の空き部屋を借りて、生活を共にする、「ひとつ屋根の下プロジェクト」(以下、「ひとつ屋根の下」)もあります。これは、2014 年にモデル事業として始めた取り組みで、街 ing 本郷が下宿生を住ませたいシニアと下宿したい学生を仲介します。

どちらもシニアが所有する空き部屋を若者に紹介して、若い世代に本郷の街で暮らしてもらい、シニアには若者との交流を楽しんでもらうという点では共通していますが、いまはどちらかといえば「書生生活」のほうに重心を置いています。

というのは、シニアは「一人暮らしは不安だ」とか「買い物や家具の移動など、ちょっとしたことを気軽に頼める人がほしい」「若い人と会話を楽しみたい」と願う一方で、「若者を住ませたら、夜は危険じゃないだろうか」と不安で眠れなくなった。ちゃんとした学生だとわかっていても心配だ」という心理が働くんですね。だから、「ごはんを食べにおいで」「お茶を飲みにおいで。おしゃべりしよう」と言ってくれるシニアは多いけれども、学生を自宅に住まわせてくれるシニアは意外に少ないのです。

それに、独立して家を出ている子どもたちも、親がよく知らない学生と住むことに不安を抱くし、学生の親御さんも「大家さんが急に倒れるなどしたら、同居人である我が子が責任を問われて、人生に傷がつくかもしれない。そんなリスクを負うくらいなら家賃は少々高くても普通の学生マンションに住んでほしい」という人が少なくありません。

つまり、「交流する」と「一緒に住む」は違うのです。高齢者を見守る仕組みをつくってほしいという社会的ニーズはあるし、住まいを安く確保したいという若者のニーズもあるけれども、いざ「ひとつ屋根の下」を始めると、そういう実態が明らかになったので、2010 年の NPO 設立当初から始めていた「書生生活」にシフトしていきました。

経済的な面でも、「書生生活」は、NPO が大家さんから借り上げて、学生に又貸するという形態ですから、学生に貸す際に家賃を 2,000 円くらい上乗せして NPO の運営資金にできま

す。「ひとつ屋根の下」は、不動産仲介業の免許を持っていれば仲介手数料を取れますが、私たちは不動産関係の免許がなくてもできる非営利の紹介事業をしているだけです。最初の2年ほどは独立行政法人の助成金で運営しました。

助成金を受けている間に資金面が回る仕組みを確立したかったのですが、結局、それはできなかったし、本郷に長く住んでいる私たちは、古いアパートに空室がたくさんあることを知っていましたから、「書生生活」に軸足を移したわけです。



「異世代ホームシェアーひとつ屋根の下で暮らす」  
高齢者と学生の団らんのひとコマ

## ▼本郷の街の入り口としての NPO

### 【マルティネス】

そもそも街 ing 本郷という NPO 法人を設立した経緯は？

### 【長谷川】

本郷の商店街で魚屋と和菓子屋と薬局を営む 3 人の商店主が中心になって、2010 年に立ち上げました。ちなみに、私は魚屋です。

本郷は、東京大学があり、学生が多い街ですが、地元の商店街は全国的な流れの例に漏れず経営に苦勞しています。でも、大学は、地域活性化のフィールドワークとなると、なぜか地方へ出かけていくんですね。地元の私たちとしては、目の前にこんなに困っている商店街があるのだから、同じ地域に立地する大学として何かしてほしいという気持ちがあって、「それなら本郷の街への入り口となるような組織をつくろう」と考え、NPO 法人街 ing 本郷を立ち上げました。

そうすると、大学の先生から「シニアの交流の場をテーマにして卒論や修論を書きたい学生・院生がいるので、受け入れてくれないか」というお話が来ました。大学も学生も、本当は地元でフィールドワークをしたいけれども、その相談を誰にすればよいのかわからなくて困っておられたようで、街 ing 本郷という窓口ができたのを契機に声をかけてくださったわけです。

それで「ひとつ屋根の下」を始めたのですが、はっきりと動機を持った学生が下宿するので、シニアの手助けや見守りをちゃんとやり、その経験を研究に活かして卒論・修論を仕上げ、彼らが卒業・修了した後はその後輩が入るといふ、縁故のような形がほとんどです。

ただ、先ほどお話したように、仲介するには不動産関係の免許が必要で、しかも戸建ての家に学生を住ませたいシニアが予想外に少なかったのも、いまは「書生生活」にウエイトを置いて取り組んでいます。

最近では都市回帰の傾向があって、本郷にも若い世代が住むようになり、人口統計で見れば住民の平均年齢は下がっているかもしれませんが、私たち商店主の目線で見ると、少し違った街の姿が見えてきます。

たとえば、うちの家業の魚屋に6人家族のお得意さまがおられたとすると、「あのお宅は、娘さんは嫁がれたし、おじいさんは亡くなられた。じゃ、いまはおばあちゃん1人だよ」といふように、商店主ならではの情報を持っています。「それなら部屋が余っているはずだ。それを学生に貸して住んでもらえば、おばあちゃんも安心じゃないかな」と思いついて、「ひとつ屋根の下」や「書生生活」を始めました。

### ▼町内や商店街の枠を越えたフィールドをつくる

【マルティネス】

地域には町内会もあると思いますが、NPOと連携しているのですか。

【長谷川】

私たち地域の担い手は町内会でも活動していますが、見守りを町内会でもやってほしいと行政から言われても、町内会自体が高齢化していて、見守り役は担いきれない状態なので、それを担える仕組みとしてNPOを立ち上げたという経緯もあります。



それに、町内会や商店会という組織に入ると、役員が回って来たり、お祭りも清掃も防災も全部参加しないといけないから、そういう組織には入りたくないという人がけっこういますよね。でも、NPOがやっている清掃活動だったら気軽に協力できるという人たちもいて、それも街 ing 本郷を立ち上げた理由の一つです。

それから、町内会は当然、町内ごとに組織されていますから、道を一本隔てた家は隣の町内で、別の町内会に所属することになります。その点、NPOなら、町内の枠を越えて一緒に活動できます。つまり、NPOというフィールドをつくることによって、違う町内の人もゆるやかに共同できる。そういう場があれば、街のつながりは希薄なように見えて意外に大丈夫です。

商店街にしても、振興キャンペーンのイベントをやりたいけれども、個別の商店街単位でやる

には担い手が足りない。かと言って、A 商店街のイベントに B 商店街が乗っかる形にすると、B 商店街から「なんで A のイベントに、うちが乗らないといけないんだ」という声が出る。それなら、NPO が主催して、そこに A 商店街と B 商店街が並列で参加して、一緒にキャンペーンを展開すればいい。そういう形を採れるということも、NPO を立ち上げた理由の一つです。

【マルティネス】

NPO を設立することに、反対意見は出なかったのですか。

【長谷川】

商店街の先輩方からは、必要ないとかなり反対されました。でも、A 商店街の商品券は、B 商店街では使えないというのでは、使い勝手が悪くて、商店街の魅力が薄れます。NPO なら、商店街の境界線を越えて、街全体を盛り上げることができますから、いつかきっと NPO という仕組みで活動することが必要になるだろうと確信していました。

実際のところ、現況は、商店街が独自にキャンペーンをやろうとしても担い手不足なので、NPO がバックアップして実施するケースのほうがはるかに多いです。つまり、同一の商店街内で NPO を立ち上げるのではなく、いろいろな商店街や町内会に所属する人たちが構成する NPO だからパワーアップできるという感じですね。

#### ▼地域の多彩な人びとが参加する NPO

【マルティネス】

街 ing 本郷は、社会人も関わっているのですか。

【長谷川】

学生と商店主の NPO に見えて、実はお医者さんやデザイナーやシンクタンクなど専門性を持った人たちが参加しています。

たとえばお医者さんは、高齢者が倒れる前の段階で予防医学的に関わって、医師が要らなくなるぐらいの社会にするために何か活動したいと、以前から思っておられたそうです。

また、NPO では商店街の魅力を発信する「本郷百貨店」というプロジェクトも取り組んでいるのですが、そのポスターやフリーペーパー等のビジュアルデザインは、まだデザイナーとして独立立ちする前の若者に依頼しました。そうしたら、その一連の仕事が評価されて、グッドデザイン賞を受賞し、いまや、その若者はデザインの仕事で生活できるようになっています。

防災の面でも、消防団や消防職員をつないで、大学の先生にも入ってもらえば、地域で防災イベントなどを通じて啓発できて、地域の防災力が向上します。

このように、地域にいる有能な人たちの「こんなことをやってみたい」という思いを、人と人をつないだり、プロジェクトと人をつなぐことで実現していく。あるいは、思いを形にするようなフィールドを用意する。それによって街が活性化するのではないかと、NPO 設立時に思いました。そういうフィールドを用意するのは、商店街のオヤジの得意技ですから(笑)。

## ▼「目利き」のコーディネーター養成がカギ

【マルティネス】

「書生生活」や「ひとつ屋根の下」では、特にどんなことに苦心しますか。

【長谷川】

ひとつは入居する学生と大家さんのコーディネートです。「ひとつ屋根の下」の場合は、シニアと学生の同居ですから、お互いの要望を聞き取り、生活習慣や生活時間帯を綿密に調べ、相性なども考慮しますし、同居が決まった後は、われわれが立ち会って、シニアと学生の間で生活ルールを決めます。同居を開始した後も、何かトラブルが起きていないかを定期的に調査するなど、継続したサポートが必要ですから、学生とシニアに対する「目利き」がとても重要です。

「書生生活」は、街そのものを学生の研究フィールドとして提供して、それに住まいを付けるイメージですから、「ひとつ屋根の下」ほど慎重になる必要はありませんが、面接は必ずおこなって、どういう学生か、何を研究しているのか、なぜここで暮らしたいのか等を詳しく聴きます。

【マルティネス】

入居の条件はあるのですか。

【長谷川】

どちらのプロジェクトも、入居学生には地域活動への参加を推奨しています。ただし、私はそれを入居条件と捉えてほしくないのです。面接時に「地域活動に参加する権利が与えられていると考えてほしい。条件と捉えるような人は住まないほうがよい」と、はっきり伝えることにしています。

言い換えれば、必修科目と自由選択科目があるようなもので、必修科目は商店街のイベントや祭りの神輿担ぎを手伝うこと、自由選択科目は学生が研究テーマを提示してくれたら私たちがそれに協力する、という関係です。

最近面接した医療系の学生は、「自分の研究上、シニア世代にヒアリングする必要があるが、その機会が得にくいので、ここで話を聴けると助かる。それに加えて、安く住まわせてもらえば大変ありがたい」と話していました。

そういう目的意識を持った学生がほとんどなので、私たちはよく「食べる会」を開くんです。そこにシニアも学生も現役の社会人も商店主も集まって、飲み食いしながらワイワイしゃべっていると、あらたまって自己紹介などしなくても自然に交流ができるし、ヒアリングもできます。いまはコロナ禍なので、なかなか開けませんが。

いずれにしても、しっかりした動機を持った学生を集めるには、目利きのできる優秀なコーディネーターが必須なので、その養成は今後の課題だと思っています。



地域のイベントを手伝う書生生活で暮らす学生らと代表理事  
(前列中央が代表理事長谷川氏)

#### ▼認定 NPO で、自走の可能性を広げる

【マルティネス】

NPO が発足して 12 年ですが、後継者はできましたか。

【長谷川】

大学を卒業した書生たちの中から、家庭を持つなどして本郷の街に住もうと言う人が出てくるのを待っているところです。かつての書生が「よく知っているおじさんがいる街で暮らしたほうが、子どもも見守ってもらえるし、住みやすいのではないか」と考えて、この街に戻ってきてくれるように、いま将来の後継を育てているわけです(笑)。

そういう人が次世代を担ってくれるためには、NPO で専従者を雇えるくらい、お金を回せないといけない。現在は会計だけは非常勤のスタッフを雇っていますが、面接やサポート等の行動費は出せないの、すべて持ち出しです。助成金は、縛りが多くて使いにくいものは申請せず、使い勝手のよいものを少額ですがもらっています。ですから、ほとんど自走している状態です。

【マルティネス】

これからも自走し続けるために、何か方策を考えていますか。

【長谷川】

ここ数年ほど挑戦してきたのが、認定 NPO 法人になることです。私たちの取り組みは、かなり注目され、マスメディアで取り上げられることも多く、社会的な評価も高いのに、運営資金を得る方法がない。それなら第三者から寄付を募ることができる仕組みをつくらうと考えて、コロナ禍の 2021 年、認定 NPO 法人になりました。

認定 NPO 法人に寄付をすると、寄附金控除など、税制の優遇措置を受けられるので、個人

や企業から寄付を受けやすくなります。寄付で運営費をまかなって、学生が家賃を払わなくても住めるようにしたり、できれば奨学金を出せるようにしたいと思っています。

それから、認定 NPO 法人になることによって、遺贈も受けられることになりましたので、先日、遺言と相続に関するセミナーを開きました。空き家、相続がうまくいかない物件、私道の奥の再建築不可物件などを、「書生生活」の住まいに使うなど、いろいろな取り組みも視野に入れて、認定 NPO 法人を取得したわけです。

東京大学には遺贈の申し出が多数あるそうですが、大学は資金の遺贈は受けられても不動産の遺贈は受けられないので、街 ing 本郷が「学生のために使ってほしい」との遺言に基づいて寄付された物件の受け皿になればいいなと思いました。

建替可能物件を遺贈されたら、大手デベロッパーと連携することも考えられますし、再建築不可物件は建築学科の学生にリフォームの教材として提供してもいい。以前、精神疾患をお持ちの方々の団体から「障がい者というだけで居室を貸してもらえない。障がいがあっても地域に貢献したいと思っているので、私たちも『書生生活』の対象に入れてもらえないだろうか」というお話がありましたので、福祉分野の方々とも連携の可能性が広がります。

相続人がいなくて国庫に帰属してしまう物件は、年間約 600 億円にも上るそうですから、そういう物件を使える仕組みを構築することも考えています。そうすれば、「書生生活」の学生に安い家賃で住まいを提供できる可能性が街中に広がります。

【マルティネス】

遺贈を募って、もし本郷ではなく他の地域の物件を遺贈されたら、どうするのですか。

【長谷川】

その場合は、たとえば貧困問題を扱っている団体につないで、使ってもらえばいいと思います。街 ing 本郷が他の地域の物件を管理・使用する必要はないので、何でもすべて街 ing 本郷で扱おうとは思っていません。他の地域や団体と連携できることが大切だと考えています。

## ▼NPO というフィールドで化学反応を起こし、新しい活動を創る

【マルティネス】

今後に向けた課題は？

【長谷川】

先ほども少しお話ししましたが、目利きのできる優秀なコーディネーターを養成することと、安定した財政基盤の確立ですね。その対策の一つが認定 NPO です。

それから、私はシニアも地域のために活動してもらうことが課題だと思っています。引きこもられると見守りができないので、家からシニアを引っ張り出したいのです。だから、地域の高齢者に会うといつも、「詩吟が趣味なら、発表の場をつくるから必ず歌ってくれ」とか「編み物ができるなら、編み物の仕事を持ってくるから手伝ってくれ」「掃除が得意なら、掃除を手伝ってくれ」と言っています。そうやって社会参加をしてもらって、シニアが医療や福祉の領域に行く手前で止める、防波堤のような NPO になりたいと思うからです。

シニアの方々は、敬老会など、何かにつけて招かれる側なので、それに飽きていて、主役でやりたい人がけっこういます。そのことに気づいてからは、シニア主催のイベントに若者が参加するという企画を増やしました。たとえば「食べる会」なら、用意はシニアにしてもらって、若者を100円で呼ぶんです。食べることさえ始めたら、みんなワイワイしゃべるから、企画する側も楽しいですし、若者はたらふく食べることができ、シニアは若者と話ができるので、双方とも大喜びです。シニアが活躍する場を増やして、シニアの潜在能力をもっと引き出したほうが、個人にとっても街にとってもいいですね。

街には多彩な人がいるので、その人たちが集まるフィールドをつくって、化学反応を起こさせるのがNPO法人街ing本郷のねらいです。これまでつながりのなかった人たちを、街ing本郷というフィールド上でくっつけて、化学反応を起こさせて、いままでにない新しい物質(つまり活動)を生成させる。その過程を楽しんでいるので、新しいアイデアや提案が出てくるとワクワクします。



大学生と地域住民の多世代交流会



地域のイベントを手伝う書生学生



## II. 居場所提供型 + イベント型 ～集える場所が生きがいに～

このスタイルでは、高齢者をはじめ、地域の人々が集える居場所を提供し、イベント開催も行いながら交流の機会をつくります。主に地域に暮らす高齢者の孤立の予防と解消が目指されます。しかし、孤立するのは高齢者だけではなく不登校や社会になじめない若者も同様です。世代の垣根を越えた居場所がやさしく住みやすい地域を作っていきます。

「一般社団法人 えんがお」は、若者が中心となって居場所を提供しています。この場の運営に参加する学生は自主的に活動に加わります。自分に自信を持ってない若者は、この場で高齢者と関わり、感謝の言葉をもらうことで自信をつけていきます。また、ここに訪れる高齢者はなにかしらの役割を担っており、活躍の場でもあります。このような場があることで、自然な交流が生まれ、お互いが認められ、それが当たり前な景色であるまちができていく。そんな「えんがお」を運営する、若者のひとりでもある代表理事 濱野氏にお話を聞きました。

### 5. 一般社団法人 えんがお

#### 『高齢者と若者の居場所』



コミュニティハウスみんなの家

**一般社団法人 えんがお**

所在地: 栃木県大田原市山の手2-14-3

沿革: 2017年3月設立

事業内容:

年齢や障がいの有無を問わず、いろいろな人がつながることによって高齢者の孤立を防ぎたいというのが「えんがお」のコンセプト。

徒歩2分圏内にある6軒の空き家を使って、地域サロン、学生の勉強場所、学校になじめなくて不登校状態にある中高生向けのフリースクール、障がい者のグループホーム、地域食堂などを運営している。

拠点となっている「みんなの家」は若者用、この家は高齢者用、この家は障がい者用と分けなくて、できるだけ顔を合わせられるようにしている。

<https://www.engawa-smile.org/>

インタビュアー: マルティネス真喜子(京都橘大学)

インタビュー: 濱野 将行 氏(一般社団法人えんがお)

**▼なぜ高齢者の孤立の予防と解消に取り組むのか**

【マルティネス】

「一般社団法人 えんがお」(以下、「えんがお」)は、子ども、若者、高齢者、障がい者など、すべての人が日常的に関わることによって高齢者の孤立化の予防・解消という課題に向き合おうとしています。なぜ、そのように考え、活動することにしたのですか。

【濱野】

きっかけは東日本大震災です。当時、私は作業療法士を目指す大学生で、ボランティアに興味はあったけれど授業以外はアルバイトと飲み会と遊ぶことに時間を費やしていました。そんな時に震災が起こって、関東から東北への出入り口にあたるこの辺の地域は避難者であふれ返るようになり、避難所の消毒や支援物資を配布する人手が足りないというメールを受け取ったのです。

やっぱり地震と津波とその後の被災地の状況は衝撃的だったので、とりあえずボランティアに参加して、自宅を津波で流されたおばあちゃんの言葉を聞いたのですが、私自身は家を流されたことがないから、うなずくことも「大丈夫ですよ」と言うこともできなくて、自分の無力さを痛感しました。

「こういう時にちゃんと人の力になれないと、作業療法士の資格を取っても意味がないのではないか。在学中にもっと成長して、人の役に立ちたい」という思いが強くなり、社会貢献事業の中でも、ビジネスベースで社会課題の解決を目指すソーシャル・インパクトなどに目を向けるようになりました。

それで、海外ボランティアに参加するなど、いろいろなことに取り組んで、大学卒業後も後輩たちと「せっかく大学に通っているのに、地域とも、地域で暮らす高齢者とも、関わりが全然ないよね」などと話し合っ、学生と地域の高齢者をつなぐボランティア活動をゆるいペースで

始めました。これが、実際にやってみるとすごく楽しかったんです。

また、その活動の中で、1 週間、誰とも話さないお年寄りと出会って、高齢者の孤立の深刻さに気づくことにもなりました。その頃の私は、作業療法士として高齢者施設で働き、高齢者をリハビリテーションで支援して家に帰す仕事をしていたのですが、お年寄りの転倒・骨折の原因を調べると、たった 1 人で家にいて、会話もなければ外出もしないで、だんだん筋力が衰えて転倒するという背景があったのです。認知症にしても、特に独居の方が発症する背景には誰とも会話をしていない生活状態があったりします。

そこで、「この孤立という問題に向き合わないと、高齢者を取り巻く諸問題の根本的解決に至らないのではないか。それを仕事にできたら幸せだな」と思い、高齢者向けの便利屋サービスとして起業しました。



一般社団法人 えんがお 代表理事 濱野 将行 氏

## ▼人を頼り、相談することの大切さ

### 【マルティネス】

高齢者の生活支援をビジネスとして成立させることは、ハードルが高いというイメージがあります。起業する時、どのような工夫をしましたか。

### 【濱野】

「NPO 法人 とちぎユースサポーターズネットワーク」(以下、「とちぎユース」)の支援を受けたことが大きかったですね。「とちぎユース」は、社会課題を自らの力で解決したいと考える若者に対して、それをボランティア活動のベースで行うのか、それともソーシャルビジネスにすることで継続を目指すのかといった相談に乗ったり、プランニングやアクションを総合的にサポートしています。つまり、自分たちで社会課題の解決に取り組んでいては間に合わないから、社会課題の解決を目指す若者をたくさん育てることに注力する NPO なのです。

この NPO が主催するビジネスアイデアコンテストは、すごくすてきで、ただ単に発表して終わりではなくて、エントリーして最終選考に残ると、発表までの約 4 カ月間は企業家などが「これでは全然だめだよ」とか「こういう点を考えなきゃいけないよ」というふうにアドバイスしながら伴走してくれます。

私がやろうとしていた高齢者の生活支援は、単価が低くて収益性がないと思っていましたが、この伴走期間中に経営の先輩方から「そういう事業は、これからの社会に必要なけど、君がやらないと誰もやらないね」という言葉をもらって、ストーンと腑に落ちた気がしました。

いまは自信のない若者が増えているし、失敗は許されないというか、失敗したら叩かれるような風潮があって、若者が社会的な課題や問題に気づいても、なかなか挑戦しづらい社会になっています。そういう状況の中で起業を目指す者にとって、「とちぎユース」のように伴走してくれる存在はとても心強かったです。

それと、上の世代で社会貢献事業をしている人たちは、「いいことをしているのだから、お金をもらってはいけない」と考える方が多い気がします、それでは継続できないし、広がりもつけない。事業で生活できなければいけないし、社会にいいことをしているからこそ待遇も良くすることが大事だと考えました。企業の社会貢献について、「利益が出た企業は社会に還元すべきだ」というようなことが言われますが、それは「社会に貢献している企業はちゃんと利益を出すべきだ。経営をがんばるべきだ」ということと同じ意味ではないかと考えたのです。

起業する時点で、それを伴走者の方々から学ぶことができた私は、とても恵まれていたと思います。

【マルティネス】

「えんがお」は、濱野さんが1人で立ち上げたのですか。

【濱野】

立ち上げの手続き等は私1人で動きましたが、ビジョンや目標、ミッションなどは、私が他の人と話し合いながら作りました。

立ち上げる時に大切にしたのは、いろいろな人に相談に乗ってもらいつつ仲間になってもらうという姿勢です。相談相手は、経営者の方やソーシャルセクターで社会貢献事業をしている方がメインで、もちろん行政の方や地域の方にも相談しました。

その際、気をつけたのは挨拶ではなく相談をするということです。挨拶に行くと、「立ち上げますので、よろしく願います」「わかった。がんばってね」で終わってしまいますが、「こういう事業を立ち上げたいのですが、どなたに相談すればいいですか」と相談する感じで持ちかけると、「じゃ担当課を教えてあげるから、行ってみたら」と言ってもらえたりします。

当時の私は、若者の特権を活かして熱い思いを伝えたら有利になるだろうとけっこう打算的に考えていたので、市役所で「高齢者の孤立をこのまちから変えていきたいので、誰か担当の方を紹介してほしいです」と訴えました。そうすると、「じゃ、とりあえず高齢課の課長を連れてくるから話を聞いてもらいなさい」というふうにつないでくれて、高齢課の課長さんと話をしたら、「あの人には挨拶をしておいたほうがいいよ」とか「今度、自治会長と一緒に挨拶に行こうか」という感じで、次々と必要な人につながっていきました。

#### ▼若者と高齢者は、意外に相性が良い

【マルティネス】

では、「えんがお」の具体的な活動内容を教えてください。

【濱野】

徒歩2分圏内にある6軒の空き家を使って、地域サロン、学生の勉強場所、学校になじめな

くて不登校状態にある中高生向けのフリースクール、障がい者のグループホーム、地域食堂などを運営していますが、この家は若者用、この家は高齢者用、この家は障がい者用と分けなくて、できるだけ顔を合わせられるようにしています。年齢や障がいの有無を問わず、いろいろな人がつながることによって高齢者の孤立を防ぎたいというのが「えんがお」のコンセプトですから。

【マルティネス】

施設の運用は、具体的にどうしているのですか。

【濱野】

6 軒のうち、「コミュニティハウスみんなの家」は、1 階が地域サロンで、いわば高齢者のお茶飲みスペースですが、2 階は学生の勉強場所です。2 階に上がるには1 階を通る必要があるので、若者はお年寄りに挨拶をします。そうやって慣れてくると、おじいちゃんおばあちゃんと若者が一緒にお茶を飲んだり、ご飯を食べたりする景色が生まれます。

それと、独居の高齢者は1 人でご飯を食べているし、2 人暮らしでも高齢者のみの世帯になると、やっぱり2 人だけで会話も少なくご飯を食べている。それに、若者も1 人で食べているケースがけっこう多くて、つまらない。「だったら、週に1 回くらいはみんなでご飯を食べたほうが、おいしいし楽しいし経済的だよ」ということで、地域食堂を始めました。

そこでは、精神や知的な障がいを抱えて、「えんがお」のグループホームに入っている人たちも一緒にご飯を食べますし、地域の子どもたちも来るし、その保護者の方々も調理に参加してくださるので、多世代交流の場になっています。

1 食の料金は、子どもと学生は300 円で、経済的事情があれば無料になります。高齢者からは500 円をもらっています。調理や材料の調達は、子どもたちの保護者の方がボランティアで手伝ってくださったり、私たち職員が担いますが、料理好きの学生スタッフがやってくれることが多いですね。

「コミュニティハウスみんなの家」の1 階の、高齢者のお茶飲みスペースの奥のドアを開けたところがフリースクールで、不登校の中高生の居場所ですが、いま彼らは街中にベンチを増やして、外出しやすい街にしようということで、ベンチ作りをしています。さっきも若者がお年寄りに挨拶しながら、奥の部屋に入っていました。

このように、中高生の居場所と高齢者の居場所が同じ区画内にあって、この中高生たちが訪問型の高齢者生活支援事業について来ることもあります。

【マルティネス】

若い人と高齢者が接して、トラブルが生じることはありませんか。

【濱野】

じつは高齢者と若者はとても相性がいいと、私は思っています。以前は引きこもりで、いまもコミュニケーションが苦手な不登校の中高生を、日中の話し相手がいなくて、客が来たら一方的にしゃべるようなおばあちゃんのお宅に連れて行くわけですが、勢いよくしゃべるおばあちゃんの話若者はおどおどしながら聴いているんですね。

でも、おばあちゃんはひとしきりおしゃべりした後、中高生に「ありがとう。あんたが話を聞いてくれたから、これから 1 週間、元気でいられるわ」と言って、すごく感謝してくれるし、同行した私たちも「コミュニケーションできるじゃん」と言います。そうすると中高生は、「俺ってコミュニケーションできるんだ」と自信がついて、「もっとできるようになりたい。もっと相手の気持ちに伝えたい」と思うようになり、一步を踏み出せるようになることがあります。

#### ▼「大変なこと」は「悪いこと」ではない

【マルティネス】

どのような体制で運営していますか。

【濱野】

グループホームも含めて、常勤職員 4 人とパート職員 8 人とボランティアの学生スタッフ 7 人で回しています。学生スタッフは県内の高校生と大学生で、ご飯づくりも含めて運営から一緒にやりたいという人たちです。

スタッフ会議はまめに開いて、事業のアイデアを出し合うなどしています。

【マルティネス】

運営上、困ったことは？

【濱野】

いっぱいあります。毎日いろいろなことが起きて、その 9 割はほぼ失敗ですね(笑)。一例を挙げると、障がい者のグループホームを運営しているので、利用者さんが深夜に無断で外出する騒ぎが何日も連続することがあります。そういうトラブルは、対人援助の現場では避けられない面もあるので、私自身は覚悟を決めていますが、やっぱりチームとしては悩みますね。

高齢者のお茶飲みスペースでも、禁煙のルールを守れなくて、タバコの灰を落とすおじいちゃんがいたので、出ていってもらったことがあります。施設の管理責任者としては「もう来ないでください」と言わなければいけないけれども、ずっと年上の、本来は敬うべき方に対してそれを言うにはすごく葛藤があって、つらいです。

それに、「えんがお」しか居場所がない人は、ここを出入り禁止になったら他につながりがあるのかが心配ですが、複数の居場所を持っている人がルールを逸脱した場合は「もう来ないでください」と、はっきり言うようにしています。

学生の勉強場所は、夜中もカギをかけないので、名前を書いて利用料 200 円を箱に入れれば自由に使えますが、お金を入れなかったり、入ってはいけない場所に入ったりする学生が時々います。それで、優しい雰囲気の写真や、みんなの共有スペースを子どもたちが掃除している写真などを壁に貼って、そういう学生が居心地の悪さを感じるようにしています。彼らは、まじめにルールを守っている学生たちの「なんで、あいつが来るんだよ」と非難するような視線も感じるので、だんだん来なくなりますね。その意味では、オープンな場に見えて、じつは来る人を選んでいるのかもしれませんが。

いずれにしても、「大変なこと＝悪い」というような捉え方はしないようにしていて、「人間関係

は本来、大変なものだし、煩わしいし、面倒だけれど、でも、それがいいんだ」という感じで受けとめています。

経営面で悩むのは、ソーシャルビジネスの領域はお金にならない部分が多いということです。いま学生の勉強場所の床が冷えるので断熱工事をしていて、その代金が約 10 万円かかりそうなのですが、学生の利用料は 1 日 200 円に抑えているので、どう見ても工事代金はまかなえない。その辺は、どこで利益を生んで、どこで見切りをつけるのが難しいですね。

### ▼活動を発信することは、経費節減につながる

【マルティネス】

仕掛けや仕組みの点で、工夫していることは？

【濱野】

事業を継続するためには自分たちだけで完結しないことが大切なので、関係人口を増やすことに力点を置いて、SNS も上手に使いながら、オフラインとオンラインの両方で取り組んでいます。関わり方に濃淡はあるにせよ、関係人口があると、人的リソースも増えて、助けてほしい時に「料理できる人、いませんか？」とか「掃除できる人、いませんか？」と、いろいろな人の手を借りることができますから。

【マルティネス】

収益性を高めるために、どんな工夫をしていますか。

【濱野】

ひとつは支出を減らすことです。私は、ちゃんと活動を発信して、いろいろな人から知識や技術を含めたリソースを得ることで、支出を減らしていけると考えています。

たとえば、先ほど勉強場所の床の断熱工事の話をしました。改修費が 10 万円かかるところを、支援者の大工さんが「俺、休みの日にやってるから、手間賃は請求額から抜くね」と言ってくれて、作業費 3 万円を割引にしてくれました。

自分たちがやっていることをちゃんと発信することによって、大工さんは私たちの活動を知って、応援してくれて、「俺もこの団体を応援したいけど、カネはそんなに持ってないから作業で支援するよ」と言ってくれたり、必要な道具を貸してくれたり、よその工事で余った床材を無料で提供してくれたりして、結果的に床の断熱工事が割安でできて、支出を減らすことができるわけです。だから、発信によって知識や技術などのリソースが集まるから支出が減って黒字化する、というロジックはけっこう大事にしていますね。

それに、発信して、知ってもらいと、つながりができて応援や信用が貯まり、それが自然にお金や知識や技術に変わって行って、リソースとして「えんがお」に戻ってきます。

先ほどの、自分たちだけで完結しないで頼ることが大事だという話と重なりますが、社会貢献事業は、身銭を切って、自己犠牲的に活動してはダメだと思います。そうではなくて、誰が困っていて、それに対してどんな取り組みをして、どう喜んでもらったかを発信する。そうすると、それを知った地域の人が食材を届けてくれて、地域食堂の経費が減って、継続的に運営できる

ようになります。

ちなみに、6 軒で使っている冷蔵庫や洗濯機などの備品は、買えばかなりの額になりますが、すべて寄付していただいた物です。机も、家具屋さんからいただきました。自前で購入したのはエアコンぐらいです。

【マルティネス】

収入については、どのように確保していますか。

【濱野】

「えんがお」の場合は、障がい者施設を運営しているので、その制度収入が大きいですね。5 期目の収入合計は約 3,000 万円で、そのうち助成金が約 500 万円、会費収入が約 110 万円でした。NPO 等の財源については、①国・自治体・財団等の助成金、②事業収入、③会費・寄付金の比率が 3:3:3が理想だとされているので、うちは事業収入がもう少し多くてもいいかなと思っています。

それと、何を「豊かさ」と捉えるのか？ということも、大きな収入にはつながらないかもしれないけれど、たぶん大事なのだらうと思います。たとえば私がキャンプに行くとお皿などの洗い物が出る。それを自分で洗ってしまうと、そこで終わるけれども、「えんがお」に持ち帰って、利用者さんに洗ってもらって、お礼に「えんがお」で売っているお菓子を買って渡すと、利用者さんは喜んでくれるし、私も助かるし、「えんがお」の売上収入にもなる。このような、単にお金の循環だけではない、気持ちも含んだ循環があると、すごく生きやすいし、幸せな気持ちになります。

常勤スタッフは、休みなく働いていますが、年収は同じ世代の平均額プラスアルファ程度です。でも、一部上場企業になりたいわけでも高級車に乗りたくないわけでもないの、「自分たちにとって、このレベルが豊かだと言えるのではないか」というような価値観はチームの中で共有しています。

## ▼楽しくなければ、人は集まらない

【マルティネス】

今後の課題については、どう考えていますか。

【濱野】

一般の人びととの架け橋をつくることは、とても大事だと思っています。「えんがお」が NPO の世界で有名になったとしても、それは限られた業界内の話で済んでしまいます。でも、広く一般の人びとに知られるようになれば、高齢者の孤立化という問題が社会的な関心事になるので、そこにちゃんと伝わるチャンネルを持ちたいですね。

たとえば、この近所にパンケーキが評判になるような、すごくおしゃれなカフェを開いて、そこでパンケーキを食べたお客さんが、家族や友だちに「パンケーキをテーブルまで運んでくれたのは 80 歳のおばあちゃんなんだよ。なぜ、そんなお年寄りが働いているのかと思って、話を聞いたら、そのおばあちゃんは昼間は独りぼっちだったんだって」と伝える。そんなふうに話

題になれば、「そういう人がつながる場所が必要だね」という話に広がるかもしれないと思うんです。

ただし、「福祉だから」とか「優しい思いやりの気持ちから」ではなく、シンプルに「これがおいしいから」とか「デザインがすてきで性能もいいから」という理由で購入してもらうことを大事にしたい。福祉に興味を持ってもらうというより、興味がないまま、「おいしいパンケーキを食べたい」と思ってカフェに行ったら、いつのまにか高齢者や障がい者と接していた。そんなチャンネルをつくっていきたいのです。どんなお店にも高齢者や障がい者が当たり前のようにいる景色を創り出したいと思っています。

それから、すべてにおいて楽しむことを優先してきたし、今後もそこは貫いていきたいと思っています。私たちが楽しめるかどうかを第一基準にしているので、虐待案件などは力量を超えてしまって扱えません。でも、若いチームでもあるし、私たち自身が楽しんでいないと人は集まってこないのです、そこは大事にしたいですね。



コミュニティハウスみんなの家  
1階お茶のみスペースは集いの  
場。駄菓子も売っている。



近所の高齢者のお宅から脱走して  
くる犬は、必ずみんなの家に寄る  
ので、飼い主さんはここにお迎え  
に来る。

定年退職後の男性が中心となって、8か所の農園で活動を展開している「豊中あぐり」。ここは高齢者が中心の居場所です。「豊中あぐり」では、活動メンバーに役割と出番があり、生き生きと楽しんで活動されている高齢男性の姿があります。運営主体は社会福祉協議会で、イベント企画の提案や、活動のサポート、農業の6次化にまで発展させる支援をしています。また、不登校の学生や、児童を巻き込み、イベント活動が展開されます。地域に暮らす異世代の住民がつながり合い、認め合い、支え合うことが目指されています。高齢男性の力を引き出し、若者が活動する場を提供することにも成功している、豊中市社会福祉協議会のコミュニティーソーシャルワーカー 勝部 氏に運営の実際について話を聞きました。

## 6. 豊中市社会福祉協議会

### 『豊中あぐり』



#### 豊中市社会福祉協議会 『豊中あぐり』

所在地：大阪府豊中市岡上の町2丁目1-15

事業内容：現在は8か所の菜園で野菜や果樹を育て、田んぼや畑ならではのイベントを行い、空き家を活用した地域共生ホーム「和居輪居」で子どもたちの学習支援やオレンジカフェ、各種イベントなども実施。

インタビュアー：マルティネス 真喜子(京都橘大学)

インタビュー：勝部 麗子氏(豊中市社会福祉協議会)

戸谷 友隆氏(豊中あぐり)、池田 雅美氏(豊中あぐり)

## ▼高齢男性による「食」と「農」を通じたまちづくり

【マルティネス】

豊中あぐりを立ち上げたきっかけは？

【勝部】

もともとは定年退職後の男性の居場所づくりとして考えました。豊中市は、大阪空港に接する人口約40万人のベッドタウンで、人口が急増した時期に小学校が増設されたという経緯があり、小学校区単位で福祉活動をするかたちが根付いています。

でも、そこに参加するのは女性がほとんどで、男性はなかなか集まりません。特に定年後に社会参加をする男性は少ないので、その人たちを孤立させないための方策として、高齢男性による「食」と「農」を通じたまちづくりの場をつくろうと思ったのです。

空き地を自分たちで開墾して畑に変え、そこで野菜を栽培し、それを子ども食堂に提供したりお店で販売したりする仕事なら高齢男性がイキイキと参加できて、かつ介護予防にもなるのではないかということで、現在は8カ所の菜園で野菜や果樹を育て、田んぼや畑ならではのイベントを行い、空き家を活用した地域共生ホーム「和居輪居」で子どもたちの学習支援やオレンジカフェ、各種イベントなどもしています。

もちろん、農園ですから、都市農業を守る意味もあります。ボランティアが都市農園を守るといってサポートしなければ、この地域の農業は消滅するのではないかと。そうになると収穫を終えた田んぼで凧揚げをして遊ぶといった、昔からあったはずの農村文化が途絶えてしまうし、次世代を担う子どもたちは田んぼや畑の作物に触れる機会を失ってしまいます。

【マルティネス】

収穫した農作物の加工にも取り組んでいますね。

【勝部】

はい、農業の6次化に取り組んでいます。6次化というのは、栽培(1次)と加工(2次)と販売(3次)をすべて自前でやることで、あぐりでは、野菜の販売はもちろんのこと、菜園で採れたサツマイモを福岡の醸造所に送って焼酎にしたり、沖縄産シークワーサーの苗木を果樹園に植えて、シークワーサー入りクラフトビールを製造するなどしています。

豊中市内のある機械メーカーは、自社製品のナスの接ぎ木装置でトマトの苗を試作して、その苗をあぐりに寄付していただき、その苗から育てたトマトも買い上げてくださって、会社の創立100周年記念品としてトマトジャムを作られました。

あぐりで収穫した新鮮な野菜を車に積み、高齢者の方々が集まりそうなところに出向いて、移動販売もしています。そこでは野菜の販売だけでなく、高齢者の安否確認も行います。

## ▼子どもも、認知症や障害を持つ人も、外国人も、誰もが共有できるユニバーサル農園

【マルティネス】

あぐりは、その目的に「都市農園を拠点に、人と人とのつながり、ふれあい、認め合い、支え合う共同空間(コモンズ)を創造することで、社会参加を促進し、地域福祉の担い手をつくること」

を掲げています。高齢男性だけでなく、多様な人びとの参加を目指しているのですか。

【勝部】

あぐりにはその可能性があると思っていて、その一つが子どもです。定年後の男性は、70代半ば頃まではまだお元気ですし、現役時代に培った多彩な専門知識や技能・技術もそれなりに維持しています。私はそうした高齢男性の能力を、社会参加が難しい子どもたちの支援に活かせないかと考えました。

たとえば小学校の定番行事にイモ掘りがありますが、不登校になってイモ掘りを体験できない子がいます。子ども食堂の案内も、学校でチラシを配ることがよくありますが、不登校の子どもたちにはなかなか届きません。

核家族化で、祖父母と接したことがない子どもも珍しくないし、特にコロナ禍のもとでは、大幅な減収に追い込まれた方がたくさんおられます。私は社協のコミュニティソーシャルワーカー(※CSW)として、数百円しか持ち合わせないご家庭とも出会いました。出会った以上は、そういう家庭の子どもたちが「楽しい」「おもしろい」「うれしい」「よかった」と思える時間や、自分に自信が持てるような経験を少しでも増やせるようにしたいと思っています。

それで、あぐりの農園を拠点にして、種まきや田植え、野菜の収穫、レンゲまつり、ザリガニ取り、スイカ割り、流しそうめん、草刈り、稲刈り、かかしフェスティバル、凧揚げ大会など、季節に応じたイベントを行い、そこで子どもたちが高齢男性と一緒にいろいろな体験を積めるようにしようと、あぐりの会員さんたちに提案し、実施しています。

それと、あぐりの農園は、まちづくりの一環ですから、外国人の方も、認知症や障害のある方も、誰でも参加できる「ユニバーサルファーム」であってほしいとも思っています。ですから、ふつうの農園は耕作面積をできるだけ広く確保しようとはしますが、ここでは車椅子の方も一緒に植え付けや収穫が体験できるように、かなり広い道幅にしています。そこに会員さんたちが汗を流して、約4,000枚の廃レンガを敷き詰めてくださったので、足の不自由な方も車椅子の方も安心して歩いていただけるようになりました。

つまり、みんなで使える共有地(コモンズ)があれば、「ここにベンチが要るよね」とか「テーブルもほしいな」という話になって、そうすると木工をする人が現れて、会員さんそれぞれの役割や出番が生まれるわけです。

## ▼必要なのは「命令」ではなく「提案」

【マルティネス】

あぐりの運営体制は？

【勝部】

実施主体は豊中市社会福祉協議会ですが、この活動をスムーズに展開するために社協の中に老人クラブ・地元民生委員会・消費者協会・ボランティア団体・NPOなどで構成する豊中あぐりプロジェクト運営委員会を置いて、ここで方針を決めます。

その方針を具体的な活動内容に落とし込むのが実行委員会で、毎月1回の会議を開いて、畑

の水やり当番、活動日の作業内容、行事の準備、菜園の管理などを決めていきます。

【マルティネス】

季節ごとに多彩なイベントをするという話でしたが、それは誰が企画するのですか。

【勝部】

基本的には運営委員会で検討しますが、私は CSW としていろいろな情報やネットワークを持っているので、いままちづくりに求められているのは何かということを考えながら、「こんなことをしたら良いのでは」とか「こんなことがしたい」という提案をします。

たとえば、私が「子どもたちにレンゲ摘みを体験させてあげたいから、畑でレンゲまつりをしたい」と思っても、レンゲの種をまいて花を咲かせる作業をするのは会員さんですから、さまざまな困難を抱えている子どもたちの状況を話して、共感してもらわなければいけない。そうすると、「そのイベントをやってみようじゃないか。子どもらのために、われわれ大人ががんばろう」と言って、レンゲまつりに向けた動きが始まるわけです。

この種のボランティア活動でよくある失敗は、「こうしろ」と命令してしまいがちなことです。そうではなくて、「こんなことがしたい」と提案する。そうすると、いろいろなアイデアが出てきます。イモ掘りで、掘り出したサツマイモをそのまま持ち帰らせても、家で料理してもらえない子どもがいるから、「じゃ、ここで焼きイモにしようか」というふうに、子どもの困難さに心を寄せたアイデアが出てくるんです。

私は、あぐりのコンセプトは「めだかの学校」だと思っています。あの歌の「誰が生徒か先生か。みんなで楽しく泳いでる」という歌詞と同じで、あぐりには上下関係がありません。誰が命令するでもなく、みんなが対等平等で、活動中はビブス(袖のない、ベスト状のユニフォーム)を身に着けることだけが決まりです。

## ▼シニア男性に役割と出番を

【マルティネス】

会員は、どのようにして集めるのですか。

【勝部】

随時募集中ですが、会員資格は「豊中市在住の 60 歳以上の男性」に限定しています。

【マルティネス】

なぜ、女性は対象にしないのですか。

【勝部】

「世の中は性差別のない社会に向けて動いているのに、なぜ女性を拒むのか」という声もありますが、女性の集まる場がすでにたくさんあるのに比べて男性が集まる場は極端に少ないのです。イギリスでも、人びとの孤立が社会問題になり、イギリス政府は孤独問題担当大臣を任命して、「男たちの小屋」という定年後の男性の居場所を設けました。そこには、仲間と一緒に大工仕事などができるように工具類も備えられていて、そこで作られたテーブルやベンチや遊具は公園や学校に寄付され、みんなに喜ばれています。それが男性たちの生きがいになって

いるんですね。

それに、手慣れた女性が素早く作業をすると男性はやる気を失うこともあります。

一方で、男性は役割や出番を与えられると、自分の特技や能力を活かしてミッションをやり遂げようと一生懸命になる人が多い。そういう傾向や特性も考え、孤立を防ぎたいという思いから、あえて男性に限定しました。

あぐりには地域福祉の担い手づくりという意味もあるので、新規会員は「豊中あぐり塾」という研修会で地域福祉と野菜づくりについて学びます。

### ▼高齢男性の「あぐり効果」ー地域福祉への理解の深まり

#### 【マルティネス】

高齢男性は、あぐりの活動によってどのように変化しますか。

#### 【勝部】

会員さんたちは「血糖値が下がった」とか「血圧が下がって、医者にも酒を飲んでもよいと言われた」とか、よく話しています。でも、そういう健康効果より何より、みなさん、とても楽しそうなんです。ここに来れば、誰かと会えて、誰とも気楽に話ができて、人間関係が広がるし、農作業をしてもいいし、何もせずベンチで座っているだけでもいいし、やりたいことを自発的にやれば、みんなに喜ばれて、それが自分の役割になるからです。

子どもたちと接することについても、「ぼくは『おじいちゃん』と呼ばれてもおかしくない年齢なのに、ここでは『おっちゃん』と呼んでくれるので、うれしい。ボランティアというより、ぼく自身が孫みたいな子どもたちと楽しく遊んでいる感じ」と言う方がおられますね。

ある方は、お連れ合いが介護度 5 の認知症で、心身ともに毎日大変な生活ですが、あぐりという場があることが張り合いになり、元気に暮らせると言って、運営委員を務めてくださっています。

それから、地域福祉への会員さんの理解の深まりも感じますね。会員さんは、家庭環境に困難を抱えている子どもたちがいるということ、あぐりの活動を通じて徐々に理解されると、そういう子どもたちを理解し、信頼することの大切さを実感して、「もっと子どもらを楽しませてあげたい。コマ回し、やってみよか。竹トンボも、やってみよか。子どもら、そういうことも経験したことないやろし」というふうに考えるんですね。そういう姿がとてもステキだなと思っています。

### ▼子どもたちや引きこもりの若者に社会参加の機会を

#### 【マルティネス】

子どもは、どのように変化しますか。

#### 【勝部】

私が CSW として関わっている家庭の子どもたちは、経済的に困窮している場合もありますが、総じて人間関係が貧困で、さらには文化的貧困というか、経験の貧困という問題を抱えて

います。

ですから、あぐりという場を使って、子どもたちの経験値を少しでも上げたい。あえて、そこを意識して取り組んでいます。家庭環境の整った子どもは、夏になれば有名な観光地に連れていってもらって、ヒマワリの迷路を経験できるけれども、一方で、数百円のお金さえお母さんに「出して」と言えない子どももいます。そういう家庭の子どもに、春にはレンゲを摘み、鯉のぼりを上げ、新聞紙で兜を折る経験を、夏にはスイカ割りをし、流しそうめんを食べ、ヒマワリ畑で遊ぶ経験を、秋にはイモ掘りをして、ホクホクの焼きイモを味わう経験を、冬には凧揚げで遊ぶ経験をしてほしい。そういう経験を低学年でしておかないと、中学生になると学力の差が広がって、本当に苦しくなります。

引きこもりの若者については、「びーのびーの」という居場所をつくり、家庭訪問を行い、その人の得意なことを中心に作業プログラムを組み立てて、就労に向けた準備ができるように考えてきました。

幸いなことに、ある社会福祉法人が空き家を提供してくださることになったので、そこを飲食スペースも備えたお店にして、引きこもりの若者たちに働いてもらうことにしたんです。

この「びーの×マルシェ」と名付けたお店には、豊中銘菓など地元の商店の品も置いてあるし、あぐりで作った野菜やコロッケ、「びーのびーの」の子どもたちの手づくり品も売られていて、地域のお年寄りがおしゃべりしたり、お茶を飲みがてら引きこもりのお子さんのことを相談される方など、いろいろな方が来られます。

ここで販売を担当している若者は、あぐりの農園へ来ててもすごく元気ですし、当初は仕方なくレジを打っていた若者が、1年後には驚くほど上手に接客できたりします。

販売は嫌いけど絵を描くのは好きだという若者には、「あぐり農園で壁画アートをやってるから、おいでよ」と声をかけます。みんなが農業や販売が好きなのではないし、その必要もないので、自分の好きなことや関心のあること、得意なことを見つけて、それによって他の人とつながり、社会参加をしてほしい。その手助けができればと思っています。

## ▼声をかければ、助っ人が現れる

### 【マルティネス】

豊中市のような地価の高い都市部で農園の用地を確保するには、かなりの資金が必要ではありませんか。

### 【勝部】

8カ所の菜園の中で最初にできた岡町菜園は、所有者の方が「市民活動に役立ててほしい」と、無償で貸し出してくださいました。私がボランティアによる地域福祉活動について講演したのを聞いてくださったようです。

別の菜園は、大阪国際空港の滑走路のすぐ近くに立地していて、空港の管理会社が所有していた土地を、豊中市を通じて社協が無償で借り受けています。

有料老人ホームの緑化スペースを、ホームで管理できなくなったから助けてほしいと依頼され、

あぐりが管理を請け負って菜園にしているケースもありますし、福祉施設の庭園、個人のお宅の庭なども菜園として無償で使用する許可をいただいています。

【マルティネス】

このような住宅地で農園を開くとなると、近隣住民の不安も大きかったと思います。

【勝部】

それは私たちも想像できたので、住民の方を対象にした説明会を6回開きました。最初は反対される方もありましたが、農園の管理の仕方、排水管理や景観の維持、休日・夜間の対応などを、豊中市社協として丁寧に説明して、開園の了解をいただきました。

【マルティネス】

畑で使用する資材等は、どのように調達するのですか。

【勝部】

農作業に必要な肥料・苗・種・工具などは買いますが、苗は高いので、最近はほとんど種から育てます。イベントで何か必要なものがあれば、周りに声をかけて、寄贈していただいたり貸し出しをお願いしたりします。そうすれば、経費節減になりますし、声をかけることで取り組みも広がりますから。



岡町農園の壁画アート

先ほどお話ししたトマトジャムのように、あぐりの活動に賛同・協力してくださる企業やお店や団体もありますし、野菜の売り上げも収入源になり、活動費用に充てることができます。ホームページの作成や更新は、得意な会員さんがいるので、その方をお願いしています。会員さんといろいろ話していると、なんとなく得意分野がわかるので、「この場でさらにこんなことができたならおもしろいな」と提案するんですね。すると、「そんなこと簡単やで」と言って、力を貸してくださいます。

## ▼楽しくなければ続かない

【マルティネス】

あぐりの活動が始まって今年で7年目。長く続けているのはなぜだと思いますか。

【勝部】

理由はいくつかあると思いますが、一つはリタイアした男性に役割と出番を用意したことでないでしょうか。これが農園ではなく「おしゃべりサロン」だったら、現役時代の役職の話になったり、仕事以外の話題が乏しくて、おしゃべりそのものが続かなかったりして、楽しさが薄れ、だんだん会員が減っていったのではないかと思います。

あぐりは、特に最初は開墾に必死で、昔の職場の話をしている暇もなく、前しか見ていませんでした。やるが多すぎて、そんな余裕がなかったのですが、それがいつのまにか組織の風土として根付いたようで、いまでも自分が現役のときどんな肩書きだったかというような話は誰もしません。

一方で、その方の得意な分野については大いに力を発揮していただきます。まさに役割と出番を用意することですね。会員さんの得意技を持ち寄ることで、みんなが助かり、それが会員さん相互の喜びや楽しさになります。ボランティア活動は楽しくなければ続かないということだろうと思います。

それから、上下関係がなくて対等平等と言いましたが、やっぱり誰かが目的や方針を提案する必要があります。「あぐりパークという広い体験型農園ができたから、ヒマワリを植えて、迷路にしたいな」と提案することで、みんなが動き始める。「レンゲまつりで鯉のぼりを上げたい」と提案すると、竿を持ってきたり準備を手伝ってくれる会員さんが現れる。でも、まずは「レンゲまつりをしたい」と提案する人がいないと始まらないのです。提案すると、イベントが動き出して、それが何年か続くと定着するわけです。

#### 【マルティネス】

これから力を入れたいことは？

#### 【勝部】

コロナ禍の前ですが、子ども用のミニ農園で、子どもたち自身が種まき、苗の植え付けなど、畑の管理をすることで生き物について学んだり、豊かな情操を育んでもらいたいと思って、全5回の「キッズあぐり農業体験プログラム」を始めたんです。この試みはコロナ禍で中断していますが、事前申込制で応募してきたのは家庭環境の整った子どもばかりでした。

考えてみれば当然で、しっかり募集

情報をキャッチして、ちゃんと申し込みをして、当日は保護者が連れてくることのできる家でなければ、そもそも応募しないし、応募できない。そういうチャンスの少ない子どもたちにこそ、あぐりを拠点にした活動の中で、もっといろいろな人と交流し、つながり、学ぶ機会を提供で



豊中市社会福祉協議会 福祉推進室室長

コミュニティソーシャルワーカー

勝部 麗子 氏

きないか、というのが現在の私の問題意識であり、あぐりの課題ではないかと思っています。ただ、あぐりは意外なところにも変化をもたらしています。有料老人ホームでは、あぐりが緑化スペースを借りて野菜を栽培し、収穫した野菜はロビーで販売もしていますが、そういうことが始まると、それまで「食事がまずい」とか「テレビの映りが悪い」と不満だらけだった入居者の中で、あぐりの野菜をロビーで買って、ご自分でお料理する方が増えたのです。

周りへの不満を言うよりも、自分でできることをしたほうが楽しいから、入居者さん同士の雰囲気も施設との関係性も良い方向に変化しています。

あぐりには、そういう可能性がたくさんあるので、この共有地を拠点にして、誰もがつながり合い、認め合い、支え合うまちにしていきたいと思っています。

#### ※コミュニティーソーシャルワーカー(CSW)

地域で生活上の課題を抱える個人や家族を支援するために、地域の人材や制度、サービス、住民の援助などを組み合わせたり、新しい仕組みづくりのための調整やコーディネートを行ったりする専門職。社会福祉協議会や地域包括支援センターに配置されることが多い。



豊中あぐり 運営委員長 戸谷 友隆 氏



豊中あぐり 池田 雅美 氏



『地域共生ホーム 豊中あぐり  
ぱらす 和居輪居』  
集会所やイベント会場として  
活用されている。

### Ⅲ. 駆けつけ型 + イベント型 ～動ける若者の活躍とマネジメント～

このスタイルでは、地域の高齢者の困りごとや不便に対し、若者が駆けつけて解消します。一見、高齢者が若者に支えられている構図に見えがちですが、若者が高齢者と関わることで楽しみを見いだしたり、成長につながっており、実は“育てられている”という側面が大きいことがわかります。若者は、特別な専門性を持っていなくても自分には役に立てることがある、喜んでもらえることができると感じられる経験をし、成長を実感します。そしてこのような活動は、若者にとって、やらされてやるものではなく、自己犠牲を強いられるものでもなく、社会的課題の解決に自発的に取り組まれているものであり、楽しんで行われているものであることが特徴的です。

「社会福祉法人ゆうゆう」では、自主的にボランティアをしたい学生と地域の高齢者を専門的な視点を持ったコーディネーターがマッチングしています。学生には地域サポーター事業の研修に参加してもらうことでスキルを身につけ、報酬が支払われる、有償ボランティアにしています。学生の成長を温かく見守り、的確なマッチングを展開するボランティアコーディネーターの鈴木氏と、北海道医療大学のサークル『ONE』の学生お2人にお話を聞きました。

## 7. 社会福祉法人 ゆうゆう

### 『学生と高齢者をつなぐ地域活動』



社会福祉法人 ゆうゆう

所在地:北海道石狩郡当別町六軒町 70-18

沿革:2005 年設立(2013 年社会福祉法人格を取得)

事業内容:障害者総合支援法に基づく障がい者地域生活支援事業 障がい者相談支援事業  
介護保険法に基づく高齢者地域生活支援事業 子育て支援事業 福祉教育事業  
調査研究事業 等

“「ひとりの想い」を文化にする”をビジョンとし、地域活動を幅広く展開。

北海道医療大学との包括連携事業では、若者と高齢者をつないでいる。

インタビュアー:松本賢哉(京都橘大学)・マルティネス真喜子(京都橘大学)

インタビュイー:鈴木 美幸 氏(社会福祉法人ゆうゆう)

雄谷 亮太 さん(北海道医療大学 4 年)

石田 宙 さん(北海道医療大学 4 年)

### ▼きっかけは“ひとりのおじいちゃん”との出会い

#### 【マルティネス】

社会福祉法人ゆうゆう(以下、「ゆうゆう」と北海道医療大学の学生の皆さんは、連携して地域の人びとの自宅訪問や生活支援に取り組んでいます。その活動が始まった経緯を教えてください。

#### 【雄谷】

ぼくは北海道医療大学の 4 年生で、リハビリテーション科学部理学療法学科で学んでいます。同時に、大学公認のサークル『ONE』(以下、『ONE』)という地域貢献団体に所属していて、3 年生だった昨年はその代表を務めていました。地域の方々との関わりは、この『ONE』の成り立ちと関係があります。

『ONE』は、ぼくの 1 年上の先輩が立ち上げた団体で、そのきっかけになったのはひとりのおじいちゃんとの出会いだっただけです。「ゆうゆう」の職員さんに紹介されて出会ったそのおじいちゃんが「生きがいなんて、ないよ」と言うのを聞いて、先輩は「学生でも何かできることがあるんじゃないか。おじいちゃんがやりたいと思っていて、これまで一人ではできないとあきらめていたことを、なんとか実現させよう」と思いつき、何人かの学生と一緒に、おじいちゃんの望むことをやってみました。そうしたら、「もっとこんなふうに地域の人たちと関わりたい」という話になって、そこから『ONE』が立ち上がりました。

『ONE』が始動したのは 2020 年で、ちょうど新型コロナウイルスの感染が拡大し始めた時期だったため、地域の方々に関わることもあまりできない状況でした。そこで、当時の『ONE』の代表が、「ゆうゆう」のボランティアコーディネーターの鈴木さんに相談すると、もともとあった当別町地域生活サポーターという事業に学生も参加できるようにコーディネートして下さって、感染対策をしながらボランティア活動ができるようになったんです。

#### 【鈴木】

地域生活サポーターというのは、当別町共生型ボランティア養成講座を受講した人が参加でき

る有償ボランティアの仕組みで、雪かき、ごみ出し支援、外出支援、庭の手入れなど、年間約1000件の依頼があります。

コーディネーターとしては、専門性を持った人が支援するほうがいい場合もあれば、学生のサポーターが入ったほうがつながりが生まれる可能性が高いと思われる場合もあるので、その辺を考慮しながらコーディネートします。

そのマッチングがうまく合って、学生が訪問することですごくお元気になられて、たとえば「本当は運動がしたかったんだよ」といった本音が出てくることがあります。そうすると、学生さんが「じゃ、これから一緒にお散歩しましょうか」というふうに応じてくれて、最初は月1回だった散歩が隔週になったり、散歩以外にも広がるなどして、いろいろな活動が生まれています。

### ▼有償だからこそ、つながることもある

#### 【マルティネス】

地域生活サポーターという有償ボランティアの仕組みは、なぜ生まれたのですか。

#### 【鈴木】

当別町は、シニアの移住者がけっこう多いので、そういうアクティブシニアの生きがいづくりをしたいという思いがありました。もう一つは、ボランティアに何かしてもらった時のお礼に悩む人が多かったので、それなら有償にすれば気がねなく頼めるのではないかという理由もありました。

有償で活動した場合、その報酬は依頼者が学生に払うので、「ゆうゆう」の職員がコーディネートしたからといって法人の収入にはなりません。お金を払うことで割り切れる関係も必要だと考えています。最初は有償ボランティアと依頼者という関係でも、友だちになってしまえばお金は不要になります。でも、そうなるまでの入り口の段階では有償だからこそつながる場合もあるということが、いろいろ取り組んでいるうちにわかってきたんです。

ですから、学生さんは、ずっと有償ボランティアとしてつながり続けるというよりは、大学を卒業して、当別を離れて就職しても、自分の祖父母に会いに行くような気持ちで年に一度くらいは遊びに来てくれたり、「地域の人とも、こんなかたちで友だちになれた」という出会いの機会にしてくれたら、私としてもうれしいです。

### ▼依頼者の背景を考え、明るく対応する

#### 【マルティネス】

ボランティアをコーディネートする時、失敗した例はありますか。

#### 【鈴木】

学生に対する依頼者の依存度がだんだん高くなる事例がありました。学生への電話が頻繁になり、授業中でも電話に出るまで呼び出し音を鳴らし続けるので、注意したらケンカになりましたが、理由を聞くと「ストーブの排気口が雪に埋まって、死んでしまうかもしれないと不安になった。自分は外に出ていけないから、排気口を見てほしかった」ということでした。

そういう場合、私はクレームとして処理せず、なぜ依頼者がそういう行動を取るのかを考えます。そうすると、その依頼者には頼る人がいないし、寂しいし、不安だという状況が見えてきます。

ここ当別では、年に数回は吹雪で車も出せない大変な日があって、その日もひどい吹雪でした。でも、学生さんたちは楽しんで行ってくれたのです。「車で行けないなら、スキーウェア着て、スコップ担いで、走って行ってきます」と言って(笑)。この時は私自身も学生さんたちの明るさに救われましたね。

【石田】

突然の電話で、「きょうの午後、雪かきに来てくれ」と言われると、正直、驚きますが、友だちと一緒に楽しいので、逆に「よっしゃ、やってやろうぜ。みんなで行こうぜ」というノリで、数人で行きました。雪かきの後は、みんなでラーメンを食べて、わいわいしゃべるのが楽しかったですね(笑)。

#### ▼ひとりのニーズを大切に、対等な立場で活動を楽しむ

【マルティネス】

そうした活動を行ううえで、特に大事にしていることは何ですか。

【石田】

ひとつは、ぼくら自身がどう楽しむかということです。突然の雪かきの依頼でも、仲間とやれば楽しいので、悲壮感なくやれますし、そうやって楽しんでいると他の学生も集まってきてくれます。

【鈴木】

私も、悲壮感なく受けとめて、地域の困りごと解決に地域の人をどう巻き込むかという視点で考え、動くようにしています。

もちろん、突然の依頼を受けて、学生さんに「訪問してきてほしい」と頼むこともありますが、基本は彼らが行きたいかどうかで決めます。

【石田】

ぼくらが大切にしているもう一つは、ひとりの人の思いを大事にする、ということかなと思います。たとえば月 2 回ほど開いている運動教室では、地域のおばあちゃんたちと学生がストックウォークやレクリエーションを楽しんでいますが、始まりはあるおばあちゃんの「運動したい。家にいても一人だし、寂しい」というつぶやきでした。この、たった一人のおばあちゃんのおつぶやきを聞いて、「どうせやるなら、おばあちゃんの友だちも呼んで、学生ももっと集まって、一緒にやろうよ」という話になったんです。

【鈴木】

「ゆうゆう」も、法人の理念に「ひとりのニーズ、ひとりの想いに寄り添う」ということを掲げていて、私もそれを大事にしたいと考えています。だから、地域のお年寄りを「高齢者」という言葉でくくるのではなくて、それぞれ名前と個性を持った人として捉えるし、学生についても「学

生ボランティアを何人、派遣します」ではなくて、「このおじいちゃんには〇〇くんや〇〇さんが合いそうだな」というふうにコーディネートしていきます。

【雄谷】

ぼくは、「この人のために何かをする」というよりも、もっと単純に、ぼく自身の楽しいことを相手の方と共有するほうがいいのかなと思っています。「この人のために」という姿勢で関わると、地域の方は「申し訳ない。ごめんね」と謝ることが多いけれども、ぼくのほうが遅刻して、「すみません」と謝ると、「ああ、いいよ」と言って、飲み物をくれたりして、そういう時のほうが地域の方は楽しそうなんです。

【鈴木】

『ONE』が立ち上がった頃、どんな活動がしたいのかと初代代表の学生に聞いたら、「誰かを助けたいのではなく、生きがいのないお年寄りも、ぼくたち学生とつながることで楽しく生きてくれるのではないかなと思うんです。ぼくたち、若いから！」と力強く語りました。

たしかに、そこに専門性は必要なくて、学生でもできることがあるのです。もちろん、専門性が必要な方もたくさんおられて、その場合は専門職の人や専門機関とも連携しますが、専門性が要らない場面もあるし、『ONE』が立ち上がったのはコロナ禍の最中でしたから、人と人が出会ってつながることの大切さをなおさら強く感じてきました。

それと、学生さんと地域の方をコーディネートして、両者がある程度つながったら、学生さんは、相手の方の困りごとの発見や解決よりも、その人の楽しいことやあきらめてきたことを一緒にやってくれればいいなと思っています。

また、学生さんには社会勉強をしてほしいと思っているので、「何かをしてあげるという構えではなく、いろんなことを教えてくださいという姿勢で行ってね」と話しています。そのほうが学ぶことが多いし、人生の先輩であるお年寄りと接することによって、どのような話し方をしたらいいのか、どこに気をつけたら喜んでもらえるのかということ、教科書や机上ではなく自然と身につけて、就職して別の地域の高齢者と接した時に活かしてほしいと思うからです。

## ▼学生と地域の人びとを、どのようにつなぐのか

【マルティネス】

依頼者と学生ボランティアのコーディネートは、どのような手順で進むのですか。

【鈴木】

地域の方から依頼を受けた場合は、まず私が訪問して、生活環境や性格、認知症や既往症の有無などを確認した後、個々の学生さんとの相性などを考えて、つなぎます。その結果、とても仲良くなって、最終的に個人的なやり取りをする高齢者と学生さんもありますが、そうなるまでのやり取りはすべて私を通すようお願いしています。それを水臭いと言う人もいますし、学生さんは忙しい私に遠慮して「勝手にいきます」と言ったりしますが、過去にそれでトラブルに遭った学生さんもいるので、そこは守ってほしい点です。

一方、学生さんから「こんなことをやりたい」と言われた場合は、私たち職員が持っているつ

ながりリストの中から、学生の望みを聞いてくださりそうな方を紹介して、最初だけは私が仲介しますが、後は当事者同士で自由にやってもらいます。

【石田】

ぼくは、鈴木さんに「ベンチを作りたい」と言って、木工に詳しい地域の方を紹介していただきました。その方のアドバイスを受けながらベンチを作り終えると、完成したばかりのベンチに座って、その方が弾いてくださるギターを聴いて、ほっこりしました。

【鈴木】

重い病気で寝たきりの 30 代の男性について、地域包括支援センターから「ご本人は音楽が好きだから、音楽の好きな人が集まっている場면을ライブ配信してもらえないだろうか」という依頼を受けたことがあります。

それで、音楽が好きそうな高齢者の方や、いろいろなサークルの方に声をかけて、ギターやウクレレや笛を演奏できる学生さんにも参加してもらって、いまも毎月 1 回、オンラインによる音楽サロンを開いています。

ただ、私たちは「重い病気があって、ご本人もご家族も大変でしょうから、私たちができることを支援します」という姿勢ではなくて、「どんな音楽だったら反応してもらえらるだろうか、楽しんでもらえるだろうか」ということをいちばん大事にしています。

実際に、学生さんが「元気ですか？」と画面越しに手を振るだけで、すごく反応されることがわかって、訪問看護師さんも驚いていました。

【石田】

統合失調症のおばあちゃんも、それまで部屋のブラインドを日中も下ろしたままで、うつむいて床を見ながら歩くような状態だったのに、学生が継続的に関わるうちに、「外にお花が咲いていますよ。ちょっと見てみますか」と声をかけたら、すっと出てこられるようになりました。すごい変化で、びっくりします。

## ▼コーディネーターの存在がカギ

【マルティネス】

コロナ禍の中での活動ということで、何か工夫はしましたか。

【鈴木】

深掘り研究会というのを週 1 回、夕方 6 時から 1 時間くらい、オンラインでやっています。ここでは、私が「こういう人がいるよ。誰か、行ってみたい人はいませんか」と呼びかけて、行ってみたいという人は手を挙げてもらって、その後は個人情報絡むのでダイレクトに連絡を取り合います。

この研究会の参加確認はいっさい取らずに、とにかく「決まった曜日の決まった時間にやっているから、出られる人は出てね」という感じで、私自身は休まず出続けてきました。なぜなら、それが私のやれることだったし、コロナの流行がひどかった時期は学生とつながり続ける術がそれしかなかったからです。

だから、何人が集まって、どんな話をしたか、ということは重要ではなくて、いつでもこの時間にここで誰かが集まっているんだということを、みんなに知ってもらいたかったのです。この集まりを学生たちが一生懸命に広めてくれて、総勢 30 人ぐらい集まった時もありました。

【石田】

新しく『ONE』に参加した学生については、とりあえず深掘り研究会で雰囲気を感じてもらって、もし地域の人と仲良くなりたいたいという気持ちになったら鈴木さんとつながってコーディネートしてもらおうというパターンができてきましたね。

【マルティネス】

お話を伺っていると、コーディネーターの重要性を強く感じます。

【石田】

たしかに、ぼくも、何かやりたいことがあって地域の人とコーディネートしてほしい時は、迷わず鈴木さんに頼みます。ベンチを作りたいと思った時もそうでしたし、雄谷くんがギターを始めた時も「地域で音楽サロンをやっているよ」と教えてもらっていました。そういう場面では、すごく頼っていますね。

【鈴木】

私は、学生さんが「やりたい」と言うことは、絶対になんかあげようと思っていますし、地域の誰とつなげばいいかもすぐに思いつきます。

彼らとは対等の関係でいたいので、私が困った時も相談します。学生さんに頼られるより、私のほうが頼っているかもしれません。彼らがいるから私もコーディネーターとして回せるのであって、もし応えてくれる人たちがいなければ空回りになってしまいます。どちらもウインウィンであるために、まずは相談することを心がけているわけです。

ただ、彼らの背後には大切に育ててこられた親御さんもおられるので、私も母親のような目で見ている面があります。彼らを大切に思っているし、その気持ちは意識的に伝えるようにしています。

## ▼一人ひとりと向き合うから、1 回きりのボランティアで終わらない

【マルティネス】

こうした活動が継続してきた秘訣は何だと思えますか。

【鈴木】

「ゆうゆう」という法人そのものが、個別対応を重視しているので、学生さんとも個別に対応します。それが活動継続のポイントかもしれません。大勢の学生がドッと来ると、こちらも受けとめきれないので、地域と繋がりたい学生が共生型ボランティア養成講座を受けた後、私といろいろな話をします。その会話の中で個々の学生さんの性格や希望などを知ることができずし、私のほうは地域の方の「情報も持っている」ので、コーディネートできるわけです。

その意味では、地域の方と学生との間の事故を回避するためにも、やはり専門的な視点を持ったコーディネーターの存在が必須だと思います。コーディネーターがいなければ、地域の方も

学生も、どちらも守れませんから。

個別対応が基本ですから、「学生ボランティア」とか「地域の人」という大枠で捉えずに、必ず「〇〇さんと〇〇さん」というふうに名前をつなげます。たとえば「地域の 80 歳くらいのおじいちゃんのところに 10 回行った」と言ってしまうと、せつかくの活動なのに思い出にならないし、もったいない。そうではなくて、「鈴木さんというおばあちゃんのところに 10 回行って、1 回目はこんな感じだったけど、10 回目にはこんな話ができるようになった」と語れるような思い出にしてほしいと願っています。

【石田】

『ONE』の魅力は、お年寄りや子どもたちと関われることよりも、一人ひとりにちゃんと向き合える環境ができています。だから、1 回きりのボランティアで終わらないんです。

鈴木さんが、一人ひとりの学生をしっかり見てくれて、合う人とつなげてくれるから、学生のやりたいことと地域の人がやりたいことを一緒にやることができます。そこには「やらされている」とか「してあげた」という感覚は皆無ですね。

## 8.株式会社 LibertyGate

### 『アシスタ～高齢者と若者のマッチング～』

株式会社 LibertyGate 代表取締役 菅原魁人



#### 株式会社 LibertyGate

所在地:秋田県秋田市

沿革:2020年7月 設立

事業内容:

「高齢者になることが待ち遠しいと思えるような社会を創り出す」ことをミッションに、日常の悩みや不便を抱えている高齢者とそれを解決する学生とを繋ぐサービス「アシスタ」を運営。「アシスタ」メンバーは学生で構成。高齢者と学生のマッチング事業を展開。

<https://libertygate.jp/>



株式会社 LibertyGate

代表取締役 菅原魁人 氏

#### 1.自己紹介

株式会社 LibertyGate の菅原魁人(すがわらかいと)と申します。1999年4月5日秋田県秋田市生まれです。秋田県秋田市で生まれ、現在2022年10月31日現在までの23年間秋田市で暮らしております。父の仕事の関係で幼少期数年間秋田市外にて、暮らしておりま

したが、物心つく前にあたるため、ほとんど秋田市で暮らしていました。小学校 3 年生から高校 3 年生までは野球部に所属して、丸坊主で部活動に励んでおりました。幼少期はスポーツも勉強も人並みに頑張らして、たくさんの友達とも出会うことができ、よい学生生活を過ごすことができました。高校卒業後は地元の秋田大学に進学し、国際資源学部に入りました。国際資源学部では主に、鉱山、鉱石の勉強をしておりました。大学では、サークルや部活動はやらずに、アルバイトや友達との遊びに全力を注いでおりました。そんな大学生活でしたが、大学 1 年の冬に起業することを決意して、その後様々な起業家、経営者の方と知り合うことでビジネスアイデアや考え方を学び、1 年後の 2019 年秋頃に高齢者支援サービス「アシスタ」をローンチ。その後 2020 年 7 月に正式に株式会社 LibertyGate を設立しました。そして、2022 年 3 月に秋田大学を卒業しまして、卒業後も引き続き会社を継続して行っております。現在(2022 年 10 月 31 日)で会社 3 期目となっております。今後も事業経営に邁進しながら、弊社ミッションの「高齢者になることが待ち遠しいと思えるような社会を創り出す」ことに向かっていきます。

## 2.会社紹介

弊社は、「高齢者になることが待ち遠しいと思えるような社会を創り出す」ことをミッションに、日常の悩みや不便を抱えている高齢者とそれを解決する学生とを繋ぐサービス「アシスタ」を運営しております。介護保険では賅えない課題を介護保険外で解決していくことで今後社会課題として挙がってくる、介護保険費の抑制、介護人材不足解消に寄与していきます。高齢者の方からの掃除、買い物、除雪のようなご依頼やケアマネージャーやご家族さんからの病院の付き添い、スマホ指導などたくさんのご依頼を受けることができます。高齢者や介護についてしっかり教育され、厳正な面接で採用された学生メンバーが高齢者の自宅に訪問をして、生活における便利さ、快適さ、豊かな時間を提供していきます。高齢者支援サービス「アシスタ」を秋田県秋田市で展開しており、これをフランチャイズ展開した「アシスタ FC」を 11 エリアで展開(秋田県大仙市、仙北市、岩手県盛岡市、三重県四日市市その他)しております。今後 3 年で 150 のエリアに拡大することを目標に展開していきます。その他「アシスタ」、「アシスタ FC」で培ったシニアプラットフォームを用いた事業として、シニア市場への参入やシニア向け商品開発支援、シニアマーケット調査支援事業である「アシスタリサーチ」を展開しております。シニア市場に参入したい企業やシニア向けの商品を開発したので、テストマーケティングをしたい企業向けに調査支援または、伴走支援を行っております。上記 3 つの事業を軸に秋田県秋田市を本社に活動しています。

## 3.会社設立経緯

創始者の菅原が大学 1 年次に起業を志したことがスタートとなりました。大学 1 年次の時に起業家、経営者の方とたまたま触れ合う機会があり、そこで起業家や経営者が今までかかわってきた大人達とは少し違うことに違和感を感じたことがきっかけです。その違和感は普段触れ

合ってきた大人達とは、エネルギー、見ている景色、魅力が何か違う、とびぬけていると感じたからです。その姿を目の当たりにしてから自分のその世界を見てみたいと思うようになり、起業を志しました。起業を志した大学1年の冬の時ですが、この時はまだ高齢者向けのものやろうという意思やビジネスアイデアはありませんでした。そのため、起業はしたいが、何をしたいかわからないといった状況でした。そこから、数多くの起業家の方に引き合わせてくれる起業家の方や親身に相談に乗って下さる起業家の方がたくさんいまして、そういった方々にアドバイスをいただきながら、自分は何がやりたいのか、どんなことが社会に役立つのかを考えることになりました。その中でせつかく起業をするのであれば、共感できる課題やカスタマーかつ、社会のためになることという2つの軸が生まれました。そこからその2つに重なる部分は何だろうなど考えるようになり、結論は「高齢者」でした。高齢化率 No.1 の秋田県で生まれ育ち、高齢者が身近な存在でした。なおかつ、祖父母にもとてもお世話になり自分自身もその祖父母を高齢者と見立てることで、共感しやすくなりました。また、私の親世代もいずれは高齢者になり、私自身もいずれは高齢者になります。そうなったときに他人事には感じられず、自分事に感じます。高齢者になったときのことを想像したときにネガティブな感情がとても大きいので、それを変えていきたいと思い、高齢者向け、そして、ミッション設定をしました。そこから、2~3 か月間の高齢者100人インタビューを実施して、実際に高齢者の方がどういった課題を抱えながら生活をしているのか深堀していきました。そこででた課題を解決するモデルを考えて2019年の冬に「アシスタ」をリリースすることになりました。

#### 4.会社設立準備(人、物、金)

高齢者支援サービス「アシスタ」を2019年にリリースしたときは私1人で実施しました。そのため、事業に必要な「人・物・金+情報」は必須ではありませんでした。「人」に関して、起業家、経営者や設立に必要な人はたくさんの方から紹介をいただけました。そのため、多くの人と出会うことができました。高齢者からのご依頼に関しては自分から営業をかけていったため、人に出会うように努力していきました。そうすることで、情報も得ることができました。「物」に関しては、こちらも特に設備投資が必要なモデルではなく、最小限で俗人的に回すことができました。「金」に関して、設備投資なども必要ではないため特段多額の投融資は必要ではありませんでした。そのため、本当にミニマムでのスタートができました。

#### 5.苦勞したこと、失敗したこと

私自身高齢者ではないですし、会社経営もしたことがありませんし、従業員として、働いたこともありませんでした。そのため、何もかもが初めてです。初めてのことだらけなため、苦勞したことはたくさんありますが、逆にできないこと、わからないことには特に不安を抱えることはありませんでした。その中で苦勞したことを挙げるとすると、3つあります。1つ目は学業との両立です。よく私の周りの学生からも聞かれたり、学生で起業して、学業は大丈夫なのかというお話をされます。これは私自身どういった時間配分でやっていこうかも含めて悩みまし

たし、今でも何が正解だったのかはわかりません。私が所属していた学部が理系だったため、実験や研究など比較的時間がかかるものだったため、時間の使い方にはとても悩みました。しかし、私自身、起業に完全に振り切りたい気持ちが強かったため、軸の所在をしっかりとブラさずにやっていくことで乗り切りました。時には、教授に呼ばれることもありましたが、宿題が終わらないことがありましたがモチベーションとしては、早く卒業すること、そうすれば、起業に専念できるという言葉で自分自身にも言い聞かせ、単位を落としたり、留年することは逃げだと思い、何とか4年で単位も落とさず卒業することができました。この選択が本当に正しいかは今でもわかりませんが、とても苦しみました、できないことはないんだと改めて思います。2つ目は情報の取捨選択です。たくさんの起業家、経営者と触れ合うことでたくさんの意見やアドバイスをいただくことができ、それが今の成長に繋がっていますし、それがないと、確実に今の自分はいないと思います。しかし、それに伴い、色々な意見やアドバイスが飛び交うことで自分自身がどうしたらよいか迷うことがあります。時には人によって真逆の意見をいただくことがあります。その時にどの意見を参考にして、取り入れていくかにとても苦労しました。自分の中で大切にしなければいけない軸や、このサービスの本当の価値を知っているのは利用者なので、利用者との対話で価値を判断していくことで何とか切り抜けることができ、今ではしっかり判断することができるようになりました。とはいえ、わからないこともたくさんあるので、大失敗しない程度にやってみて、修正をしていくという繰り返しが必要だと感じます。3つ目は2つ目と少し被りますが、自分の軸をどこにするかです。弊社事業「アシスタ」は高齢者と学生のマッチング事業です。そのため、両方に対して、WIN,WINにならなければいけません。しかし、高齢者と学生にすべて満足の行くものは目指していきませんが難しいのが現状です。そのためどちらにもいい顔はできず、どこかで妥協点が必要になってきます。当初の私は妥協点を見つけることができず、中途半端になっていました。その結果私自身もスタンスに悩み苦しんでおりました。しかし、ある時からやはり私がやりたいことは高齢者のためになること、高齢者の手助けだということに気づき、そこから学生に対してはある程度方針に合わせてもらい、それに伴わない学生は残念ではありますが、お断りをするできるようになりました。

## 6.成功要因

現段階で成功しているとは全く思わないので、成功要因と聞かれるととても難しく、恐縮ではありますが、その上でお伝えします。成功要因という質問ですが、私が思うこととしては、現在世の中にある手法や手段、方法は限られており、革新的な何かというのは、ほとんどないというのが私の考えです。何かすごい新たな発見やものすごいことをしたのではないかというのはずれていて、人が少しやりたくないなと思えるようなことでも、当たり前に行うべきことを実行していくことだと考えています。やりたいこととやらなければいけないことをしっかりと精査して、本当に今必要なことを実行していくことで成功に近づけると考えています。また、チャレンジの数を増やしながらい失敗もそれよりも多く積み重ねていくことで、成功の数も増やしていくことが鍵になると思います。

## 7.事業継続のコツ

事業継続のコツとしては、上記の成功要因と被ってしまいましたが、大きな失敗を回避しながらも小さな失敗を繰り返して、より良い価値やサービスに近づこうと常に努力し続けることだと思います。それが、長期的には、継続の力になると私は感じています。

## 8.将来のビジョン

弊社は「高齢者になることが待ち遠しいと思えるような社会を創り出す」ことをミッションに事業をしております。私自身高齢者になるということを想像したときに現状あまりポジティブな印象は持たず、ネガティブな印象がほとんどです。しかし、今後私含めた若い世代の前に自分たち親世代が先に高齢者になります。その親世代を見ても高齢者になることをポジティブにとらえている人は少ないでしょう。この現実ですが、今後人生 100年時代と呼ばれ、若者である期間よりも高齢者である期間の方が格段に増えていきます。そんな中で高齢者になることが辛く、苦しいものでは未来が明るくありません。そのため、私達は高齢者になることをもっとポジティブにとらえられるような社会を創り出すことをミッションに掲げながら日々邁進しております。このミッションを達成するためには、まずは現状の高齢者の不便の解消もしくは不安要素を消し飛ばす必要があります。そうすることで、まずは外部に頼むことで不便は解決できるという状態を作ることが必要です。その後で、そもそもその不便が不便として現れないように根本解決に着手していきます。弊社事業で例えると「アシスタ」で買い物代行のご依頼があります。まずは、この買い物を代わりにやってほしいと思ったら解決できる社会を創ります。その後でそもそも買い物を手伝ってほしいと思わないように、足腰の機能改善なのか、認知症なのか、根本解決に取り組んでまいります。そうすることで、高齢者の方がより生き生きとした生活を送ることができ、その上で、それを下の世代が見ることで、高齢者になることがポジティブに捉えられるような社会を目指します。

## 9. 千葉商科大学人間社会学部

### 『高齢者を対象とした生活支援サービスのマネジメントシステム構築』

千葉商科大学人間社会学部 准教授 齊藤 紀子



写真1. 活動の様子 利用者宅での家具移動

#### 1. 活動概要

千葉商科大学(千葉県市川市)では、学生が授業の空き時間を活用して、市川キャンパスの隣接地域在住の方々(主に高齢者)からの依頼に基づく生活支援サービスを提供する活動を、運営スタイルの変化をとめないながら2004年以来今日まで継続している。

2022年10月現在、人間社会学部のアクティブ・ラーニング・プログラムのひとつとして、「よろず隊」(2018年5月設立)が利用者宅屋内外の掃除・ゴミ捨て・家具移動・IT機器類の操作サポートなどを随時行っている。「よろず隊」以前は、本学全学部学生が参加可能な地域貢献ボランティア活動として、「CUC宅配・サービス」(2004年12月～2021年3月)が買い物代行・利用者宅屋内外の掃除・洗濯代行・IT機器類の操作サポートなどを週2回行っていた。この「CUC宅配・サービス」が「よろず隊」の母体となっており、これら2つの団体には連続性をみることができる。

両団体ともに、少子高齢化社会における高齢者の生活上の困りごとを解決すること、およびさまざまなステイクホルダーとのコミュニケーションや組織マネジメントを通じて学生の成長を図ることを目的としており、サービス利用料を設定したいわゆる「有償ボランティア」(以下、有償ボランティア)として運営されてきた。

## 2. 取り組みを始めたきっかけ

まず「CUC 宅配・サービス」は、市川市から「パートナーシップによるまちづくり検討業務委託」(2001～2003 年度)を受けて、政策情報学部の科目「社会調査法」の一環として本学市川キャンパス周辺の商店街を対象に調査を行ったことに端を発する(陸 2007; 瀧上 2010)。高齢者の住みやすいまちづくりが急がれるとの問題意識のもと、学生や地域住民が気楽に楽しめる商店ゾーンの構築をめざして 2001 年に調査を開始し、そこから商店小史研究、商店街ホームページの作成、宅配サービスの実証実験などの商店街活性化支援活動へと発展していった。2004 年 12 月の宅配サービススタートにあたっては、まずはボランティアとして出発しても 4～5 年後にはコミュニティ・ビジネスとして成功させることが意図されていた(陸 2007)。そして文部科学省 平成 16 年(2004 年)度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代 GP)」に採択された取り組み「地域課題の調査・分析に基づく政策実践教育」(2004～2006 年度)の一環として、2005 年度から特別講義「コミュニティ・ビジネス実践」が開設され、同講義履修学生により宅配サービスが提供される仕組みが整えられた(文部科学省 n.d.; 瀧上 2010)。学生達にとって単位取得が可能な科目履修による活動から単位取得のないボランティア活動に 2011 年度に移行した後も、「CUC 宅配・サービス」は担当教員や大学院生による指導およびサポートのもと、買い物代行・宅配サービス(200 円/回)を中心とした有償ボランティアとして活動を継続した。

「よろず隊」は、この「CUC 宅配・サービス」に参画していた学生がソーシャルビジネスおよびコミュニティ・ビジネスについて学び、持続可能な活動モデルの構築に関心をもったことに端を発する。生活支援サービス提供団体が財政的に自立できる収支構造と利用者・支援者双方にとって望ましいサービスのマネジメント方法を明らかにするべく、有志学生が自発的に集まって 2017 年初頭より検討を始めた。高齢者サポートセンターをはじめとした福祉分野の専門家による助言・サポート、および生活支援サービス提供団体・企業による先行事例調査から得られた知見をもとに団体設立準備を進め、2018 年 5 月によろず隊を設立した。同年 8 月から電球交換などの短時間で遂行できるサービス(100 円/5 分)および家具移動など比較的時間を要するサービス(300 円/5 分)の提供を開始した(利用料はその後の見直しを経て、現在は全てのサービスが原則として 300 円/15 分となっている)。

以下、現在進行形で活動を展開している「よろず隊」に焦点を絞って記述していく。

## 3. 活動準備(ヒト・モノ・カネ)

「よろず隊」の活動準備プロセスにおいては問題意識をもった有志学生による自発的な動きとそれを支援した様々な主体の動きがあり、その双方向の関係の中でさまざまな資源が動員され、よろず隊設立とサービス開始に至ったといえる。

学生たちは「CUC 宅配・サービス」での活動を続けながら、同活動を通して得た知見をもとに、自分たちが誰にどのようなサービスを提供したいのか、学業・他の課外活動・アルバイトなどと両立するにはどのくらいの頻度で活動することが望ましいか、運営していく上で必要なタ

スクは何でそれをどう分担するか、ボランティアとして行うのかソーシャルビジネスとして行うのか、などの論点につき学生だけで集まって議論を重ね、ある程度まとまった段階で教員や高齢者サポートセンター職員・企業実務家などの専門家に助言を求め、という作業を重ねていった。彼／彼女らは同時期に筆者が従事していた生活支援サービス提供団体のマネジメントに関する研究(齊藤・熊野 2017; 齊藤 2019a; 齊藤 2019b)にも参画しており、研究活動を通して共同研究者および研究協力者など学外の専門家とのネットワークも作っていたのである。ゼミ仲間や友人・後輩たちにもアプローチしながら熱心に活動する学生たちを支援しようとする動きは本学教職員、障がい者支援分野の地域団体メンバーや高齢者施設職員にも広がり、各主体ができることをできる範囲で実施する協働体制が構築されていった。

筆者および共同研究者は生活支援サービス活動とその研究のために必要な備品(PC、プリンター、金庫、自転車など)の提供を、本学職員は活動にあたって必要な学内手続きのサポートを、障がい者支援分野の地域団体メンバーは自団体と共同で活動可能な依頼案件の検討と事務局作業のサポートを、高齢者施設職員は高齢者支援や広報活動にかかる助言を行うなど、有形無形の資源提供を行った。よろず隊事務局にはマネージャーというポストが置かれ、主にサービス利用希望者からの電話対応と支援希望学生の活動可能日程の調整を行うこととなったが、初代マネージャーには障がい者支援に関する専門知識および経験が豊富な地域団体代表者が就き(2020年3月まで)、ソーシャルビジネスとしていくことを視野に入れて支援実務および組織マネジメントのノウハウを学生達に提供したことが活動基盤の迅速な整備に繋がったといえよう。なお初代マネージャーの方には筆者および共同研究者の研究協力者として、些少なから研究資金から謝礼金が支払われた。



写真2. 活動の様子 近隣住民の方々向けに企画・実施した学食体験ツアー

#### 4. 苦勞したこと

有志学生が主体的に立ち上げ運営してきた「よろず隊」ゆえに、学生たちにとっては卒業していく学生からミッションやマネジメントノウハウを引継いで活動を維持・改善していくこと、教員などの大人たちにとっては学生からイニシアティブを奪ってしまわないようにサポートすることや動機づけすることが苦勞した点として挙げられる。

大学生が活動に直接携わることができるのは4年間と限られており、活動メンバーは毎年入れ替わる。こうした中でサービス品質を担保するために、学生間で活動期間の長い学生から短い学生へ情報・知見を共有することが求められる。併せて学生ひとりひとりが高齢者支援と学生の成長をめざすミッションや利用者・支援者ともに満足を得ることを意図したマネジメント方法、有償ボランティアとして謝礼金を頂くことで学部予算を使うことなく活動経費を賄っていること、などを理解したうえで、学内外で活動目的や内容、成果を自分の言葉で語れることが求められる。これらを可能にするべく試行錯誤により学生たちが導入したのが①研修システム、②ITを活用した情報共有、③教員の研究室の一角を間借りした資料・金庫等管理(学生たちが必要とするときに教員に連絡する体制)、④学生たちだけでの(大人抜き)の交流会であった。2020年度にコロナ禍のため活動が全面休止状態になったのち2021年度から少しずつ再開した際も、これらが有効に機能したと考えられる。

##### ① 研修システム

利用者宅へ活動に赴く際、活動経験の長い学生が短い学生に同行し、利用者とのコミュニケーション方法、謝礼金を頂く際の領収書の書き方や活動報告書の書き方、活動後の帳簿への記入方法などを伝えているというもの。こうした形で数回、先輩学生のアテンドを得た学生は、それまでにボランティア経験がなかった学生でも不安をもつことなく自分ひとりでサービスを実施できるようになっていく。

##### ② ITを活用した情報共有

学年も履修科目も異なる20人ほどの学生たちが全員そろって会議を行うことはまず不可能であるため、情報共有にはLINEおよび(大学として遠隔授業に用いている)マイクロソフトTeamsを活用している。マネージャーを務める学生が、利用希望者からの電話を受けてメンバー全員が登録されたグループLINEに依頼内容を投稿し、活動希望学生を募る。活動希望の旨をマネージャー個人へのLINEチャットで伝えた学生と利用希望者の都合を調整し、活動日が決まる。活動当日、支援活動を行った学生本人が活動報告書データおよび利用者からのフィードバックをグループLINEに投稿する。利用者から受け取った謝礼金(現金)は、活動した学生が大学に行く日に教員研究室に寄って金庫に入金するとともに帳簿記入する。帳簿のみならずメンバー学生名簿やチラシなどのデータファイルは、Teamsフォルダ内に保存し共有する。

##### ③ 教員の研究室を間借りした資料・金庫等管理

教員研究室の一角に、よろず隊用資料として経理・活動報告書ファイル、チラシ、未記入の領収書などのほか、現金の入った金庫が保管されている。学生たちは必要なものを取りに

来たり、利用者からの謝礼金を金庫に入金したりするついでに、教員に支援現場での出来事や利用者あるいは学生間でのコミュニケーションにおける要対応事項について話し、適宜助言を求める。このとき教員は、学生たちの対応において優れている点と改善すべき点を整理したり、要対応事項について「・・・してみてもどうか」と提案したりと、学生たちが考え意志決定する形でのサポートを試みる（なお教員不在時には、研究館職員による立ち合い開錠も可能である）。

#### ④ 学生たちだけの交流会

大人たちがいない環境で、新入生歓迎会やクリスマス会などの学生間の交流機会をもつことで、ざっくばらんに話ができる人間関係と、授業・ゼミ・サークル等と異なるもうひとつの「居場所」がつけられる。



写真3. 活動の様子 スマホ教室

### 5. 失敗したこと

支援活動中に利用者宅の備品を壊してしまい、弁償してお詫びしたことがある。当事者となった学生が本アクシデント発生を隠すことなくマネージャーに情報共有したことから、迅速に代替品を購入して利用者宅に持参しコミュニケーションをとることはできた。しかし、大学が提供している傷害保険サービスの要件に合わないケースであったため、保険金請求をしなかった。この経験から、生活支援サービス提供に適した傷害保険に別途加入することとなった。

### 6. キーになったと思う成功・失敗要因

「よろず隊」の活動はまだ 5 年目であり、幸いキーとなった失敗要因を挙げるには至っていない。そこでここでは成功要因を 2 つ挙げておく。

1 つ目は専門機関とのネットワークである。学生たちが安心して活動に取り組めるよう、教員だけではなく、地域住民や地域の事情を熟知している医療・介護・福祉の専門家に相談できる体制となっている。「よろず隊」メンバーが提供する生活支援サービスとしては医療行為や身体介護は行えないが、利用希望者からの依頼内容の中にはこれらに該当する可能性のあるもの（例えば腕を組んだり体を支えたりすることが必要な買い物や通院同行）が含まれるケースがある。ほかにも依頼を引き受けることが適切かどうか、利用希望者の既往歴や家族状況な

どを踏まえて判断することが必要なケースもある。さらには支援活動をはじめたものの、学生が心理的負担を感じるものであるため専門機関に引継ぎを依頼することが望ましいケースもある。こうしたケースにおいて、適宜専門家に相談し助言や支援を得られることは、学生たちのみならず利用希望者やそのご家族にとっても安心材料であると考えられる。

2 つ目はマネージャーポストの引継方法である。前述のように、学生たちがイニシアティブをもって考え意志決定を行うことで「やらされ」感をもつことなく活動できているため、活動の中核を担うマネージャーポストの引き継ぎは後輩学生の「やってみようと思う」という意志を大切に学生間で行われることが重要である。現マネージャーの先輩学生とマネージャー候補となる後輩学生がタスク内容や進め方をともに確認して次期マネージャー学生を決めることができると、引き継ぎ作業も学生間でスムーズになされる状況となっている。



写真4. 活動の様子 草取り

## 7. 取り組み継続のコツ等

有償ボランティアとしての活動である以上、自己犠牲を強いられていると感じることなく社会的課題の解決に自発的に取り組むことができている、そして利用者、仲間の学生、教職員、学外の専門家等のステイクホルダーとのコミュニケーションを通して自らが成長できている、と学生自身が認識することが活動継続のコツになると考えられる。

筆者らが学生たちとともにに行った研究では、生活支援サービスの担い手のモチベーションを維持／向上させる要因は、世代に関わらず「承認(感謝されたこと)」「達成(利用者の役に立ったという自己効用感)」「必要とされる意義ある活動内容」であり、世代間の違いを考慮すると若年層の担い手にとっては「感謝」「学び」「仲間」がキーワードとなっているというインプリケーションが得られた(齊藤 2019a)。同調査では、高齢層の担い手にとっては「互酬的關係」がキーワードとなっているというインプリケーションも得られており、本調査結果から望ましい生活支援サービスを下記のように整理することができた。

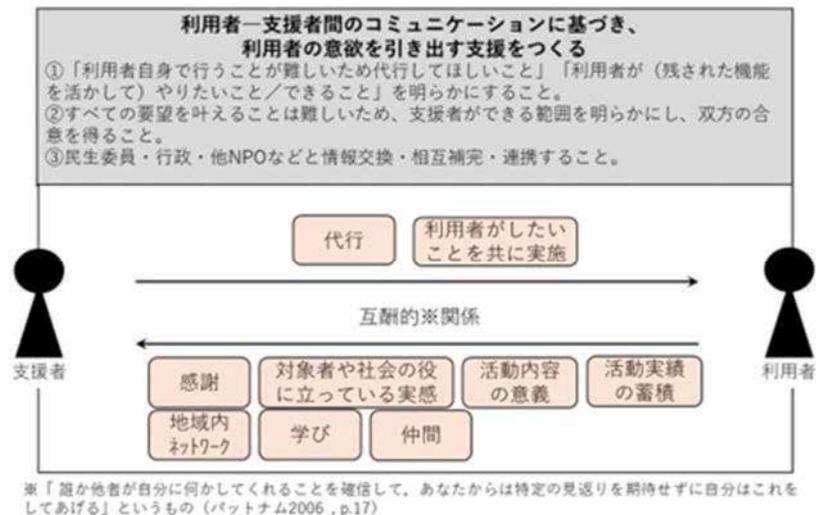


図.望ましい生活支援サービス （出所）齊藤(2019a)p.196

望ましい生活支援サービスには、サービスの利用者と担い手の間のコミュニケーションに基づき、利用者の意欲を引き出す支援をつくること（ルールづくり）が必要であり、そのために「利用者自身で行うことが難しいため代行してほしいこと」と「利用者が（残された機能を活かして）やりたいこと／できること」を明らかにすること、すべての要望を叶えることは難しいため支援者ができる範囲を明らかにし双方の合意を得ること、民生委員・行政・他 NPO などと情報交換・相互補完・連携することが重要である。利用者を大切にするとはいうまでもないが、これまでどちらかという優先順位の低かった、支援の担い手を大切にする体制・仕組み・システムづくりを優先課題とすることも重要である。

こうしたマネジメントについて、学生たちとともに今後も引き続き検討・研究していくことが必要だと考えている。



千葉商科大学人間社会学部  
准教授 齊藤 紀子 氏

<主要参考文献・資料>

- 陸正 (2007) 「新しいコミュニティ・ビジネスの可能性: ボランティア型宅配・サービスの実験」『千葉商大論叢』, 第 44 巻, 第 4 号, pp.53-79.
- 齊藤紀子・熊野健志 (2017) 「高齢者を対象とした生活支援サービスのマネジメントシステム構築—活動履歴管理システムの実証実験から得られた示唆」『千葉商大論争』 第 55 巻、第 1 号、pp. 249-258.
- 齊藤紀子 (2019a) 「在宅高齢者を対象とした生活支援サービスの担い手のキャリアブック構築—担い手のモチベーションとサービス品質への影響の検討—」『千葉商大論叢』、第 56 巻、第 3 号、pp.185-200.
- 齊藤紀子 (2019b) 平成 30 年度千葉商科大学・富士通研究所 共同研究報告書「地域活動・介護に携わる人材のキャリア履歴蓄積による活動促進の研究—地域における生活支援活動の促進に果たす IT の可能性と課題」
- 齊藤紀子・清水さえ子 (2021) 『市民による訪問型生活支援サービス—有償ボランティアで取り組む人に』学事出版
- 瀧上信光 (2010) 「現代 GP の活動—地域活性化への貢献」瀧上信光(監修), 宮崎緑(編集) 『大学維新への挑戦—千葉商科大学政策情報学部 10 年目の報告』中央公論新社, pp. 113-120.
- 千葉商科大学 (2015) 「地域住民のニーズに応え、笑顔を運ぶ: 学生ボランティア『CUC 宅配・サービス』」<https://www.cuc.ac.jp/activelearning/2015/al13.html> (2022 年 10 月 18 日確認)
- 千葉商科大学 (2022) 「主体的な学び: よろず隊」  
[https://www.cuc.ac.jp/dpt\\_grad\\_sch/ningenshakai/activelearning/al10/index.html](https://www.cuc.ac.jp/dpt_grad_sch/ningenshakai/activelearning/al10/index.html)  
(2022 年 10 月 18 日確認)
- 文部科学省 (no date) 「平成 16 年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」選定取組事例紹介について: 千葉商科大学」  
[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2015/08/10/1231931\\_039.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/08/10/1231931_039.pdf) (2022 年 10 月 18 日確認)
- ロバート・D・パットナム著、柴内康文訳 (2006) 『孤独なボウリング』柏書房

## 10. 岡山県立大学 学生サークル TAMAGO

### 『手作りお弁当プロジェクト』



#### 1. はじめに

岡山県が有する三大河川のひとつである高梁川流域に位置する総社市に、岡山県立大学があります。岡山市と倉敷市に隣接したまちで鬼ノ城や備中国分寺などの観光地があり、水墨画家の雪舟の誕生地としても有名です。

私たち学生団体「TAMAGO」は、岡山県立大学の保健福祉学部栄養学科の学生を中心として、総勢 46 名が所属しています。発足時は栄養学科の学生だけでしたが、現在は他学部、他学科の学生も参加しています。

私たち自身が管理栄養士の卵であること、また栄養満点なものをお届けしたい、自分たちの殻を破り、岡山県立大学から情報を発信し続ける団体でありたいという思いから「TAMAGO」という名前を付けました。

#### 学生団体 TAMAGO の人数構成

学年	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	合計
人数	24 名	14 名	6 名	2 名	46 名

2022 年 10 月現在

#### 2. TAMAGO のルーツ

学生団体 TAMAGO は、様々な過程を経て現在の形となりました。発足した 2015 年当時の岡山県立大学では地域での活動を行う演習科目(当時の科目名称は「おかやまボランティア演習」)があり、その科目において、栄養学科の 4 名の学生が特定非営利活動法人総社商店街

筋の古民家を活用する会(<http://www.soja-kominka.com/>)(以下、古民家を活用する会)の活動に参加したことがきっかけでした。この古民家を活用する会は、総社商店街にある旧堀和平邸を拠点にまちづくりに関する活動を行っている団体です。演習科目における古民家を活用する会の活動に参加する中で、大学での自分たちの学びを地域で実践してみたいといった思いが芽生え、古民家を活用する会のサポートもあり、野菜不足の学生のためのワンコイン丼を提供する学生食堂として、旧堀和平邸で活動を始めました。その後、2019 年から学生食堂の後継事業である“まごわやさしい食堂”では、対象者を地域の高齢者に変更し、現在もヘルシーランチを提供しています。食堂の名前となっている“まごわやさしい”とは豆・ごま・わかめ(海藻)・野菜・魚・しいたけ(きのこ)・いもの頭文字です。これらをすべて含む食事を摂ることが健康的な食生活につながるとされています。このような献立を身近に感じてもらい、皆さんが健康的に生活するための力になりたいという思いから生まれた食堂です。



まごわやさしい食堂の営業準備

### 3. カスタマイズ栄養弁当プロジェクト～十人十弁～

上記のまごわやさしい食堂の活動を継続しながら、2021 年度よりカスタマイズ栄養弁当プロジェクトを始めています。このプロジェクトは、2021 年度、2022 年度に総社市の「市民提案型事業」に採択され、補助金を受け、活動を行っています。

この総社市の補助事業である「市民提案型事業」は、2020 年 12 月にその存在を知りました。当時新たなプロジェクトとして立ち上げを検討していたカスタマイズ栄養弁当プロジェクトを、この市民提案型事業に申請することとしました。この新しいプロジェクトでは、「私たちが大学で学んだ栄養学の知識を活かし、一人一人のニーズに合わせたお弁当を提供することで、健康づくりを始めるきっかけをつくりたい」、また、「孫世代の私達との対話を通して、食事の楽しさを感じてもらいたい」という思いを込め、このようなお弁当を提供することで、総社市の抱える健康問題について向き合い、地域の健康づくりに貢献したいと考えました。

この「市民提案型事業」申請に向けて取り組む際にはじめに必要なことが「申請書の作成」です。この作成には大変苦労しました。この事業を紹介して下さった方や地元の社会福祉協

議会の方、地域の協力者の方々の協力を得ながら、申請書を提出することができました。無事に、第一次審査である書類審査に合格し、第二次審査のプレゼンテーションに挑みました。大学の授業等でプレゼンテーションの機会はたくさんありますが、公共的な場での発表は初めてだったため、どのような点をアピールポイントとして申請書を作成していくか等、勉強することが多かったです。

続いて、プレゼンテーションの内容を紹介します。私たちの新しいプロジェクトを必要とする地域の現状の認識・課題としては次のような点がありました。

①申請書作成時の 2020 年当時、新型コロナウイルス感染症蔓延下で「食事」に関する意識が大きく変化していること。

②飲食店での外食が減り、お弁当の需要が高まっていること。また、テイクアウトや出来合いのお惣菜等を購入することが増え、栄養バランスに偏りがちになっていること。

③一方で、自宅での料理頻度が増え、食事に関する健康意識が高まってきていること。

そこで、新しいプロジェクトでは、利用者に対して、食事や健康について困っていることや興味のあること、好みについてヒアリング調査を行い、その結果に基づき、それぞれの食生活に合ったおかずを入れ、利用者の要望にカスタマイズしたお弁当を継続的に宅配・提供し、食生活におけるワンポイントアドバイスを添え、健康について考えるきっかけを提供するといったプロジェクトを考えました。

このカスタマイズ栄養弁当プロジェクトを検討するにあたって、ペルソナ像(対象者イメージ)を以下のとおりとしました。

○65～70 歳の健康志向な男性

○料理を始めるきっかけが欲しい方

○普段、外食・中食が多い方

○スマートフォンを活用している方

○ひとりで食事することがある方

このペルソナ像は参加条件ではなく、あくまでも事業設計の際の対象者イメージとして設定しました。このような事業計画をプレゼンテーションし、第二次審査も合格でき、2021 年度に 15 万円の補助金をいただくことができました。

4・5月は利用者のニーズ調査・利用者募集を行いました。また、広報活動に関しては、チラシを作成し、市役所での配布や社会福祉協議会を通じて、高齢者宅への配布、総社市広報誌への掲載、地元 FM ラジオへの出演など多岐に渡る活動を行いました。

最終的な利用者申込は 6 件でした(社会福祉協議会の方からの紹介 1 名、一般応募 5 名)。当初はお弁当の販売開始が 6 月の予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響で 7 月から販売・宅配を開始しました。利用者さん一人一人にヒアリングを行い、食事についてのお悩みや興味のあることをお伺いし、それぞれの利用者さんに合ったお弁当の調理・宅配を第 1・3 の

土曜日に行いました。

お弁当をご自宅に宅配する際には、メニューの紹介や健康についてのワンポイントアドバイスを行いました。さらに、お弁当を食べ終わった後に、美味しかった献立や次回の献立の要望についてのアンケート調査を実施しました。これらの調理に扱う食材に関しては、できる限り、地域の野菜を使うために総社の農家さんと連携を行い、地産地消にも取り組んでいます。



お弁当調理の様子(2021年)

#### 4. カスタマイズ栄養弁当プロジェクトを始めて良かったことや成果について

カスタマイズ栄養弁当は利用者の好みやお話しを伺ったことを踏まえて作成するため、毎回献立が変わります。献立や栄養価計算を行うときには、利用者さんの好みの具材、地域の野菜を使うこと、減塩などさまざまなことを考えているため少し難しい部分もありますが、利用者の方のことを想いながら、私達が学んでいる栄養学の知識を使って、お弁当の献立、調理、お届けまでできることをやりがいとして感じています。毎回、宅配に何うといつも温かく迎えてくださり、「今回は何が入っているかな」と楽しみにして下さいます。「おいしかった」「ありがとう」「この時間を楽しみにしていました」と声をかけて頂いたときは嬉しかったです。「この料理の作り方を教えてほしい」と言われ、レシピの紹介も行っています。月2回の宅配ではありますが、日々の生活に寄り添い、私達との交流やお弁当を通して、食事や健康に興味を持ってもらうことが出来ているのではないかと思います。私達自身も学びながら楽しく活動を行っています。



宅配されるお弁当(2021年)

また、お弁当を宅配することで栄養面だけではなく、別の副産物もありました。利用者の方から日々の暮らしで不自由なことのお手伝いを頼まれたことがあり、そういった要望を社会福祉協議会に伝え、解決のためのサポートをしたことがあります。地域で行政の手の届かないところの橋渡しのような役割も担っているのではないかと考えています。

初年度であった2021年度の1年間で計74食のお弁当の作成・販売を行いました。普段、関わることのない、高齢者の方々から実際に食事や健康についての悩みを聞くことで、私達学生にしかできないことがあることを実感しました。社会福祉協議会から紹介していただいた利用者の方は、自炊する能力がなく、配食にも飽きていて、私達学生とお話しができることや自分の好みにあったお弁当をととても喜んでいただけました。若い人と話す元気もらえる、ありがたいと声を掛けて頂くことも多く、私達のお弁当を必要としてくれている人達がいることを強く実感し、そういった方々に私達のお弁当を届けていきたいと思いました。また、私達が大学で学んだ栄養学や社会福祉学の知識を実際にアウトプットすることで、大学では得ることできない貴重な経験を得ることができたと思います。利用者の方々には、お弁当やレシピ紹介、私達とのコミュニケーションを喜んでくださっている方が多く、お弁当の価格についても、もっとお金を払ってでもお願いしたいとおっしゃってくださる方もおられたため、提供したサービスは満足度が高かったのではないかと思います。5名限定で始めた本事業ですが、私達のお弁当を本当に必要としてくださっている方々を見つける部分が難しかったように思います。今後は、私達のお弁当を必要とくださっているより多くの方に、お弁当の宅配をしていきたいと考えました。

## 5. パワーアップしたカスタマイズ栄養弁当プロジェクト～2年目～

事業開始時の2021年7月の利用者は6名、2022年1月から社会福祉協議会からの紹介で2名増え、計8名の利用者で本事業を行いました。2022年は、2021年度の活動を踏まえ、利用者の人数を15名に増やして活動しています(2022年11月時点)。また、資金面では、2022年度も同様の市民提案型事業に応募した結果、2021年度の活動の実績の評価も高かったのかわかりませんが、満額の50万円で採択されました。

また、事業開始時は古民家の旧堀和平邸で調理を行い車で15分の範囲のみでの宅配を行っていましたが、2021年12月から総社市役所前にあるFUN LIFE CENTER BUILDING(以下、FLCB)(<https://www.flcb.jp/>)のレンタルキッチンを利用しています。



事前説明会の様子(FLCB)



宅配されるお弁当(2022年)

献立を考えるにあたり、初回の利用者の方々へのヒアリング時に、2021年度同様に健康状態や食事の好みについて聞きとりをアンケートまたはお電話で行いました。そして、ヒアリング結果に基づき、その方に合わせた献立を作成していきます。献立のポイントとして、1日に必要な野菜の半分である175gを摂取でき、塩分量を2g未満に抑えたものとししました。また、地食バ公社・グリーンファーム・野菜畑クムレ・ねこ農園の総社市の野菜を使用し、身近な食材の美味しさや魅力を伝えようと連携を強めています。

2022年度も5月から継続して、第1,3土曜日に利用者の方の家まで車または徒歩でお弁当の宅配を行っています。もちろん、お届けの際に対象者の方とコミュニケーションを取りながら、次回の要望や、相談などを伺います。雑談も交えながら会話を行っていくことで、「お弁当が届く楽しみ」と、「他愛もないことを話すことのできる楽しみ」という2つの楽しみを持ってもらいたいと考えています。この月2回のお弁当を通じて利用者の方の普段の食生活における健康への気遣いなどに繋がってほしいと考えています。

新型コロナウイルス感染症が収まりつつある2022年現在、2021年度に比べて外食の頻度が増えてきているのではないかと考えます。しかしながらまだまだ中食・内食の機会は多く、特に高齢者は外食が困難で、食べたいものを食べに行けられない・人との交流が減っているという状況から、家庭での食事は健康に暮らしていくために重要な役割を担っていると考えられます。このような状況の中で、食べたいものを美味しく食べてもらい、元気に健康に暮らしていくためのサポートが必要なのではないかと考えています。2021年度の事業では、試験的に総社小学校区という狭い範囲で配達を行ってきましたが、お弁当を必要としてくださっている方が、総社小学校区以外にも多くいるということが分かり、食数を増やしました。しかし、食数を増やすにあたって、調理・宅配の面で多くの団体との協力が課題であると考えています。

調理面については、2021年度は利用者個別のお弁当を作っていましたが、利用者の食事や健康について困っていることや興味のあること、嗜好についてお話を伺い、「減塩弁当」「脂質控えめでたんぱく質多めのお弁当」「野菜たっぷり食物繊維多めのお弁当」「彩り豊かな季節献立のお弁当」の4種類のお弁当を作成することにしました。この基本4種類をもとに毎月

のアンケートから、対象者の方々の要望を取り入れ、カスタマイズしたお弁当を1年間継続的に宅配・提供しています。

また、宅配面については、私たちが高齢者の方々の食事や健康について気軽に話せる存在となり、多世代との交流により、地域のつながりの輪を広げることができればと思います。より多くの方にお弁当を届けるとともに、地域の高齢者の方と孫世代の私達の交流が、見守り支援の一環になると考えます。お弁当の提供が対象者の方の健康づくりのきっかけとなり、健康寿命の延伸に繋がることを期待しています。

現在の課題は、利用者が22名と2021年度から大幅に増えたため、設定している宅配時間までに調理が終わらないこともありました。また、配達の手段が限られているため、以前よりも配達に時間かかっています。そのため、総社市役所や社会福祉協議会で広報を行い、宅配のボランティアを募集していこうと考えています。

## 6. 最後に

私たち学生団体TAMAGOは、4名の先輩方の小さな活動から始まり、今に至ります。その都度、メンバーで話し合いを重ね、新たなプロジェクトにもチャレンジしてきました。このカスタマイズ栄養弁当プロジェクトもその一つです。名前の由来にもあるように、学生だからできないではなく、学生だからこそできることを今後もチャレンジしていきたいと思います。全国の大学生も殻を破って、大学生活を充実した毎日にできるよう、夢中になれることを見つけてほしいと思います。



みんなでお弁当詰め(2022年)

### カスタマイズ栄養弁当プロジェクト参加学生の人数構成

学年	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
人数	9名	10名	1名	1名	21名

2022年10月現在

#### IV. イベント型 ～楽しく有意義な時間を共に～

このスタイルでは、催しが企画され、その場に高齢者と若者が集い、交流が生まれます。お祭りなどの地域行事もこのスタイルですが、ここに挙げられる事例は、単なる交流にとどまらず、大変ユニークです。異世代が共に楽しみながら地域課題の解決に取り組んだり、後世に残したい作品の制作に取り組んだりします。

島根県雲南市にある Community Nurse Company 株式会社は、コミュニティナースの概念を地域に広め、まちを元気にする事業を展開しています。代表的な事業の 1 つ『地域おせっかい会議』では、住民が自分達のまちを自分たちの手でもっとよくしたい、という声をどんどん拾ってアイデアを出し合い、企画を実現していきます。高齢者も若者も、専門家でなくても自分の持つ専門性を発揮してまちを元気にしていく企画が展開されています。この会議を運営するスタッフは若者。住民の力を信じて、楽しんでこの事業をマネジメントする總山氏にお話を聞きました。

#### 11. Community Nurse Company 株式会社

##### 『地域おせっかい会議』



## Community Nurse Company 株式会社

所在地: 島根県雲南市木次町里方 422 番地

沿革: 2017 年設立

コミュニティナースとは:『人とつながり、まちを元気にする』コミュニティナースは、職業や資格ではなく実践のあり方であり、「コミュニティナーシング」という看護の実践からヒントを得たコンセプト。地域の人々の暮らしの身近な存在として『毎日の嬉しいや楽しい』を一緒につくり、『心と身体の健康と安心』を実現。その人ならではの専門性を活かしながら、地域の人や異なる専門性を持った人とともに中長期的視点で自由に多様なケアを実践する。

事業内容: コミュニティナースの育成・普及に関する支援  
コミュニティケア、地域医療、在宅医療に関する  
情報の提供、啓蒙、教育支援、講演会等の企画運営 他  
<https://community-nurse.jp/>

### 『地域おせっかい会議』

2019 年発足。「こんな困り事がある、本当はこんなことしたい！」といったまちの人の元気につながる声や思いを拾い、解決のアイデアを出し合って行動するためのコミュニティ。月に 4 回開かれる会議では、医療職に限らず、さまざまな立場の個人が参加し、お互いの強みを出し合いながら全力で議論し、アクションにつなげます。おせっかい人として登録しているメンバーは 284 人(2022 年 12 月現在)。

インタビュアー: マルティネス真喜子(京都橘大学)

インタビュー: 總山 萌 氏(Community Nurse Company 株式会社)

### ▼おせっかい会議の始まり

【マルティネス】

「地域おせっかい会議(以下、おせっかい会議)」とは、どのような事業ですか。

【總山】

ひと言で言えば、さまざまな立場の個人が、地域住民として、小さな声でつぶやかれる困りごとや願いごとを感じ取り、それを月 4 回の会議の場で共有して、困りごとの解決や願いごとの実現に向けて動くこと(つまり、おせっかい)によって、まちの課題解決を推し進め、まちを元気にする活動です。

【マルティネス】

おせっかい会議の活動は、どのようにして始まったのですか。

【總山】

以前から雲南市には、地域住民が地域の担い手としてチャレンジすることを応援してきた歴史があって、そのうちの一つに「幸雲南塾」という起業家育成プログラムがありました。「住む人がもっと楽しく暮らせるまちにしたい」とか「地域の課題解決を仕事にしたい」という人がプロジェクトを動かすこと、あるいは起業することへの支援に取り組んでいました。

そういう背景があるので、雲南市には、意志ある 30 代や 40 代の比較的若い世代が他府県から移住して来たり、「自分もまちづくりに参加してみたい」と考える地元の人びとがおられた

りします。

この幸雲南塾の卒業生の一人が、いま「地域おせっかい会議」の運営を担っている Community Nurse Company 株式会社(以下、CNC)を創業した矢田明子です。彼女のような働き世代の起業家を中心に呼びかけが行われ、まちを良くしたいと思う個人が年齢や立場の違いを超えて集まり、得意なことや強みを共有し、協力して「おせっかい」をする会議体を立ち上げました。それが、雲南省の「地域おせっかい会議」の始まりです。

初期メンバーは、会議を立ち上げる以前から、食やヘルスケア、林業など、各自の専門領域で奮闘している人たちでしたが、自分のネットワークだけではできることが限られます。そんなとき、「それぞれで奮闘するのではなく、同じような意志ある人が集い、お互いの強みを持ち寄って、ネットワークをつくり、面として雲南省を良くしていけたらいいんじゃないか。やってみようか」と考えました。そうして、おせっかい会議が任意のプロジェクトとして走り始めています。それが 2019 年のことです。行政公認として事業がスタートしたのが 2020 年なので、今年で 3 年目になりました。

#### ▼郵便局で、健康チェック、スマホ教室、終活相談？

【マルティネス】

「地域おせっかい会議」というユニークな名前ですが、その由来は？

【總山】

この事業を立ち上げるとき、住民のみなさんとおせっかい会議の名前について自由にアイデアを出し合うブレインストーミングをしました。この会議体で起こっていることについてお伝えすると、「これは、まさに”おせっかい”だよね」「そうだね。医療職が話し合う地域ケア会議というのがあるけど、まちのみんなで話すこの”おせっかい”な場って、まさに地域おせっかい会議なんじゃない？」という話になって、そのまま名前になりました。

【マルティネス】

おせっかいの具体的な事例を教えてください。

【總山】

例えば、郵便局の局長さんたちもおせっかい人として登録していらっやいます。ある局長さんは、郵便局は年金支給日に高齢者がたくさん来られるという強みを活かそうと考え、「せつかくだから、お金をおろすだけでなく、暮らしに役立つ情報を持ち帰っていただきたい。郵便局で『まちの保健室』ができないだろうか」と、おせっかい会議で提案されました。

というのも、お年寄りも定期的に来られるので、いつしか職員さんと顔見知りになるんですね。それで少し雑談もするようになると、その話題の多くが「ひざが痛い」など、病気や健康に関することなので、おせっかい会議の事業として、郵便局の一室で「まちの保健室」を開くことになりました。やってみると、とても好評で、途中でお友だちに「あんたもおいでよ」と電話をかけるお年寄りも(笑)。最初は、訪問看護師が血圧計を持ち込んで、簡単な健康チェックをしたり健康相談を受けていたのですが、そのうち IT に詳しい若者がスマホ教室を開いたり、牛

乳屋さんが骨密度計を提供してくださったり、行政書士の方が終活の相談を受けてくださるようになりました。そういうふうに関わっているうちに、「自分もやってみたいな」と考える人も出てきて、関わった人はみんな、どんどん巻き込まれていくそうです(笑)。

その他の局長さんたちも関わってくれています。郵便局ごとにおせっかいの在り方はさまざま、**「まちの保健室」**以外にも、局の大きな窓を子育て支援センターを利用する親子や近くの中学校にいる美術部の生徒たちと一緒に絵を描いたり、局内の広い壁に地元の人たちの丁寧な手仕事による作品を飾っていたりします。

### ▼おせっかい人は、コミュニティナースの視点を持った地域住民

【マルティネス】

いま、おせっかい人として登録している方は 284 人もいらっしゃると思います。たった 3 年でこれほど参加者が増えたのは、なぜだと思いますか。

【總山】

最初は一種の社会実験のようなつもりで、「こんな素敵なおせっかいをしたいので、みなさんも一緒におせっかいしませんか?」と呼びかけたところ、「実は私もおせっかいしたかったけど、1 人ではできなかった。でも、仲間がいるなら、何かおせっかいしてみようかなと思った」という多世代の人たちがだんだん集まってこられたのです。

旗振り役をやっていたら、いろいろな人が集まってきて、おせっかい人がまたおせっかい人を呼んで、だんだん市内に輪が広がっていった感じですね。

【マルティネス】

そして、いまでも順調に運営されているわけですが、その理由はどこにあると思いますか。

【總山】

ひとつは、雲南市におけるこれまでの活動期間の長さでしょうか。幸雲南塾 OB で CNC 創業者の矢田は 10 数年前から「コミュニティナース」を名乗って雲南市で活動していましたから、雲南市内では「コミュニティナース」という実践のあり方、健康に対する考え方に賛同してくれる仲間を着実に得てきた流れがあります。その影響は大きいと思います。

コミュニティナースは、ご存じのとおり、看護師という資格制度にとらわれず、住民の暮らしの身近なところで「楽しさ」や「うれしさ」を人びとと一緒に創り出し、心身の健康と安心を実現する存在ですから、おせっかい会議がコミュニティナースの視点を持った住民の手でまちを元気にしていく事業だという意味では、もともといたその仲間たちをこのタイミングでネットワークしたとも言えます。それが、今もなお輪が広がっているポイントかもしれません。

### ▼なにより自分が楽しめること。それが若者を惹きつける。

【マルティネス】

おせっかい会議は比較的若い世代の参加が多いというお話でしたが、なぜ若者が集まるの

だと思いませんか。

【總山】

おせっかい会議は、自分が楽しいと思えることで関わること、自分のペースで身近な人におせっかいすることを大切にしています。そのために、メンバーのみなさんに役割を強制する、または何か責任を課すことはありません。そういった自由度があるから、若い人たちが参加しやすいのではないのでしょうか。内心は「こういうふう

にしたほうが良いのではないかとか「こんな催しがあればいいのに」と思っている、「あなたが言ったのだから、あなたがやってよ」と言われたら、発言しにくくなりますよね。

私たちが目指しているのは「楽しいことをやって、まちを元気に」ということなので、おせっかい人は「あくまで自分の楽しいことをやっている」という認識です。行動のモチベーションは、責任感ではなく、「自分がやりたいからやっている」という主体性に基づくものなので、「やらされ感」はないと思いますし、そのようなことがないように運営する側としてもそこは意識しています。

みんなが楽しく動くことができるから組織もうまく回っていくという、組織のあり方の実例として世に伝えたいですね。



『地域おせっかい会議』  
マネージャー 總山 萌氏



地域おせっかい会議はオンライン参加者ともつながって、賑やかに開催されている。

## ▼民間が運営することの意味

【マルティネス】

おせっかい人は専門分野も年齢もさまざまです。そういう異なる人びとが「おせっかい」のために力を合わせる点ができるポイントは、どこにあるのでしょうか。

【總山】

いろいろな要素があると思いますが、ひとつは運営するのが行政ではないという点が大きいかもしれません。全国各地から行政職員の方が視察に来られますが、その際、「もし行政が事務局側だったら、ここまで住民の主体性を引き出すのは難しいかもしれない」というようなことをおっしゃった方がいました。

これはつまりどういうことかといいますと、もし行政がこの会議体を運営していたら、おせっかい人は「こういう事業をやってほしい」と行政に要望を伝えて、人任せにするようなスタンスになりがちです。しかし、民間が運営すると、行政に任せるという選択肢がそもそもなくなり、まちの人たち自身で何とかするしかないから、まちの人たちの考える姿勢も変わり、住民のみなさんによる創意工夫の力がうまれます。

それに、私たち運営する側は、住民のみなさん自身にその力があるということを確認しています。とかく人は頼る先があると頼ってしまうもので、医療の専門家がいたら、「医療はあの人に任せておけばいい」となり、だんだん主体性を失いがちです。しかし、最初から頼るという選択肢がないと、地域住民のみなさんはすごくパワフルに考えて動きます。そうして、住民の手で「おせっかい」をやり遂げたら、それで得たつながりをまた次の何かにつなげて、「じゃ、今度はこんなことをやろうよ」というふうに、まちを元気にするタネがあちこちで芽を出していきます。

## ▼「おせっかい」の定義とは何か

【マルティネス】

おせっかい会議を運営する経費は、どのように調達しているのですか。

【總山】

2019 年は任意で始めたというようにお話ししましたが、2020 年以降は雲南市の政策企画課の委託事業として運営しています。行政側としても、まちのいろいろなところから担い手不足の声が上がり、私たちから行政に「市民みんながまちづくりに総動員されていくような仕組みがあるとよいのではないかと提案して、CNC がおせっかい会議の運営業務を受託することになりました。

したがって、おせっかい会議の運営事務局機能は CNC が担っていて、私も CNC の一員です。

【マルティネス】

運営上、苦勞する点はどんなことですか。

【總山】

会議で、発案者、つまりやりたいおせっかいを発表した人の話を聞いた参加者のほうが高ぶりすぎて、発案者が「そこまで求めていないよ。軽い気持ちで言っただけなのに、そんなに先走ってもらっては困る」と引いてしまうことがありました(笑)。好き勝手に言えるおせっかい会議だからこそその現象ではあるのですが、あまりに壮大な話に発展しそうなときは、議論を収束に向かわせて行くタイミングで「壮大なことを1人でやるのではなく、まずは小さなことをみんなでやってみましょう！」という話をします。

他にも、おせっかい人としてメンバー登録はしたけれども、ライフステージの変化などによって、「いまはそこまでの熱量はなくて、家事や仕事もあるし、休日を使ってまで参加する余裕はない」と伝えていただいたこともあります。その場合は「やれるようになったら、またいつでも戻ってきてください。そのときにまた一緒にやりましょう！」と声をかけます。私たちは、その人とつながっていること自体に価値があり、困ったときに頼れる先としておせっかい会議のことを思い出してほしいと思っています。

事業全体としてこれから乗り越えていきたいこともあります。おせっかい人の皆さんが運営事務局の知らないところで素敵なおせっかいをどんどんされるようになってきました(笑)。自由におせっかいな活動をしていただくことは嬉しい反面、それによって生じるおせっかいの波及効果を追いきれないことが生じ始めています。

来年度には事業の対象地区が拡大して、さらなるおせっかい活動の増加が見込まれますし、何をもって「おせっかい実践」とするのか、そもそも「おせっかい」とは何か、その定義づけを乗り越えていく必要があるなど考えているところです。

## ▼継続するために、事業の価値を評価することの重要性

【マルティネス】

おせっかい会議を事業として継続させるために、必要なことは何だと思えますか。

【總山】

先ほどの定義の話とも関わりますが、この事業が提供する価値は何なのかを言葉で表現することが重要だろうと思っています。行政の業務委託費が財源である以上、おせっかい会議の事業が何をもたらしているかはきちんと説明できる形にしなければいけないし、それがひいては、他の地域に展開する足がかりにもなると思うので、事業の価値を評価し続けることが課題だと思えます。

いつ変化や結果が出るかは、何を求めるかによりますが、この事業はソーシャル・インパクト・ボンド(※SIB)の調査事業として受託しているので、第三者評価機関も設けています。

そこでは、おせっかい会議という会議体、ひいてはコミュニティが何をもたらしているのかについて研究しつつ、評価も依頼しています。いまはまだ「社会参加の増加と、孤独の低減に対する示唆が得られている」という評価ですが、コミュニティナースについての評価も同時に進めているので、それも考慮しながら、おせっかい会議の価値の評価に取り組んでいるところです。

私たちは、おせっかい会議は、ケアや医療とは一見接点のない分野の人たちが地域住民と接する可能性を広げていることを実感していて、そういう人たちがケアに関わることで雲南市全体のケアの総量を上げることができると考えています。それが結果的に、医療・福祉の分野に成果として現れ、住民のみなさんに健康と安心をもたらすことを期待しています。

#### ▼若者や女性の声を、住民の手で拾い上げる

【マルティネス】

人材を確保し続けることについては、どんな見通しを持っていますか。

【總山】

次の世代につなぐことを考えると、意志ある 20 代を集められるような、意志ある 40 代をどれだけメンバーに迎え入れることができるかがカギになります。つまり、中核になる世代をいかに惹きつけられるか、ですね。

雲南市は雑誌の「住みたい田舎ベストランキング」でナンバーワンと言われることがあって、その紹介記事で「地域おせっかい会議」を取り上げられたこともあります。その紹介記事に「若者が声をあげたとき、それがまちづくりに反映されていく仕組みだ」というようなことが書かれていて、本当にそうだなと思いました。

一般的に、若者や女性の声は自治体行政に届きにくい傾向がありますが、それが雲南市のおせっかい会議では、地域住民の手で拾い上げられていきます。これはとても価値のあることで、まさに「力を合わせて、地域をもっと住みやすく」というのが、おせっかい会議の意義を象徴的に表す言葉だと思います。

#### ▼おせっかい会議を社会システムに

【マルティネス】

おせっかい会議は、他府県でも取り組まれているのですか。

【總山】

愛知県豊田市でも始まっています。先ほどお話したように、雲南市はまだ SIB の調査事業の段階ですが、豊田地域おせっかい会議は SIB を活用した介護予防事業として走り始めています。

豊田市の場合は、雲南市のような多世代参加型というより、65 歳以上の高齢者が対象で、要支援・要介護認定を受けていない高齢者がどれだけ参加したかに成果指標を設定していて、それに対してお金が来るという組み立て方です。

つまり、豊田地域おせっかい会議は要支援・要介護認定になる人を未然にどれだけ減らせたかで成果を評価するわけですが、その土地ごとに歴史も人口構成も産業構造もまったく違うので、おせっかい会議のあり方も雲南市と違って当然です。

【マルティネス】

多様な世代の市民が参加するところが、雲南市のおせっかい会議の特徴ですね。

## 【總山】

どの世代を主なターゲットにするかは議論中ですが、せつかく移住者が多い地域でもあるし、やはり意志ある 40 代辺りを中心に、いろいろな世代の方に参加してほしいと思っています。

郵便局の雑談で「ひざが痛い」という話が出るように、ほんの小さな困りごとや心配ごとはまちの中にたくさんあります。そういう小さな声をおせっかい会議で拾い上げている感覚は現にありますし、それによって市民の健康と安心を実現していく「地域おせっかい会議」の取り組みに、私は大きな可能性を感じています。これからぜひ、社会システムとして全国の自治体に広まってほしいですね。

※ソーシャル・インパクト・ボンド(SIB)

PFS(成果連動型民間委託契約方式)による事業を受託した民間事業者が、当該事業に係る資金調達を金融機関等の資金提供者から行い、その返済等を成果に連動した地方公共団体からの支払額等に応じて行うもの(内閣府 Web サイトより引用)



コミュニティナースの拠点

雲南ラーニングセンター「みんなのお家」

『地域おせっかい会議』もここで開かれる。

## 12. 名寄市立大学

### 『おばあちゃんが伝えたい手作りレシピ』

日本赤十字北海道大学 地域・在宅看護学領域 特任教授 武田富美子



平成 29 年 3 月にレシピ集「おばあちゃんが伝えたい手づくりレシピ2」を発売した。

このレシピ集は、名寄市(なよろし)の大学生と訓子府町(くんねつがちょう)の「おばあちゃん  
の知恵袋サークル」のメンバーとの協働で作成したものである。レシピ集には、山菜料理  
(7 品)とおばあちゃんたちのおすすめ料理(8 品)を掲載している。

学生の住んでいる名寄市(なよろし)は北海道北部の中央に位置し、豊かな自然にあふれた環  
境で農業を基幹産業とした町である。令和 4 年 3 月末の人口は 26,212 人、高齢化率

33.4%で、日本最北の公立大学「名寄市立大学」を有し、保健・医療・福祉・保育における専門知識を有する人材を養成している。また、「おばあちゃんの知恵袋サークル」(以下、サークル)のある訓子府町は北海道東北部の内陸寄りに位置し、大雪山系の山々に囲まれた盆地で農業を基幹産業とした町である。令和 4 年 3 月末の人口は 4,688 人、高齢化率 39.5%である。

名寄市と訓子府町は約 190km(東京駅と静岡駅)離れているため、学生とサークルのメンバーが直接会って交流したのは 2 回であった。



#### 1. レシピ集づくりのきっかけ

サークルは、平成 18 年の秋に町の高齢者生涯学習事業「若がえり学級」に参加していた女性 7 名が、若いお母さんや子どもたちへ自分たちの得意料理や知恵を伝えたいとサークルを結成した。結成当時の平均年齢は 76 歳で、サークルの初仕事は町の社会教育課から依頼を受け、若いお母さんを対象としたおせち料理講習会であった。その後も町や放課後児童教室、学校のクラス親子行事などで料理講習会、町のイベントで地元野菜を使った手づくりおやつ

供、女性交流会のシンポジウムでの活動報告など、地域からの要望に応じてメンバーの得意料理や生活の知恵などを伝えていた。平成 22 年には、メンバーの知恵や得意料理を多くの人に伝え残したいと隣町にある日本赤十字北海道看護大学の学生(4 年生 4 名)と協働して第 1 号のレシピ集「おばあちゃんが伝えたい手づくりレシピ」を発刊している。

名寄市立大学では、平成 18 年の開学時から栄養・看護・社会福祉の混合学生グループをつくり、保健医療福祉連携の理論と実際を学ぶ専門職連携教育を実施している。フィールドグループワーク(以下、FGW)は連携教育の一環として 3 年生を対象に開講している。FGW は、選択制で 2 単位 60 時間の科目となっている。

平成 28 年度の FGW では、栄養・看護・社会福祉の各分野の知識を活用して、地域住民を対象にフィールドあるいは学内で事業または行事を企画・実施し、保健医療福祉の連携に加え地域との連携や協働について 3 学科混成で学ぶことを目的としていた。FGW を選択した学生は、教員によるプレゼンテーションを聞き、学生が希望のゼミを選択し配属先のゼミが決まる。筆者は、この FGW で学生とメンバーによるレシピ集の第 2 号を作成できないかと考え、大学とサークルのメンバーにレシピ集づくりを提案し了解を得て企画。教員によるプレゼンテーションを聞き、希望した 5 名の学生とサークルのメンバー(10 名)とで『おばあちゃんが伝えたい手づくりレシピ2』の作成に取り組み、その過程について以下に報告する。

## 2. レシピ集づくりをとおした世代間交流の取り組み

### 1) レシピ集づくりの目的

メンバーと学生との協働でレシピ集を作成し、高齢者の知恵やわざを地域へ伝えることを目的として活動を行った。

### 2) レシピ集づくりの参加者と役割

#### (1) 学生

レシピ集づくりを希望した大学 3 年生 5 名。男子学生 1 名、女子学生 4 名で、所属している学科は栄養学科 1 名、看護学科 3 名、社会福祉学科 1 名であった。

役割は、①レシピ集の原稿作成、②料理や生活の知恵などの取材と写真撮影、③第 2 回レシピ用調理のレシピ作成を行った。

#### (2) メンバー

メンバーは 10 名である。メンバーの構成は、80 歳代 5 名、70 歳代 4 名、60 歳代 1 名(平均年齢 80.4 歳、最高齢 88 歳、最年少 68 歳)、大学生とレシピ集づくり(第 1 号)の経験があるメンバーは 9 名であった。役割は、①レシピ掲載用のメニューの検討、②レシピ用調理の準備(会場確保、材料の準備)、③調理指導と料理のコツや思いなどを伝える、④レシピ原稿の調理方法や材料と量の確認及びアドバイスをを行った。

#### (3) 教員

看護系教員 3 名。教員の 1 名は、サークルの設立当初からメンバーと関わりがあり活動を共にしてきた。役割は①レシピ集作成の企画調整(内容検討と進行、編集の講師依頼と研修

の企画)、②レシピ用調理の準備・協力と報告(日程調整と関係者への連絡、宿泊先等の調整とスケジュール作成、第1回調理のレシピ作成及び第2回調理レシピ編集、調理の状況報告)③学生・メンバーの交流促進(学生とメンバーの紹介・状況及び経過報告、通信の作成)④レシピ集の編集支援及び印刷依頼、⑤印刷費等の活動資金確保を行った。

(4)協力者

編集指導者1名。指導者は研修会(2回)の講師として学生へレシピ集の作り方や写真の撮り方などについて教授し、編集過程では編集のアドバイスやサポートを担当。指導者は第1号のレシピ集作成時にも編集に関わっていた。

4)レシピ集づくりの取り組み過程

学生とメンバーが取り組んだレシピ集づくりの過程を①関係づくり、②レシピ用の調理、③レシピ集の編集に分け振り返る。レシピ集作成期間は平成28年3月～29年3月であった。

(1)メンバーと学生の関係づくり(表2)

学生とメンバーが対面で活動できるのは、訓子府町で行う調理場面の2回のみであった。そのため、出会う前から学生とメンバーへ両者の関係構築に努めた。実際に会う前の働きかけとしては、学生には授業の中でサークルの活動やメンバーの紹介を行ない、メンバーにはサークルの例会で学生が作成した写真入りの自己紹介文を使用して連携教育や学生の紹介を行い、交流相手や活動の様子をお互いに理解し出合いの期待感を高めるような働きかけに心がけた。

レシピ用の調理場面では、第1回目は自己紹介をしてから料理をはじめた。2回目の調理は、当日使うレシピを学生が事前にメンバーと確認をしながら作成し参加した。

レシピ集編集過程では、内容の確認や不明な点は電話や手紙でのやりとり、その他に教員が通信やお知らせを発行し、サークルの例会や授業でそれぞれの近況とレシピ集の進捗状況などを伝え、学生とメンバーの思いが継続できるように働きかけた。

表2 関係づくりの取り組み

	主な取り組み	メンバーの役割	学生の役割	教員の役割
3～5月	・学生・メンバーの紹介		・自己紹介文の作成	・資料作成 ・学生・メンバーの紹介
6～7月	・レシピ用調理の実施	・自己紹介 ・エピソードなどを伝える	・自己紹介 ・2回目調理のレシピ確認 ・調理時の取材	・学生とメンバーの交流促進
5～1月	・通信等の作成と発送 ・レシピ内容の確認	・レシピの内容等の確認とアドバイス(電話・手紙)	・レシピの作り方などの確認(電話)	・通信等の作成と発送 ・学生・メンバーの状況報告

### <メンバーと学生の関係づくりの様子>

初対面の状況を学生は、「(調理会場に)入ったときもみんな笑顔で、“待っていたよ”みたいな感じで受け入れてくれた」「自分の孫のよう」といわれた」と家族のように温かく受け入れてくれたと感じていた。メンバーの一人は、紙人形のついている壁飾りを学生に「良いお嬢さんにめぐり会えますように」と手渡し、他のメンバーは、「遠い所からわざわざきてくれたというだけでありがたい」と言いながら学生を迎え入っていた。学生は家族のように接してくれるメンバーからぬくもりや優しさに触れる経験と「なんでも聞いていいんだ」と安心感を得て、取材や調理に積極的に参加していた。メンバーは「孫より若いので違和感があるかと心配をしていたが、学生が積極的に聞いてくれるので違和感はなかった」と会う前は不安を抱いていたが交流する中で違和感はなくなっていった。また、「(学生に)小さい声で言われると何を言っているかわからなかった」と高齢者の身体的特徴をとらえた対応を望んでいた。

交流についてメンバーは「もっと交流があるとよかった」、「その場限りでなく、後から確認してくれるのがうれしい」、学生は「もっと会いたかった」とメンバーも学生ももっと話をしたり会いたかったという気持ちを抱いていた。ケガで入院されたメンバーへ学生が手紙を書いたり、メンバーからの手紙を見て励まされたりとレシピ集づくり以外の場面でもメンバーと学生のやりとりもみられた。

また、学生は「直接、顔を見て話したかった」と相手の顔を見て関わることも望んでいた。現在、コロナウイルス感染の蔓延により通信環境もすすみ、オンラインでの交流も可能となってきた。今回のように遠隔地での世代間交流を行う場合は、顔が見えて交流できるオンラインの交流も有用と思われる。

### (2) レシピ用調理の取り組み(表2)

レシピ集づくりは、メンバーが料理を伝え学生が取材をして編集するという役割分担をしてすすめた。

レシピ用の料理づくり(以下、調理)は訓子府町で実施し、学生と教員は1泊2日の行程で参加した。第1回目の調理は「山菜料理」で山菜の天ぷら、行者にんにく入り餃子など6品、第2回目は「おばあちゃんのおすすめ料理」としてうどん(麺とつゆ)、でんぷん団子など7品を調理した。参加者は、学生やメンバーの他に普段メンバーの活動に参加している子育て中のお母さん、車椅子の男性とその介護者の地元大学生が希望して参加していた。

表2 調理の参加者

	日時	内容	参加者
第1回	6月5日	山菜料理	20名(メンバー7名 学生5人 教員3人 その他5人)
第2回	7月24日	おばあちゃんのおすすめ料理	20名(メンバー9名 学生5人 教員3人 その他3人)

調理の企画にあたっては、教員が例会に参加したりサークルのリーダーなどと連絡を取りながらメンバーと一緒に検討した。献立の検討、会場や調理材料の準備はサークルが担当し、学生は写真撮影、豆知識などの取材と調理の手伝いを行なった。スケジュール企画、メンバーや学生の送迎、宿泊などの手配は教員が担当。調理当日に使うレシピは、1 回目が教員、2 回目は学生が作成し、メンバーには郵送で事前配布を行った。当日の料理は約 3 時間で 6～7品を分担して調理を行った。学生は、取材や写真などの役割を分担して 1 回目の調理に臨んだところ、メンバーの料理のスピードが早く思うような取材ができなかった。2 回目は事前に料理の担当を決めて参加した。メンバーも 1 回目の調理はリーダーを中心に進めたが、料理の作り方が違ったり、進行に時間がかかったことから、2 回目は事前に料理の担当を決めて調理に臨んだ。教員は、高齢なメンバーが多いので調理会場に休憩用の椅子の設置や健康管理、会場までの送迎の確認と手配を行った。(表3)



メンバーの指導を受け、うどんの下処理中



行者にんにく入りの餃子づくり

表3 レシピ用調理の取り組み

	取り組み内容	メンバーの役割	学生の役割	教員の役割
4～5月	・第1回調理の企画準備	・例会の開催(2回) ・調理の献立と役割分担の検討	・調理時の役割分担の検討	・行程表の検討と関係機関との連絡調整 ・サークル例会参加(献立と役割の確認)
6～7月	・第2回調理の企画準備と実施	・例会の開催(1回) ・調理会場と調理材料の準備 ・調理当日の料理説明と調理	・第2回調理のレシピ作成 ・担当メンバーに不明点などの確認	・行程表の作成と関係機関との調整 ・宿泊先・送迎の確保 ・例会の参加 ・第1回目調理のレシピ作成 ・作成レシピのアドバイス

<調理の取り組みの様子>

1 回目の調理は山菜料理で実施時期が 6 月上旬のため、北海道でも山菜が少ない時期であった。メンバーは山菜を旬の時期に採って冷凍保存をし、少ない山菜を見つけて当日に持ってきてくれた。1 回目、2 回目の調理は、メンバーの下準備のおかげで 3 時間ほどで料理を完成することができた。学生は 1 回目の反省を踏まえ、2 回目の調理では「自分の担当料理を意識して豆知識を聞く」と役割分担を行い、「おばあちゃんの調理のスピードに複数の学生で対応」とチームワークを発揮しながら取材と調理を行っていた。学生とメンバーは役割分担しつつ臨機応変に調理と取材を進めていた。

学生は取材をとおして、学生の質問に対するメンバーの「回答の豊富さ」や「自分たちの知らない知識を持っている」とメンバーの豊富な経験と知識に驚き、「高年齢なのにパワフルに動いている姿」を見て、高齢者に対して支援の対象ではなく学ぶ対象として高齢者をとらえていた。



### (3) レシピ集編集の取り組み (表4)

学生も教員も編集作業に慣れていないため、第 1 号のレシピ集に関わりのある製本関係者に依頼して編集作業の研修会を 2 回開催した。編集過程では編集のアドバイス、写真の修整や校正などのサポートを受けながら編集作業を行った。編集作業は、学生の実習やメンバーとの原稿確認のやりとりなどで思いのほか時間がかかった。しかし、出来上がったレシピ集は表紙や料理のポイント、豆知識など学生の視点や特技を生かした内容となっている。

完成レシピは、A5 版 46 ページでカラー印刷 500 冊

発行日は平成 29 年 3 月 21 日

掲載料理は、地元の食材を使った“山菜料理編”と

“おばあちゃんのおすすめ料理編”で構成し、

メニューは以下のとおりである。

◆山菜料理編……山菜の天ぷら、行者にんにく入り餃子、行者にんにく寿司

山菜太巻き、ヨモギ饅頭、うどの酢味噌和え、ふきのとう味噌

◆おばあちゃんのおすすめ料理編……うどん、しそと茄子のみそ炒め、なまくら漬け

でんぷん団子、りんごのフライ、大根のフライ、煮豆、塩麴



学生の作成した表紙のイラスト

表4 レシピ集編集の取り組み

	取り組み内容	メンバーの役割	学生の役割	教員の役割
3～5月	・レシピ集の検討 ・編集の研修企画 ・資金の確保	・レシピ集の構成検討	・レシピ構成の検討 ・調理の時の役割検討	・サークル例会参加 ・編集の研修企画準備 ・補助金申請
6～7月	・調理の取材・写真撮影 ・編集の研修開催(2回)	・第2回調理用レシピの助言 ・料理のコツなどを学生へ伝える	・調理時の取材と写真撮影 ・編集研修へ参加	・第1回調理のレシピ作成 ・編集研修の企画と調整 ・学生作成レシピの助言 ・使用レシピの発送
8～2月	・レシピ集の編集作業 ・レシピ集掲載料理の試作(3回) ・印刷発注	・レシピ集の内容確認や質問への回答 ・校正とアドバイス	・レシピ集の構成検討 ・編集作業と校正 ・メニューの試作	・レシピ集の編集と校正 ・メニューの試作 ・編集指導者との連絡調整 ・印刷発注

<レシピ集編集の取り組みの様子>

学生は編集にあたり初めて見る人にも読みやすい、分かりやすいレシピ集にしたいと、①写真やイラストなどの活用、②メンバーの協力を得て適量をできるだけ数量化、③メンバーの生活の知恵や料理のポイントなどを聞き取り掲載していた。

一方で、メンバーの手業(わざ)を伝えたいが、聞いても「口頭でうまく説明できない」と言われ、学生自身も「手業(わざ)をうまく言葉にできない」と感じ、「言葉より一緒にやった方が伝わる」とわざを言葉にする難しさと一緒に活動することの必要性を感じていた。

メンバーも「手加減などを数値にして教えるのが難しい」と感じつつ、具体的な手加減の仕方を考え学生に伝えていた。

それを学生が文章化しレシピ集へ掲載したことに驚きと感謝をしていた。

メンバーにとって完成したレシピ集は、「昔のおばあちゃんたちに教わった知恵を若い人たちに伝え、残すことができた」と知恵の伝承の機会ととらえていた。学生は最後の活動発表で、「大変であったけれど最高のものにしたいという気持ちで一生懸命に取り組み、

おばあちゃんたちと共に作ったレシピ集を多くの人に見てもらいたい」と報告していた。



うどんの麺づくり

### 3. 活動を始めるにあたっての準備

活動を始めるにあたっての準備として、事業の協力者、活動資金の確保、移動手段の確保を行った。

#### 1) 事業の協力者

レシピ集づくりは、長年、訓子府町で若いお母さんや子どもたちへ料理を教え、レシピ集を発行した経験のあるメンバーに依頼した。レシピ集の編集は、高齢者へ取材をしてレシピ集として編集ができる大学生が適任と思い、大学の連携教育としてできないかと大学に相談し、サークルと大学から承諾を得てレシピ集づくりに取り組んだ。また、編集作業に詳しい製本関係者に講義と編集作業のアドバイスの協力を依頼した。

#### 2) 活動資金の確保

活動にはレシピ集の印刷代、講師料、調理関係などの資金確保が必要であった。そこで大学の研究・事業の補助金を申請し活動資金を確保することができた。

#### 3) 移動手段の確保

名寄市からメンバーが暮らしている訓子府町へ行くには、公共交通機関では 7～9 時間ほどかかり本数も少なく移動にはバスが必要であった。大学の理解もあり大学のバスを利用して学生と教員が訓子府町に赴き活動することが可能となった。

### 4. 苦労したこと

編集作業は、学生も教員も経験が少ないため何回も内容や表現などの修正に時間を要した。また、実習を伴う学科のため全員そろっての編集作業を行うことが少なく、実習のない学生が一人で頑張って編集作業を行うこともあった。教員は編集作業の協力と学生のモチベーションの維持に配慮した。

### 5. キーになったと思う成功・失敗要因、

#### 1) 成功要因

◎レシピ集づくりは、協働して取り組める世代間交流プログラムであったこと。

レシピ集づくりは、学生とメンバーの役割や目的が明確で、支援する、される関係ではなく、お互いの特技や強みを発揮し協働して取り組めるプログラムであった。

◎世代間交流をすすめるコーディネーターの存在

教員は、全体の企画調整を行うほかに、高齢者と学生、高齢者・学生と他の人をつなぐ役割、資金や宿泊先の確保、情報提供など活動のサポート役割、研修や作業を共に行い楽しく学びあえる環境づくりに努めた。

◎学生へのメンバーによる温かい受入れと関係づくり

メンバーは過去の活動体験をとおして若い世代との交流の仕方を体得し、初対面の学生にも家族のように接していた。そのため、学生は緊張や不安を和らげメンバーと積極的な交流ができ、メンバーも学生の積極性に答えようと関わり、相互の交流を深めていったと考えら

れる。

## 2)失敗要因

◎編集作業に時間がかかり学生の負担が大きかった。

単年度で完結する取り組みのため学生の負担が多くなった。複数年かけて取り組むプログラムの検討も必要と思われる。

## 6. 活動継続にあたっての課題

レシピ集づくりは、「おばあちゃん知恵袋のサークル」の活動の一環としての取り組みでもあった。現在、サークル活動そのものが困難になってきている。

おばあちゃんの知恵袋サークルにとって今回作成したレシピ集は第2号で、第1号のレシピ集から6年を経て発刊することができた。活動の中心メンバーは、現在80歳代後半から90歳代前半と高齢になっている。この数年間でメンバーの病気や体力の低下などで活動に参加できるメンバーが少なくなってきた。新しいメンバーも増えないので今までのような活動ができなくなり、コロナウイルス感染症の蔓延で活動も休止している。現在、活動を再開するにあたり、どのような活動ができるのか、メンバーの体力や希望を踏まえた活動を考えていかなければならない。状況によってはレシピ集作成の継続はできないかもしれないが、若者と共に高齢者の持っている知恵や技を伝え、学びあえる場づくりと、若者や高齢者、障害のある方々、子育て中のお母さんなどと多世代交流ができないかと活動のあり方を模索している。

高齢者の持っている暮らしの中での知恵やわざを次の世代にどう伝え残すのか。残された時間は多くはないかもしれない。



日本赤十字北海道大学  
地域・在宅看護学領域  
特任教授 武田富美子 氏

## まとめ

12 の先駆的事例から、若い世代(学生等)による高齢者の生活支援や、若者と高齢者の世代間交流に関する大変興味深く、参考にしたくなるようなアイデアが得られました。とくに、若者と高齢者の世代間交流のしかけ作りと継続性に関して、多くの示唆を得ることができました。我々が支援や交流が継続できていくことは大きな課題ではありますが、12 事例から得られた継続性の課題を克服していけるポイントとなる要素をまとめてみました。

### 事例からわかった世代間交流継続のポイント

1. つなぐ (コーディネート・マッチング)
2. 経営 (マネジメント)
3. 場 (社会的インフラ)
4. 楽しむ (エンジョイ)
5. 個 (インディビジュアル)
6. 地域創生 (コミュニティデザイン)

## 1. つなぐ (コーディネート・マッチング)

すべての事例を通して、世代間交流を展開するにあたって若者と高齢者だけでなく、様々な人々が連携をしています。地域に住むあらゆる世代の住民、行政、教育機関、第3セクターの機関等です。ただし、これらの人々がバラバラに存在しては機能しません。今回の事例を通して明らかなのは、人々をつなぐコーディネーターが存在するという事です。この存在が大変重要で、まさに活動のキーマンとなっています。高齢者と若者をつなぐ、大学と行政をつなぐ、企業とNPOをつなぐ、専門家と地域住民をつなぐ等様々なケースがありますが、効果的なつながりをもって世代間交流も成立しています。

しかし、そのキーマンがいなくなれば、たちまち活動が機能しなくなる、というリスクも考えられます。

事例9や事例12. では、学生と高齢者の世代間交流を支えるため、大学教員がコーディネーターとして重要な役割を果たしています。事例7. では、鈴木氏が学生の相談窓口や人材育成の役割も兼ねつつ、地域の高齢者とのマッチングを行うコーディネーターという重要なポジションです。事例1. の竹山団地の事例では、大森氏がキーマンです。竹山団地プロジェクトを展開するにあたりステークホルダーとしっかり連携をとっています。そして、その役割を徐々に若者に移行することも行われているところがポイントです。NPO 法人を立ち上げ、卒業生をマネージャーに据え、いずれ運営を任せられるように伴走しています。事例4. 「街 ing 本郷」の長谷川氏は、NPO 活動そのものがマッチング活動で、様々な人々をつないで化学反応を起こすキーマンです。後継者がいないのが現状で、目利きのできる優秀なコーディネータ

一の養成が重要課題であると述べています。

このように、世代間交流の継続を考える時、つなぐ人(コーディネーター)の存在とその後継者の養成がカギになりそうです。

## 2. 経営 (マネジメント)

活動を継続していくには、資金が必要です。各事例で、経済的基盤を構築することも工夫されていました。

まず、設置母体そのものを設立する段階で、高齢者支援や社会貢献をビジネスとして運営していくためにマネジメントについて専門家から学び、サポートを得られている事例がありました。事例5. の「一般社団法人 えんがお」の濱野氏は、若い作業療法士ですが、起業家、経営の専門家が所属する「NPO 法人 とちぎユースサポーターズネットワーク」のサポートを得て、法人を設立しています。また、事例8. の「株式会社 LibertyGate」の菅原氏は、大学在学中に、様々な起業家や経営者の方と知り合うことでビジネスアイデアや考え方を学び、株式会社を設立しています。このように、若い経営者が、マネジメントの専門家から学び、高齢者支援のビジネスモデルを作り上げていることは、世代間交流の継続に期待できます。

さらに、活動を継続していくには一定のコストがかかるため、組織自体が経済的に自走できていくことが望ましい、ということになります。地域貢献活動を行うことで行政から助成金を得たり(事例4, 事例5, 事例 10)、行政から業務委託を受ける(事例5, 事例11)こともあります。また、認定 NPO 法人になり、個人や企業から寄付を受けやすくする(事例 4)ことで、自走を実現化している事例もありました。

効果的にマネジメントができると、サービス提供者である若者にもメリットが増えます。例えば、サービス提供者である学生に報酬が支払われる、有償ボランティアのシステム(事例1, 事例7, 事例8, 事例 9)があり、事例4では、将来的に学生の家賃を無料にしたり、奨学金を出すことを検討されています。このように、サービス提供者を大切にするシステムを作ることで、若者の高齢者支援や地域貢献のモチベーションを高め、世代間交流の継続に期待できます。

より良い地域社会を創生すべく、若者が起業しソーシャルビジネスを運営することで、継続性を生み、世代間交流が日常生活に溶け込んでいる事例があります。経営や福祉等を学ぶ大学生が、在学中にこのようなケースについて知る機会が得られると、地域で活躍する若者が増えるのではないかと思います。在学中に地域の第3セクター機関がインターンシップとして学生を受け入れることも有効ではないかと思います。

## 3. 場 (社会的インフラ)

高齢化が進む地域では、地域に暮らす高齢者の孤立の予防と解消が喫緊の課題となっています。しかし、孤立する可能性があるのは高齢者だけではなく不登校や社会になじめない若者、進学のため一人暮らしをする学生も同様です。家に居ては孤立するとはいえ、出かけるにも、

行く場所がなければどうしようもありません。事例5。「一般社団法人 えんがお」では、コミュニティハウスみんなの家が高齢者や若者の居場所となっています。ここへ来ると、顔を合わせてあいさつをして、お茶を飲んだり、おしゃべりをしたり、自然な交流が生まれる空間になっています。事例6. の「豊中めぐり」では、市内に 8 か所の農園があり、高齢男性が集って農作業できる居場所となっています。何か作業をしてもいいし、しなくてもいい、自由に過ごすことができる場所になっています。イベントを開催することで子どもや若者を交えた交流の場となります。

エリック・クリネンバーグは、著書『集まる場所が必要だ』(2021)の中で、**社会的インフラ**の重要性について述べています。社会的インフラとは、図書館・学校・遊び場・公園・運動場・スイミングプールなどの公共施設、中庭・市民農園などの緑地、人々が集まる固定的かつ物理的なスペースがある教会や市民団体の施設、定期的に開かれるマーケットや商業施設などを言います。社会的インフラは社会関係資本(ソーシャルキャピタル)が育つかどうかを決定づける物理的条件であり、健全な社会的インフラがある場所では、人間同士の絆が生まれ、自然に人間関係が育つとも述べられています。事例5. や事例6. では、健全な社会インフラを提供しているといえます。若者と共に、地域にもっと社会インフラを充実させるアイデアが出せることで、孤立の課題が解決していくのではないのでしょうか。そして、若者と高齢者だけでなく地域の様々な人々が、自然にかつ継続的に交流できるコミュニティになっていくのではないのでしょうか。

#### 4. 楽しむ (エンジョイ)

ほぼすべての事例で述べられている重要なキーワードは、「**楽しくないと続かない**」です。若者も高齢者も楽しんで活動することが継続には不可欠であるということでしょう。特にサービス提供者となる若者が、自主的に高齢者支援に取り組んでいるとき、自分が楽しいからやっているのだ、と思っていることが重要です。若者の活動をサポートするコーディネーターは、若者のイニシアティブを奪わないこと、効果的な動機付けをすること、達成感を得られるようにすること、若者が自らの成長を実感できるようにすること、などを考慮し、楽しんで活動できる場を提供していくことも重要です。

#### 5. 個 (インディビジュアル)

地域で暮らす人々を「高齢者」「若者」と括ってしまうのは適切ではないかもしれません。人それぞれニーズは異なり、生活も異なっています。事例7. の「社会福祉法人ゆうゆう」は、『ひとりのニーズ、ひとりの想いに寄り添う』ことを理念に掲げられています。地域で暮らす個人が尊重され、高齢者も若者も、互いに個と個が繋がっていくことで絆が生まれ、安全で安心な生活がもたらされるのかもしれません。

#### 6. 地域創生 (コミュニティデザイン)

寛裕介監修の著書『地域を変えるデザイン』(2012)で、コミュニティの語源について記して

います。「コミュニティ」はもともとラテン語の「コミュニース」という言葉だったそうです。この言葉を2つに分けると、前半の「コム」は「一緒に」とか「共同して」という意味で、後半の「ミュニース」は「貢献」とか「任務」という意味だそうです。つまり、コミュニティというのは「共同して何かに貢献すること」や「一緒に任務を遂行すること」という意味を含んでいるそうです。

超高齢化社会を迎えて、私たちの暮らす地域では生活上の支援を必要とする高齢者の方々が増えている、という課題が見つかった時、どのようにしてより良い地域にしていけるかをそこに住むすべての住民が考え、取り組んでいく必要があります。より良くしていけるのは、住民でしかありえないのです。地域住民には力があります(事例11.「地域おせっかい会議」より)。中でも若者は地域の未来を担っています。事例10. の手作り弁当を配達するサービスを実施した栄養学科の学生グループ TAMAGO の事例では、若者にはここまでできる力がある、と示してくれています。また、事例12. のおばあちゃんの手作りレシピ集作りでは、高齢者の英知を若者に示してくれています。それぞれの地域が可能性の宝庫です。自分たちがどんな地域で暮らしたいのか、高齢者になるのが楽しみになるような社会(事例8. LibertyGate の理念)を想像し、創生できることが重要ではないかと思われまます。若者をはじめとした地域住民が理想とするコミュニティをデザインしていくことです。世代間交流が、未来の地域社会の希望となり、若者の希望となることを願ってやみません。



図. 事例からわかった世代間交流継続のポイント

「世代間交流の継続のポイント」図の説明

高齢者と若者の関係を支援される者と支援する者という構図でとらえることはもうないでしょう。高齢者と若者の関係は、未来への希望を生む、可能性に満ちたものです。世代間交流の継続の6つのポイントが結晶の形を構成しています。結晶はカラフルで、明るい未来を印象づけます。中心部分は空白ですが、各地域の特性に応じたポイントを埋め込んでいただくと地域オリジナルの未来を創造していけると考えています。

## 事例収集に関するスケジュール

### 取材

	事業名	取材先	取材日
1	神奈川大学 サッカー部 「竹山団地プロジェクト」	神奈川大学 サッカー部監督 大森 西三郎 氏 於：神奈川県横浜市 竹山団地	2022年10月3日
2	豊中市社会福祉協議会 「豊中めぐり」	コミュニティソーシャルワーカー 勝部 麗子 氏 於：豊中市『和居輪居』	2022年10月8日
3	Community Nurse Company株式会社 「地域おせっかい会議」	Community Nurse Company 株式会社 總山 萌 氏 於：島根県雲南市 Community nurse Company みんなの家	2022年10月11日
4	一般社団法人「えんがお」	代表理事 濱野 将行 氏 於：栃木県大田原市 えんがお	2022年10月28日
5	札幌市 もみじ台団地プロジェクト（1）	札幌市都市局市街地整備部 石丸 卓哉 氏 於：札幌市役所	2022年11月28日
6	社会福祉法人 ゆうゆう	鈴木 美幸 氏 於：石狩市当別町当別町 共生型地域福祉ターミナル	2022年11月28日

### オンライン取材

7	認定NPO法人 街ing本郷 「書生生活」	代表理事 長谷川 大 氏 於：Zoom	2022年11月18日
8	札幌市 もみじ台団地プロジェクト（2）	北星学園大学 社会連携課 鹿熊 裕志 氏 学生 松本紗奈さん 於：Zoom	2022年12月23日

### 執筆

	事業名	執筆依頼先
9	高齢者を対象とした生活支援サービスのマネジメントシステム構築	千葉商科大学 准教授 齊 藤 紀 子 氏
10	おばあちゃんが伝えたい 手づくりレシピづくり	日本赤十字北海道看護大学 特任教授 武田 富美子 氏
11	神奈川県住宅供給公社	神奈川県住宅供給公社 総務部 総務広報課 石井 佳代子 氏
12	学生グループTAMAGO 「手作り弁当プロジェクト」	岡山県立大学 保健福祉学部 教授 岩満 賢次 氏 + 学生グループTAMAGO
13	株式会社Liberty Gate	株式会社Liberty Gate 代表取締役 菅原 魁人 氏

監修

平出 敦 (京都橘大学健康科学部救急救命学科)

松本 賢哉 (京都橘大学看護学部)

編集

マルティネス真喜子(元京都橘大学看護学部)

令和4年度厚生労働省老人保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業  
若い世代（学生等）による高齢者の生活支援に関する調査研究事業

## 先駆的事例集

---

令和5（2023）年3月

発行 学校法人京都橘学園 京都橘大学

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町3-4

TEL 075-571-1111（代表）